

レイモンド・チャンドラー プレイバック

山形浩生 訳



Raymond Chandler PLAYBACK

プレイバック

Playback (1958)

レイモンド・チャンドラー

Raymond Chandler

山形浩生訳¹

v. 1.04

翻訳期間：2025 年 12 月 28 日-2026 年 1 月 6 日

¹ hiyori13@alum.mit.edu 原著著作権は期限切れ。翻訳は、[Creative Commons 表示 4.0 国際, CC BY 4.0](#) で公開。出所を明らかにすれば商業利用を含め自由に使用可

ジーンとヘルガに²

2 *Playback* は 1958 年刊だが、その後編集者のギトリン兄弟だか親子だかが、1986 年に著作権を更新。アメリカでは 1978 年以前の著作は、著作権発生＝刊行から 28 年以内に更新申請することで著作権がのばせるため。

もともとの献辞には「この二人がいなければ本書は決して書けなかったであろう」という追加の文があり、邦訳の清水訳にはこれが残っている。ただしチャンドラー自身がかかなり早い時期にこの部分を削除しており、現在の版にはない。ジーンはチャンドラーが妻と死別してから、本書初期の執筆と生活のたてなおしに貢献した秘書ジーン・フラカッセ、ヘルガは文芸エージェントにして愛人ヘルガ・グリーン。献辞を削ったのは、この両者との関係変化のせいとか、チャンドラー自身がこの作品を気に入っていなかったせいとか、憶測はいろいろある。

目次

[1].....	4
[2].....	8
[3].....	16
[4].....	19
[5].....	24
[6].....	31
[7].....	34
[8].....	41
[9].....	46
[10].....	55
[11].....	61
[12].....	67
[13].....	69
[14].....	72
[15].....	74
[16].....	84
[17].....	91
[18].....	108
[19].....	111
[20].....	114
[21].....	117
[22].....	123
[23].....	127
[24].....	131
[25].....	136
[26].....	139
[27].....	146
[28].....	148
訳者あとがき.....	151
Version History.....	158

[1]

電話の声は鋭く有無を言わせないものらしかったが、あまりよく聞き取れなかった——まだねぼけていたせいもあるし、受話器をあべこべに持っていたせいもある。おぼつかない手でそれをひっくりかえし、もがもがと答えた。

「聞こえたのか？ 弁護士クライド・アムニーだと言ったんだが」

「クライド・アムニー、弁護士のアムニーさんね。そういう名前の人は多いですからねえ³」

「君はマーロウ、そうだな？」

「ええ、そんなとこっすねえ」腕時計を見た。朝六時半、絶好調という時間じゃない。

「小賢しい口をきくんじゃない、この若僧が」

「すみませんねえ、アムニーさん。でも若僧ってほどでもなくて。老いぼれで、くたくたで、コーヒーなしまみれ。どういったご用件でしょうかね？⁴」

「特急スーパーチーフ号が八時に着くのを待って、乗客の中からある女子を見つけ出し、どこかの宿にチェックインするまで尾行して、私に報告すること。いいな？」

「いいえ」

「なぜだ？」相手はびしゃりと言った。

「それじゃ依頼を引き受けていいかもわかりませんって」

「私はクライド・アム——」

3 I thought we had several of them. 前の部分が、数あるアムニー氏の中でも弁護士のアムニーなんだぞ、と強調しているように聞こえるのでマーロウは「アムニーもいろいろですからねえ」というニュアンスで皮肉っている。田口訳「弁護士はもう間に合ってると思ってたもんでね」清水訳「そう聞こえたような気がする」は二人ともピントはずれ。村上春樹訳「どちらにもいくつか心覚えがあったもので」は、うーん、まあ完全にはずれでもない。

4 このところ、田口訳は「いったいどういうご用件なんでございましょうや、弁護士の先生？」と、このやりとりでのマーロウの嫌味な感じをがんばって出している。原文にないものをつけるのは減点だが、努力賞。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

おれは口をはさんだ。「それはわかりましたって。吹き出しちゃうじゃないですか⁵。とにかく基本的な事実だけ話してくださいよ。別の探偵のほうが向いてる仕事かもしれませんよ。こっちは FBI とはちがうんでね」

「そうか。うちの秘書、ヴァーミリエ嬢^{さん}が 30 分で君の事務所に行く。必要な情報は持たせる。とても有能な秘書でね。君もそうだといいんだが」

「朝飯を食ってからのほうが有能でしてねえ。秘書さんにはこっちに来てもらえませんかね？」

「こっちってどこだ？」

ユッカ街の自宅住所と、その見つけ方を教えた。

相手は不満げだった。「仕方ない。だが一つだけ、絶対にはっきりさせておく。尾行には絶対に気づかれるな。肝心なところだぞ。私はワシントンのきわめて有力な弁護士事務所の依頼で動いているヴァーミリエ嬢^{さん}が経費の前渡し金いくらかと、依頼費二五〇ドルを支払う。高い能力を見せてほしいものだな。そしておしゃべりは時間の無駄だ」

「ベストをつくしますよ、アムニーさん」

相手は電話を切った。おれはなんとかベッドから出てシャワーを浴び、ヒゲを剃って、三杯目のコーヒーをすすっているところへ、呼び鈴が鳴った。

「ヴァーミリエです。アムニーさんの秘書よ」という口調はいささか蓮っ葉だった。

「お入りください」

かなりイカした娘だ。白いベルトつきのレインコート、帽子はなし、手入れの行き届いたプラチナヘア、レインコートにマッチした足首までのブーツ、折りたたみ式の化繊の傘⁶、青みがかった灰色の目は、こっちが下品な発言でもしたかのようにキツとしている。レインコートを脱ぐのを手伝った素敵な香り。その脚は——見たところでは——決して不快な眺めじゃない。超薄手のスケスケストッキングをはいている。おれはいささか食い入るようにそれを見つめた。特に彼女が脚を組んで、タバコを差し出して火を求めたときには。

5 I might get hysterical. Get hysterical というのは感情的になる、という意味だが特に俗語ではこらえきれずに笑い出す、という意味になる。マーロウは「バカみたいに同じこと繰り返すな、ヘソが茶を沸かすぜ」と言ってるのだ。邦訳はどれも失格。田口訳は「もしかしたらちょっと神経質になっているのかもしれないけれど」、村上春樹は「もうよくわかっています」。清水訳は……はいご名答、あっさり無視。

6 Plastic umbrella. 清水と村上はビニール傘としているが、田口訳だけこれを「ナイロンの傘」としている。ビニール傘だといまのコンビニ傘の安手の印象があるのと、ビニールで折りたたみ式はむずかしいという判断だろう。「長いお別れ」でリンダ・ロリングの化繊の服が高級というニュアンスだったように、当時のプラスチックのニュアンスはむしろ高級という感じだし、物理的に考えて田口訳が妥当だと思う。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「クリスチャン・ディオールよ」こっちの心の中なんかお見通しだ。「他には何も着ないのよ。火をいただける？」⁷

「今日は他にもいろいろ着てるみたいだねえ」おれはライターでカチリと火を差し出した。

「こんな朝早くからコナかけられても気が乗らないわ」

「何時頃をご所望で、ヴァーミリエさん？」

彼女はいささか辛辣な笑みを浮かべ、マニラ封筒を投げてよこした。「お望みのものは全部その中にあるはずよ」

「いやあ——他にも望みはあるんだけどねえ」

「このゲス、さっさと仕事にかかってよ。あんたのことは全部聞いているのよ。なんでアムニーさんがあんたを選んだと思ってるの？ 選んでないのよ。あたしが選んだの。それと脚をジロジロ見るの、やめてくれる？」

おれは封筒を空けた。中には別の封をした封筒と、おれに振り出された小切手が二枚入っていた。一枚は二五〇ドルで「専門サービス料の前渡し依頼費」との但し書き。もう一枚は二〇〇ドルで「必要経費前渡し金としてフィリップ・マーロウに」とある。

「必要経費の明細はあたしに提出して。厳密にね。それと酒は自分持ちで」

もう一つの封筒は開けなかった——まだ。「どうしてアムニーは、何もわからない依頼をおれが引き受けると思うんだ？」

「引き受けるでしょうに。何も悪いことをしろなんて依頼じゃないわ。それはあたしが保証しますから」

「他のことは君にしてもらえないの？」

「そうね、それについてはいつか雨降りの夜に飲みながら相談しましょうか、あたしが暇ならね」

「乗った」

おれはもう一つの封筒を開いた。女子の写真が入っている。そのポーズはいかにもくつろいでいるか、あるいは写真に撮られるのにずいぶん慣れているかのどちらかだ。髪の色は濃く、ひょっとすると赤毛かもしれず、おでこは広くてすっきり、真面目そうな目、高い頬骨、神経質そうな鼻孔と、何

7 "Christian Dior," she said, reading my rather open mind. "I never wear anything else." 前の場面で脚を凝視しているので、ここはストッキングの話と考えるのが普通だが、田口だけはこれを香水のことだと解釈して「ほかの香水はつけないの」としている。苦しい。おかげでその次のマーロウのせりふ"You're wearing a lot more today,"を「今日は特に濃くつけている」とさらに苦しい解釈にせざるを得なくなっている。でもディオールは、1950年代にはストッキングを製造販売していた(いまはやってない)。だからこんな変な解釈をする必要はない。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

も語ってくれない口。引き締まった、ほとんど緊張したような顔立ちで、決して幸せそうに見えない「裏を見て」とヴァーミリエちゃん。

裏にははっきりタイプされた情報があった。

「名前：エレナー・キング、身長 162 センチ、年齢約 29 歳。髪は赤みがかった茶色、濃いナチュラルウェーブ。背筋は伸び、低いはっきりした声、身なりはいいが派手ではない。メイクは控えめ。目に見える傷はなし。特徴的な癖：部屋に入るとき、頭を動かさずに目だけ動かす。緊張すると右手の平を搔く。左利きだがうまくそれを隠している。テニスは上手、泳ぎと飛び込みは見事、酒は強い。前科はないが指紋は登録されている」

「挙げられたことはあるのか」とおれはヴァーミリエちゃんを見上げた。

「そこに書いてある以上のことは知らない。とにかく指示通りにして」

「匂うね、ヴァーミリエさん。29 歳でこれほどのスケなら、ほぼまちがいに結婚してるはずだ。結婚指輪その他の宝石については一切書かれていない。不思議だな」

彼女は腕時計を見た。「不思議がるのはユニオン駅でやったらいか。あまり時間がないわよ」と立ち上がる。おれは白いレインコートを着るのを手伝い、ドアを開けてやった。

「自分の車で来たの？」

「ええ」と半ば出かけて、彼女は振り向いた。「一つあんたで気に入ったことがあるわ。お触りしてこなかったわね。それと礼儀もわきまえてる——ある意味で」

「それは最悪の手口だよ——お触りは」

「それと、一つ気に食わないことがあるわ。あててごらんなさいな」

「すまん、見当もつかんよ——おれが生きてるだけで我慢ならんという人もいるけど」

「そんなんじゃないわ」⁸



1955 Cadillac Fleetwood Sedan

彼女の後から階段を下りて、車のドアを開けてやった。ポンコツだ、ただのフリートウッド・キャデラック⁹。彼女はちょっと会釈して、丘を下っていった。

おれは階段を上がって家に戻り、万一に備えてお泊まりバッグを荷造りした。

8 むろん女心を熟知した読者諸賢には説明不要だろう。答合わせは 13 章。

9 It's a cheap job. もちろんキャデラックがポンコツなはずもないし、フリートウッド車体は其中でも高級な部類らしいよ。マロウの酸っぱいブドウ的な皮肉の反語。清水訳だけは「ちょっとした車だ」と明示的に表現。実車の具体的なイメージがないとやせ我慢も伝わらないので、今や「すごい車だ」とはっきり言うほうがいいかも。

[2]

ちょろい仕事だった。スーパーチーフ号はいつもながら、定時到着。お目当ては、ディナージャケットを着たカンガルー並に楽に見つかった。持っているのはペーパーバック一冊だけ、それも最初に出くわしたゴミ箱に叩き込んだ。すわって床を見つめる。



Super Chief, 1955

どう見ても不幸そうな娘だ。しばらくして立ち上がると売店の本棚のところにいった。何も選ばずそこを離れ、壁のでかい時計をちらりと見て、電話ボックスにとじこもった。投入口にコインを山ほど入れてだれかと話をしていた。表情はまったく変わらない。電話を切ると雑誌の棚にいて『ニュー Yorker』を選び、また腕時計を見て、すわって読み始めた。

着ているのは群青色のオーダーメイドのスーツで、首元から白いブラウスがのぞき、でかいサファイアブルーの襟ピンがついていて、耳が見えたらおそらくイヤリングとおそろいだろう¹⁰。髪は暗い赤毛だった。写真と同じだが、思ったより背が高く見える。濃い青のリボンつき帽子からは短いヴェールが垂れ下がっている。手袋をしている。

しばらくして彼女は、外でタクシーが客待ちをしているアーチ群の前を横切った。左の喫茶店をのぞいてから、曲がって主待合室に入り、ドラッグストアと売店、案内所、きれいな木造ベンチにすわる人々をチラリと眺めた。切符窓口は空いているのも閉まっているのもある。彼女はそんなものに興味はなかった。またすわると、大時計を見上げた。右の手袋を脱いで、腕時計をあわせた。小さく飾り気のないプラチナ色のおもちゃで、宝石もついていない。内心で、ヴァーミリエちゃんを彼女と並べてみた。軟弱でもすましてもお高くとまっているようなでもないが、それでも彼女と比べるとヴァーミリエはスベタにしか見えない。



1955 年ユニオン駅

そこにすわっていたのも、やはりそう長いことではなかった。立ち上がってぶらぶらと歩いた。パティオに出てから戻ってくると、ドラッグストアに入ってペーパーバックの棚のところでしばらく過ごした。明らかな点が二つ。だれであれ約束の相手は、列車の時間に合わせなかった。彼女は乗り継

10 ここ、まったくふつうの文で、例によってマーロウの視線をなぞっている。まず全体を見てスーツ、その襟元を見るとそこからブラウスがのぞき、そこにあるピンを見て、その連想で耳に移り、それを隠している髪、という流れ。原文をそのまま訳せば、その通りの流れになって何も問題がないのに、村上と田口は「白いブラウスの上にオーダーメイドのスーツを着て」となり、そこから襟のピンに何の脈絡もなく話に移る訳にしているので、視線の連続性は完全に切れている。なぜそんな独創性を発揮したのかまったく不明。清水はそのまま訳している。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

ぎを待っているように見える¹¹。喫茶店に入った。天板がプラスチックのテーブルにつくと、メニューを眺め、そして雑誌を読み始めた。女給が、お決まりのお冷やのグラスとメニューを持ってきた。お目当ては注文した。女給はそこを離れ、お目当ては雑誌を読み続けた。9時15分くらいだった。

アーチを抜けて、タクシー乗り場の横で待つ赤帽のところに行った。「スーパーチーフ号は扱ってる？」と尋ねた。

「ええ、一部はね」と彼は、おれが指で弄ぶ一ドル札にあまり興味を示しすぎないようにしつつこちらを眺めた。

「ワシントンとサンディエゴ直行便の客車に乗ったヤツを待っていたんだけどね。だれか下りた？」

「つまり完全に、荷物も一切合切持って下りたってことっすか？」

おれはうなずいた。

赤帽はしばし思案し、おれを賢い栗色の目で観察した。そしてやっと口を開いた。

「一人下りたな。お友だちってどんな風体です？」

男を描いてみせた。エドワード・アーノルドみたいな人物。赤帽は首を振った。

「お役にたてませんねえ、旦那。降りた人は全然そんなんじゃなかったですよ。お友だちはたぶんまだ乗ってるんでしょう。直行の客車なら下りなくてもいいんですよ。E・アーノルド(1941)
74号車と連結するんです。ここを出るのは11時半です。まだ列車の用意はできてない」

「ありがとう」と一ドルを渡した。あの女の荷物はまだ積んだままだ。それが知りたかっただけだ。

喫茶店に戻ってガラス壁から中をのぞいた。

標的は雑誌を読んでコーヒーとロールパンを弄んでいた。おれは電話ボックスのところへ行って、気の置けない自動車整備屋に電話をかけ、昼までに掛け直さなかったら、だれかをここに遣わして車を拾ってくれと頼んだ。もう何度もお願いしているので、この整備屋はスペアキーを持っているのだ。おれは車のところにいて、お泊まりバッグを取りだし、コインロッカーに入れた。巨大な待合室でサンディエゴまで往復切符を買うと、また喫茶店に戻った。標的は同じところにいたが、もう一人きりではなかった。テーブルの向かいに男がいて、ニコニコとしゃべっているが、一目見ればそれが知り合いではあっても、女としては知り合ったのを後悔しているのはわかった。ポートワイン色のローファ어의つま先から、織りの粗いクリーム色のスポーツジャケットの内側の、ネクタイなしでボタンをしっかりと留めた黄色いチェックのシャツに到るまで、全身カリフォルニアそのもの。身長185センチ、細身で、うぬぼれた細面に歯をむき出しすぎている。手の中で紙切れをよじっている。



11 「明らかな点が二つ」というのに、一つしか書いていない。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

外に出た胸ポケットの黄色いハンカチが、小さなスイセンの束のように派手に広がっている。そして、蒸留水のようにはっきり見通せることが一つ。女はそいつに消えてほしいと思っている。

そいつはしゃべって紙切れをよじりつづけた。やっと肩をすくめて立ち上がった。身を乗り出して女の頬に指を走らせた。彼女はのけぞった。すると男はよじった紙を広げて、彼女の目の前に慎重に置いた。そしてにっこりして待った。

彼女はそれにきわめてゆっくりと目を走らせた。それを凝視した。その紙を奪おうと手を動かしたが、男の手のほうがすばやかだった。相変わらずニコニコしつつ、それをポケットにおさめた。それからミシン目入りのメモ帳を取り出すと、クリップ式のペンで何か書き付け、そのページを切り取って彼女の前に置いた。その紙は彼女のものだ。女子はそれを受け取り、読んで、ハンドバッグにしまった。やっと彼女は男を見た。そしてやっと、男に笑顔を向けた。かなり無理してのことだろう。男は手を伸ばして女の手を叩き、テーブルを離れて外に出た。

そいつは電話ボックスにこもり、かなり長いこと話していた。出てくると赤帽を見つけて、いっしょにロッカーに向かった。出てきたのは、淡いオイスター・ホワイトのスーツケースと、おそろいのお泊まりケースだ。赤帽はそれを持ってドアをいくつか抜けて駐車場に向かい、男の後についてカッコいいツートンカラーのビュイック・ロードマスターのところに行った。ハードトップの、コンバーチブルと言いつつ実はコンバーチブルでないヤツだ



ビュイック・ロードマスター 1954

赤帽は荷物を傾けたシートの後ろにのせ、料金を受け取り、立ち去った。スポーツジャケットと黄色いハンカチの野郎は車に乗りこみ、バックで駐車場から出ると、しばらく停まってサングラスをかけタバコに火をつけた。そいつが消えてから、おれはプレートのナンバーを書きとめ、駅の中に戻った。

次の一時間は三時間にも感じられた。女子は喫茶店を離れて待合室で雑誌を読み続けた。うわの空だ。何度も自分が読んだはずのところに戻って読み返している。ときにはまったく読んでおらず、単に雑誌を手にとりぼんやりしている。おれは夕刊の早朝版を手にして、その背後から彼女を観察しつつ、頭の中を整理した。はっきりした事実は何もない。ただの暇つぶしだ。

彼女といっしょのテーブルにいたヤツは荷物があつたから、列車から下りてきたということだ。彼女と同じ客車だったかもしれないし、その客車から降りたというのがあいつだったかもしれない。彼女の態度から見て、その男を迷惑に思っているのは明らかだし、男のほうは態度から見て、そりゃ残念至極だがあの紙切れを見れば気が変わるぜ、というわけだ。そしてどうやらそうなった。そのやりとりはもっと前でもよかったのに、二人が列車を降りてから起きたということからして、男は列車の中ではあの紙切れを持っていなかったことになる。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

このとき女子はいきなり立ち上がって売店に向かい、タバコを一箱持って戻ってきた。それを破り開けると一本火をつけた。吸い方はぎこちなくて、吸い慣れていないようだが、吸っているうちにどうも態度が変わったようで、もっと派手で手強い感じとなり、意図的に何かのために自分を粗野に見せようとしているかのようなだった。壁の時計を見た。10:47。おれは思索を続けた。

よじった紙切れは新聞の切り抜きみたいだった。女はそれを奪おうとしたが、男はそれを許さなかった。そして白紙に何かを書き付けて彼女に渡し、彼女は男を見て微笑んだ。結論。あの色男は何か女の弱みを握っていて、女はそれが嬉しいふりをするしかなかった。

次の点は、それに先立ち男は駅を離れてどこかに行ったということだ。車を取ってくるためか、切り抜きを手に入れるためか、何でもあり得る。つまり、男は女が逃げ出すのを恐れてはいなかったということだ。そしてこれは、男がまだ握った弱みをすべてではなく、一部だけ明かしていたという考えを裏付けてくれる。当人も自信がなく、確かめる必要があったのかも。だがいまや手札をすべてさらけだしたので、荷物を持ってビュイックで走り去った。つまりあいつはもはや、女を失う恐れはないと思ったわけだ。二人を結びつけるものがなんであれ、そのまま両者を拘束するほど強かったのだ。

11:05にこうしたすべてを放り出し、まったく新しい想定を開始してみた。何も出てこなかった。11:10に構内放送が、十一番線の七十四号がサンタ・アナ、オーシャンサイド、デル・マー、サン・ディエゴ行きの乗車を開始すると告げた。人がたくさん待合室を出て、その中にあの女もいた。もう一群の乗客がすでに改札を通過しつつあった。おれは彼女が入るのを見届けてから、電話ボックスに戻った。十セント玉を入れて、クライド・アムニー事務所の番号をまわした。

ヴァーミリエちゃんが出たが電話番号を繰り返すだけだった。

「マーロウだ。アムニーさんはいる？」

彼女はかしこまった声で言った。「申し訳ございません、アムニーは出廷中です。何か伝言がございますか？」

「いま対象と接触中で、列車でサンディエゴかその途中のどこかに向かうところだ。どの駅かはまだわからない」

「ありがとうございます。他に何か？」

「ああ、お日様キラキラで、我らがお仲間さんはあんたに負けず劣らず逃げも隠れもしてないな。コンコースに向かってガラスの壁になってる喫茶店で朝飯を食ってたよ。百五十人ほどといっしょに待合室にすわってたね。わざわざ列車をおりずに、人目を引かないようにすることもできたのに」

「すべて書きとめました。ありがとうございます。可及的速やかにアムニーに伝えるようにいたしますわ。じゃあ何も確実なご見解はないということ？」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「確実な見解なら一つある。あんた、なんかおれに隠してるね」

彼女の声色がいきなり変わった。だれかが事務所を出て行ったにちがいない。「聞きなさいよ、ゴロツキ。あんたは仕事で雇われてんのよ。ちゃんとこなして、精々しっかりやることね。この町じゃクライド・アムニーがちょっと水を向けるだけであんたなんかどうにでもなるんだから¹²」

「水ってなんだい、かわいこちゃん。おれはストレートで飲むし、チェイサーはビールなんだ。ごほうびでもぶら下げてもらえると、もうちょっと愛想のいい応対もするかもしれんぜ」¹³

「報酬があるでしょ、おっさん—仕事をこなしたらね。そうでなきゃ払いはなし。おわかり？」

「おやおやそんなお優しい台詞は初めてだねえ、お嬢ちゃん。あばよ」

彼女は突然あわてた口調になった。「ちょっとマーロウ、きついこと言うつもりはなかったのよ。この件はクライド・アムニーにすごく大事なの。しくじったら、すごく重要なコネをなくしかねないのよ。だからちょっと脅しをかけたただけなのよ」

「悪くなかったよ、ヴァーミリエ。おれの無意識に効いたね。なにかあったらまた連絡する」

電話を切って、改札を抜け、斜路を下りて、ヴェンチャーラ郡まで行けるくらい歩いて 11 番線につき、列車に乗り込んだが、そこはすでに漂うタバコの煙まみれでそれが実にのどに優しく、いつも健康な肺が片方しか残らないほど。こっちもパイプに葉を詰めて火をつけ、あたりの悪臭に貢献した。

列車は駅を出て、果てしない操車場やイースト LA の裏手をだらだらと抜けてから少し速度を上げ、まずサンタアナに停まった。お目当ては降りなかった。

オーシャンサイドとデル・マーも同じ。サンディエゴでおれはすばやく飛び降り、タクシーをつかまえると、古いスペイン風駅舎の外で荷物を運ぶ赤帽たちが出てくるまで八分待った。そして女も出てきた。



サンタフェ駅舎(1954)。サンディエゴ駅というのはなく、地理的にこれ

12 “Clyde Umney draws a lot of water in this town” コネのある有力者ということ。が、次のマーロウの台詞につながるために、水という言葉が必要なので面倒。清水訳「この街のどこからでも水をひくことができるのよ」は論外の意味不明。村上春樹訳「この街にたくさんの水脈を持っているんだから」。うーん、かなり無理があるし、秘書が脅して口にする台詞としては不自然。田口訳「この街にいっぱい ^{ウォーター} 伝手 を持ってる人なの」。「伝手」って？……と書いて気がついた。ツテか！！漢字だとピンとこないし、「ウォーター」とルビがつくとなおさらわかりにくい。

13 村上春樹訳ではこの部分、少し気取った表現を金くぎ直訳にしたがる悪いクセが露骨。「いったい誰が水なんてものを必要とするんだい、ビューティフル?(中略)そしてその気にさせてくれれば、もっと美しい音楽を奏でるかもしれない」。最後のところ「I might make sweeter music」は、おまえの知りたいことも話してやるかも、という意味なんだがこの訳ではわからん。「グレート・ギャツビー」でも彼は「old sport はそのままカタカナにした」というのを何やら原文尊重のつもりで得意がってみせていたが、芸のなさの告白にすぎない。威張ることじゃないよ。

田口訳は「水ならいつも生で」と、何をストレートで飲むのか基本をまちがえてギャグまで殺したひどい誤訳。清水訳は「beautiful」を省略したりしているが意味はしっかり取れている。山形訳は「かわいこちゃん」が古くさいのは知っているが、原作の時代を考慮し、全体にちょっと時代がかった訳にしている。この次の「あばよ」とか。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

彼女はタクシーを拾わなかった。通りを渡って角を曲がり、レンタカー屋に入ったが、かなり間を置いてがっかりした様子で出てきた。免許がないとレンタカーもダメだ。そのくらいわかるだろうに。

今度はタクシーをつかまえ、それがUターンして北に向かった。おれのタクシーも同じ。尾行については運転手と一揉めあった。

「そんなの本の中だけの話っすよ、だんな。ディエゴじゃやらんよ」

おれは五ドル札¹⁴と、探偵免許の 10x6 センチ写真複写を渡した。運転手はその両方をためつすがめつ検分した。そして街路の先のほうに目をやった。

「オッケー、でも報告はさせてもらおうよ。配車係がそれを警察の詰め所に報告するかもしれん。それがここの流儀なんでね、お客さん」

「おれが住むにはおあつらえ向きの街だねえ。それと、獲物を見失ったぞ。二街区先で左折した」

運転手はおれの財布を返してよこし、面倒くさそうに言った。「自分の左眼を見失うかよ¹⁵。何のための無線だい」彼はマイクを手にして何かしゃべった。

アッシュ街を左折してハイウェイ 101 に入り、本線に合流して穏やかに時速 70 キロで進んだ。おれは運転手の後頭部を見つめた。彼は肩越しに言ってきた。

「心配ご無用。この五ドルは、料金とは別っすよね？」

「その通り。それで、なんで心配ご無用なんだい？」

「あの客はエスメラルダに行くんだと。こっから二十キロほど北の海辺。行き先は、途中で変えたりしない限り—そうになったら連絡が入る—ランチョ・デスカンサードっていうホテル屋。デスカンサードってのはスペイン語で、落ち着けよ、気張るなよって意味なんだ」

「なーんだ、じゃあタクシーなんか要らなかったな」

「情報サービスのお代は払ってもらわんとね。無料でくれてやったら買い物もできんよ」

「メキシコ人？」

「おれたちはそう名乗ったりしないよ、お客さん。スペイン系アメリカ人って言うんだ。生まれも育ちもアメリカ。もうほとんどスペイン語を話せない連中もいる」

「エス・グラン・ラスティマ、ソイツハ残念ダナ。スゴクキレイナ言葉ナノニ」¹⁶

14 当時の 5 ドルは貨幣価値でいまの 1 万円弱。18 ヶ月前が舞台の『長いお別れ』とほぼ同じ。

15 "Lost my left eye." その前でマーロウが「You've lost your tail」と責めた文の lost を受けて、左眼を失ったりしないように獲物を見失ったりするもんかよ、とやりかえしている。清水訳は(もちろん)あっぱれに無視、村上春樹訳「心配しなさんなって」はニュアンスをよく捕らえている。田口訳「左眼は失っちゃったかもしれないけれど、まだ右眼があるからね」は意味捕らえ損ねてそれをごまかすために変なのを足すという、ちょっと感心できない処理。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

運転手は後ろを向いてニヤリとした。「ソウナンダヨ、アミーゴ。マサニソノトオリ」

トーランス・ビーチに出てそこを抜けて岬へと曲がった。ときどき運ちゃんは無線でしゃべった。そして頭をしばしめぐらせて話しかけてきた。

「相手に見られたくないんだろ？」

「向こうの運転手はどうなんだ？ 自分のお客に尾行されてるって話すかな？」

「あいつにもそれは話してないよ。だからあんたに訊いてるんだ」

「追い越して先に着いてくれないか、できればだが。五ドル追加で出す」

「おあいご用。あいつには見られもしないはず。あとでテカテのボトル開けつつからかってやろう」

小さなショッピングセンターを抜けると、道が広がり、片側の家は高価そうで新しくもなかったが反対側の家はまっさらでやはり安っぽくもない様子だった。道は再び狭くなり、制限時速四十キロの地域となった。運転手は右に曲がり、狭い道をくねくね通り、一時停止の標識を無視して、どこに向かっているか把握する間もなく峡谷に入って、その左手の奥には太平洋がギラつき、その手前に幅の広い浅いビーチがあつて、むき出しの金属タワーに乗ったライフガード監視所が二つある。峡谷の底で運転手はハンドルを切ってゲートを入ろうとしたが、おれはそれを止めた。でかい看板が、緑の地に黄金の文字で「エル・ランチョ・デスカンサード」とある。

「隠れてくれ。確実にやりたいんだ」とおれ。

運転手はハイウェイに戻り、スタック壁の端を越えたところまでスピードを上げて運転して、それから奥のせまいくねった道に急カーブして入り、停車した。幹の分かれた歪んだユーカリの木が頭上に茂っている。おれはタクシーを出て、サングラスをかけ、ハイウェイまで歩いて戻り、ガソリンスタンドの名前が書かれた真っ赤なジープによりかかった。タクシーが丘を下りてきて、ランチョ・デスカンサードに曲がって入った。三分たった。タクシーは空車で戻ってくると、また元の丘を上がっていった。おれは自分の運転手のところに戻った。

「423 番のタクシー。まちがいないか？」

「お目当てのやつですよ。どうします？」

「待つ。中の様子はどんな具合？」

「駐車場つきのバンガローが並んでるなあ。シングルもダブルもある。事務棟は手間の小さいやつ。繁忙期にはかなり値が張る。いまは閑散期で、半値だし空き部屋も多いでしょう」

16 原文はスペイン語そのまま訳もなし。わかる人だけわかればいいという部分なので、訳もそうすりゃいいんだがそれは不親切。清水と川口訳は、日本語訳にスペイン語の音のふりがな。村上春樹はスペイン語そのままで（）で意味を追加。どちらも定番の手法で、どれが正しいわけじゃない。なんか違う言語なんだよー、と示すためにカタカナにするというのも昔は結構あったが最近はあまり見ないので、ここでは復活させてみました。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「五分待つ。そしたらおれはチェックインして、スーツケースを置いて、レンタカーを探す」

それは簡単だとのこと。エスメラルダにはレンタカー屋は三軒あり、時間制、走行距離制、どんな車種でも借りられる。

五分待った。いまや三時をちょうどまわったところだ。犬のエサでも盗みたいほど腹が減っていた。

運転手に金を払って、彼が去るのを眺め、ハイウェイを横切って事務棟に入った。

[3]

おれはカウンターに礼儀正しく肘を置き、水玉模様のボウタイをしたニコニコ顔の若者を見た。そこから、脇の壁にある小さな交換台にいる女子に目を移した。アウトドアっぽい娘でキラキラメイク、濃いめのブロンドの髪がポニーテールとなって頭の後ろから突き出している。だが素敵な大きく柔らかい目をしていて、それが受付の若者を見ると潤む。おれもそいつに目を戻し、ドスを利かせなかったのを飲み込んだ。交換機の女子はポニーテールを振りまわし、やはりおれを見つめた。

「空き室なら喜んでお目にかけますよ、マーロウさん。ご逗留が決まりましたら、あとでチェックインしていただけます。どのくらいご滞在の予定ですか」と若者は礼儀正しく言った。

「彼女が滞在する間だけ。青いスーツの女だよ。たったいまチェックインした。どんな名前を使ったかは知らん」

若者と交換機の女子はおれを見つめた。どちらの顔も、不信感と好奇心の入り混じった同じ表情をしていた。この場を演じるやり方は何百通りとある。だがこいつはおれにとって目新しいものだった都会のホテルなら、世界のどこだろうとこの手は効かない。でもここなら効くかも。それは主に、おれが投げやりになっていたからだ。

「気に入らないんだろう、え？」

若者はかすかに首を振った。「少なくとも率直におっしゃってくれましたから」

「もう隠し事にはうんざりなんだ。もう疲れ切ってしまった。彼女の指は見たか？」

「いや、気がつきませんでした」と若者は交換台の娘を見た。彼女も首を振っておれの顔を見つめ続けた。

「結婚指輪がなかっただろう。いまはもうないんだ。全部消えた。全部壊れちゃった。あの年月のすべてが——やれやれ、もうクソ食らえだ。あいつの後を追ってずっとやってきたんだよ——どこからなんて、知ったことじゃないよな。もう口もきいてくれないだ。こんなところで何やってるんだろうな、おれは。バカをさらしてるだけだ」おれはすばやく顔を背けて鼻をかんだ。二人はもうおれに釘付けだ。「ここにいちやいけないんだ」と顔を元に戻した。

「ヨリを戻したいけれど相手が嫌がってるのね」と交換機の女子が静かに言った。

「そうなんだ」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

若者は言った。「お察ししますよ。でもおわかりいただけるでしょう、マーロウさん。ホテルとしてはとても慎重にならざるを得ないんです。こういう状況はどうなるかわかったもんじゃない—撃ち合いにだってなりかねない」

おれは驚いた顔でそいつを見た。「撃ち合い、だって？ いやはや、そんなことをやる連中がいるのか！」

若者は両腕をデスクに載せて身を乗り出した。「で、ずばりどうされたいんですか、マーロウさん？」

「彼女の近くにいたいんだ—何か必要なことがあるときのために。話したりしない。ドアノックさえしないよ。でも私がそこにいたことはわかるはずで、その理由もわかるだろう。私は待ってる。いつまでも待ってるんだ」

いまや娘のほうで夢中だった。おれはお涙頂戴に首まで浸かっていた。そこでゆっくりと深呼吸してから、お目当てのものに探りを入れた。「それに、彼女をここにつれてきたヤツの様子がどうも気に食わないんだ」

「どなたもあの方をつれてきたりしてませんよ—タクシーの運転手だけです」と受付係は言った。だがおれの言わんとしていることは十分に理解していた。

交換機的女子は薄笑いを浮かべた。「そういうことじゃないわよ、ジャック。予約のことよ」

「ルシール、それは何か見当ついたよ。そこまでバカじゃない」とジャックはいきなり、デスクからカードを取り出しておれの前に置いた。宿泊カードだ。角のところに対角線上に、ラリー・ミッチェルという名前が書かれている。そしてまったくちがう筆跡で、適切な欄にこうある。(ミス) ベティ・メイフィールド、ニューヨーク州ウェストチャタム。そして左手の角に、ラリー・ミッチェルと書いたのと同じ筆跡で、日付、時間、価格、電話番号。

「本当にありがたい。じゃああいつ、もう旧姓に戻したのか。もちろん違法でもなんでもない」

「詐欺の意図さえなければ、どんな名前も違法じゃありません。隣の小屋をお取りしましょうか？」

おれは目を見開いた。ちょっと潤んだかも。目を潤ませるのにこれほど努力をしたヤツはいまだかつていない。

「なあ、本当にご親切痛み入る。が、それはまずいよ。面倒を起こす気はないが、でもそっちは用心しないと。私が何かしでかしたら、あんたがたの手間になる」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「そうですね。いつかそういう勉強もしないといけませんね。あなたはまともな人に見えます。でもないですよ」と若者はペンをインク壺から差し出した。おれは署名して、住所はニューヨーク・シティの東61番にした。

ジャックはそれを見た。「セントラルパークの近くですよ？」とさりげなく尋ねる。

「三街区ちょっとだね。レキシントンと三番街の間だ」

彼はうなずいた。場所を知っているのだ。細工は隆々。彼はキーに手を伸ばした。

「スーツケースをここに置いていきたいんだが。でかけて食事して、車でも借りようかと。部屋まで運んどいてもらえないか？」

もちろん。喜んでやってくれるそう。若者はおれを外に案内して、若木の茂み越しに上を指さした。バンガローはみんなこけら葺きで、白い壁と緑の屋根だ。手すりつきのポーチもある。その木々の間からおれの部屋を示してくれた。おれは礼を言った。戻ろうとする若者の背後からこう言った。「なあ、もう一つある。バレたらあいつはチェックアウトしかねない」

彼はにっこりした。「そりゃそうです。こちらとしてはどうしようもありませんね、マーロウさん一泊二泊で帰るお客さんはたくさんいらっしゃいます—夏でもない限り。この季節に満室は期待しておりませんので」

彼は事務棟に入り、娘がこう言うのが聞こえた。

「あの人、ちょっといかすけど—でもジャック、やめといたほうがよかったんじゃない？」

その答えも聞こえた。「あのミッチェルってやつが大嫌いなんだ—オーナーのお仲間ではあっても」

[4]

我慢できない部屋ではなかった。ありがちなコンクリートまがいのソファ、クッションなしの椅子前壁に向かって小さなデスク、作り付けのたんすがついたウォークイン・クロゼット、ハリウッド式のトイレとは別室になった浴室に、流し前の鏡の隣にはネオンのひげ剃り照明、冷蔵庫と白い電気コンロ3台つきのミニキッチン。流しの上の壁についた食器棚には、皿などがたっぷり。氷を出して、自分のスーツケースからのボトルでドリンクを作り、すすって椅子にすわり聞き耳をたてた。窓は閉じてベネチアブラインドは閉じておいた。隣からは何も聞こえなかったが、やがてトイレを流す音が聞こえた。標的は部屋にいる。おれはドリンクを飲み干し、タバコを吸い尽くして部屋の仕切り壁についた壁掛けヒーターを検分した¹⁷。金属の箱に入った、長い二本の曇り電球でできている。大した熱量を出しそうには見えなかったが、クローゼットの中にはプラグイン式のファンヒーターがあり、サーモスタットと三本式のプラグがついているから、220ボルト式の強力なやつだ¹⁸。壁のヒーターについてのクロームのグリルガードを外し、曇り電球をひねってはずした。スーツケースから医者聴診器を取りだして、金属の裏板に当てて聞き耳をたてた。隣室で似たようなヒーターが背中合わせについているなら――ほぼまちがいなくそうなっている――隣室との間にあるのは、金属パネルと断熱材だけで、その断熱材も最低限のものしかないだろう。



US 3 相220V コンセント

数分ほど何も聞こえなかったが、そこで電話のダイヤルをまわす音が聞こえた。音は完璧に聞こえる。女の声が言った。「エスメラルダ 4-1499 番お願いします」

クールで抑え気味の声、中くらいの音程で、感情はほぼこもっていないが疲れた声だった。何時間も尾行して初めて聞く彼女の声だった。

長目の間が空いて、彼女が言った。「ラリー・ミッチェルさんお願いします」

17 コテージ/バンガロー式だとこれまで書かれていたので一室ごとに独立棟なのかと思っていたんだが、連棟式なのね。

18 アメリカの通常のコンセント電圧は120V。日本でもクーラーや洗濯機など電力消費の大きい機器は3相200Vを使うように、このヒーターは非力そうだが220Vを使う、つまりかなり強力なやつなのということ(電気工事士談)。既訳は、清水訳「二百二十ヴォルトまで出せる」田口訳「出力二百二十ボルトのものだ」は、どちらも出力のことだと思っていてわかってない。村上春樹は「三つ叉のプラグがついた二百二十ボルトのものだ」とあるので、具体的なイメージはないようだし(上の写真のヤツは三つ叉とは言わない)意味は理解していなかったと思うが素直に訳しているのでまちがいとはいえない。わかるように本文中に「強力な」を補っておいた。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

また間が空いたが、こんどは短かった。「ベティ・メイフィールドです、ランチョ・デスカンセイドにいます」。デスカンサードの発音をまちがえていた¹⁹。それから「ベティ・メイフィールドと言ったでしょう。バカなふりをしないで。綴りも言ってあげましょうか？」

電話の向こうにも言い分があった。彼女は聞いた。しばらくして言った。「12C 号室。知ってるはずよね。あなたが予約をしたんですから……あらそう……まあいいわ。待ってます」

女は電話を切った。完全な静寂。それから、その室内の声がゆっくりと虚ろに語った。「ベティ・メイフィールド、ベティ・メイフィールド、ベティ・メイフィールド。かわいそうなベティ。昔はいい娘だったのに——ずっと昔は」

おれは縞模様クッションの一つを敷いて床にすわり、壁に背中をもたせかけていた。慎重に立ちあがり、聴診器をクッションの上に置いて、ソファベッドまで行って横になった。しばらくすれば男がくるだろう。彼女はあの部屋でそれを待っている。そうするしかないからだ。彼女は何か理由があってここにこなければならなかった。それが何だか知りたい。

靴がゴム底だったんだろう。隣室のブザーが鳴るまで何も聞こえなかった。それと、そいつはコテージまで車を乗りつけなかった。おれは床におりて聴診器で仕事にかかった。

彼女はドアを開け、男は中に入り、想像するに満面の笑みを浮かべつつこう言った。「やあベティ ベティ・メイフィールドというのがお名前だったっけね。気に入ったよ」

「それがもとの名前よ」女はドアを閉じた。

彼はクスクス笑った。「名前を変えたのは賢明だったようだね。でも荷物のイニシャルはそのままかい？」

そいつの声は、その笑顔に負けず劣らず気に食わなかった。甲高く陽気で、小賢しいユーモアでほとんど浮ついている。せせら笑いと断言できるほどではないが、それにかかなり近いものはあった。聞いてるおれが歯を食いしばりたくなる。

「まっ先に目についたのがそれだったんでしょね」女は淡々と言った。

「ちがうよベイベー。まっ先に目についたのは 君 だよ。結婚指輪の痕はあるのに指輪がないのがその次だ。イニシャルは三番目でしかない」

「ベイベー呼ばわりしないで、ケチな強請屋のくせに」女はいきなり怒りを押し殺して言った。

19 She pronounced the "a" in Descansado wrong. 英語圏では a を「エイ」と発音したがるので、そのこと。Abraham をアブラハムではなくエイブラハムと発音するみたいに。Descansado には a が二つあり、デスケインサードとデスカンセイドの両方の可能性があるが、前者だと両方ともエイ音にしてデスケインセイドにするほうが自然なので、後者を採用。村上春樹と田口はこれを「デスキャンサード」としているが、それだとむしろ "c" の発音ミスになる。AI くんも同意見。清水は「a」をまちがって発音した」と訳しつつ、実際にどうまちがったか書かない荒技。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

男はいささかもひるまなかった。「強請屋かもしれないがね、ハニー、でも」——またもやうぬぼれた笑い——「どう考えてもケチじゃないだろ」

彼女は歩いた。たぶん男から離れたのだろう。「一杯いかが？ ボトルを持ってきてるようだし」

「飲むとエロい気分になっちゃうぜ」

「ミッチェルさん、あなたで怖いことなんて、たった一つ。その閉じてられないデカ口よ。しゃべりすぎて、自己満が過ぎるわ。お互いもっとよく知り合うべきね。あたしはエスメラルダが好き。前にもここにいたし、ずっと戻ってきたいと思っていたわ。あなたがここに住んでいて、ここにくる電車にあなたが乗り合わせていたのは、単なるツキのなさでしかないわ。あなたに気がつかれたのが、中でも最悪のツキよ。でもそれだけのこと——ツキがなかったのよ」

「ぼくとしてはツイてたね、ハニー」男の声は間延びしていた。

「そうね。あまりそのツキをあてにしすぎなければね。さもないと一気に崩れるわよ」

しばし沈黙。頭の中ににらみ合う二人の姿が浮かんた。男の笑顔は少し引きつり始めたかもしれないが、ほんの少しだ。彼は静かに言った。

「その電話で、サンディエゴの新聞に一本かければすむんだぜ。有名になりたい？ 手配してやろうか？」

「有名から逃れてきたのよ」と彼女は辛辣に言った。

男は笑った。「ああ、ボケが回りきって死にそうな老いぼれ裁判官のおかげだろ。それも陪審員の評決を裁判官がひっくり返せる全国でも——そこところはぼくも調べたんだぜ——唯一の州のおかげだ。名前を二回も変えたよな。君についての記事がここで出回ったら——それもかなりおもしろい記事になるよ、ハニー——また名前を変えるはめになるな——そしてもうちょっと旅行を始めることになるかもな。なんかうんざりしてくるんじゃないか、どうだい？」

「だからここに来たのよ。だからあなたもここに来たんでしょう。いくらほしいの？ もちろん頭金にしかならないのはわかってるわ」

「だれが金の話なんかしたね？」

「これからするでしょ。それと、大声出さないで」

「このコテージは君一人だよ、ハニー。入る前にぐるっと確認した。ドアは締まり、窓は閉じ、ブラインドも閉まって、車庫も空っぽ。不安なら事務所で確認してやってもいい。ここにはダチもいる——お知り合いになっとくべき連中、暮らしやすくしてくれる連中だよ。この街の社交界に入り込むのはなかなか面倒なんだぜ。そして外からのぞき込んでるだけだと、この街はえらく退屈なところだからなあ」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「そういうあなたは どうやってそこに入り込んだの、ミッチェルさん」

「うちの親父はトロントの大物でね。折り合いは悪くて家には置いてくれないんだ。それでも親父は親父だし、やっぱ力はあるのよ、わざわざ金まで払って、ぼくが家の近くにこないようにしてるとはいえ」

女は答えなかった。足音が離れていった。台所で彼女が、製氷皿から氷を取り出すのに関連したおなじみの音を立てるのが聞こえた。水が流れ、足音が戻ってきた。

「あたしも一杯いたどうかしら。ちょっと失礼だったかもしれないわね。疲れてるのよ」

男は棒読み風に答えた。「そうかい。疲れてるかい」間。「じゃあ疲れてないときのために乾杯。今夜七時半にグラスルームでどうだい。迎えにくるよ。ディナーにはおあつらえ向きなんだ。踊りも静か。会員制、といっても最近じゃあまり意味はないけど。ビーチクラブの所有だけ。一見さんじゃ入れない。ぼくはそこでは顔がきくもんでね」

「高いの？」と彼女。

「ちょっとね。ああそうだ—それで思い出した。月ごとのお手当がいただけるまで、何ドルか用だててくれてもいいんだよ」と男は笑った「我ながら驚いたね。結局金の話をすることになるとはね」

「何ドルか？」

「何百ドルか、のほうがいいな」

「手持ちは六十ドルしかないわ—どこかに口座を開くかトラベラーズ・チェックを換金するまでは」

「フロントでやってくれるよ、ベイビー」

「そうね。ほら五十あるわ。甘やかすつもりはないので、ミッチェルさん」

「ラリーって呼んでよ。もっと親身になろうじゃないか」

「そうしたいの？」口調が変わった。かすかに水を向けるような。男の顔にゆっくりと広がる喜びの微笑が思い浮かぶ。そしてその後の沈黙からして、男は女を掴み、女は抵抗しなかった。最後に、彼女のちよっとくぐもった声がした。「そのくらいにして、ラリー。いまはお利口にして帰って。七時半には用意しとくから」

「行きがけの駄賃でもう一度」²⁰

すぐにドアが開いて、男が何か言ったが聞き取れなかった。おれは立ち上がり、窓辺にいて、ブラインドのスリット越しに慎重に覗いた。高い木のでっぺんにある投光器が一つ点いていた。その下で

20 “One more for the road.” この前の場面で、二人はキスしてて、まだ抱き合ったまま。だからこの One more というのは、もう一回キスさせろ、ということ。既訳は三人ともこれが、酒をもう一杯、という解釈にしているが、男女の機微（というかゲスい男の欲求）への想像力なさすぎ。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

男が斜路を上がって姿を消すのを見届けた。おれはヒーターパネルに戻ったが、しばらくは何も聞こえなかったし、何を求めて盗聴しているのかしばらくは自分でもわからなかった。だが間もなくわかった。

行ったり来たりするすばやい動きが聞こえ、引き出しが引き開けられ、鍵がパチッと開き、開いたふたが何かにあたる音。

女がここを出ようと荷造りしている。

長い曇り電球を再びヒーターにねじこんで、グリルを元に戻し、聴診器をスーツケースに戻した。晩は肌寒くなりつつあった。上着を着て床の真ん中に立った。暗くなってきたが明かりはつけていない。ただそこに立って思案した。電話をかけて報告をしてもいいが、その頃には女は別のタクシーを拾い、別の列車や飛行機で別の目的地に向かっているかもしれない。好きなところどこへでも行けるが、ワシントンに控えてる大物のえらいさんたちにとって重要なら、その列車を^{イヌ}探偵が必ず待ち受けてることになる。どこへいっても、ラリー・ミッチェルか記憶力のいい記者がいる。いつだって目につくちょっと変わった部分があり、いつだってそれに気がつくヤツがいる。自分自身から逃げ去るわけにはいかない。

おれは気に食わない奴らのために、安っぽいコソコソ仕事をやってる。が—そのために雇われるのが仕事だろうが、この三下野郎。連中が金を払い、自分は汚いネタを漁る。ただ今回に限ってはもう耐えられなかった²¹。彼女は売女には見えないし、悪党にも見えなかった。とはいえそれはつまり、そこまであからさまでないからこそ、どっちの稼業でも大成功しているということかもしれないが。

21 They pay the bills, you dig the dirt. Only this time I could taste it. つまり泥を掘り返しているときに、その泥の不味さが感じられる、嫌になるということ。清水訳「ただ、こんどは泥をほじくることがそれほど不快ではなかった」村上訳「しかし今回、私はそれをけっこう楽しむことができた」田口訳「しかし今回、私はそれを愉しんでいる」。いずれも正反對の誤訳。この先、マーロウは女とムフフになりかけるのでそう解釈したくなる気持はわかるが、まったくちがう。

[5]

おれはドアを開けて壁沿いに隣まで行き、小さなブザーを押した。中では何も動かない。足音もしない。するとチェーンを溝にはめるカチャカチャ音がして、ドアが数センチほど明るさと空疎さに向けて開いた。ドアの背後から声がした。「どなた？」

「砂糖を一カップお借りできませんかね？」

「砂糖はありません」

「じゃあおれの小切手がくるまで何ドルか用立ててもらえませんかね？」

さらに沈黙。そしてドアがチェーンの限界まで開き、そのすき間に彼女の顔が覗いて、影になった目が外のおれを見つめた。ただの暗い中の穴だ。木に高く設置された照明灯がぼんやりとそれらを照らしている。

「だれなの？」

「お隣さんですよ。昼寝をしていたら声で目が覚めたんです。声がいろいろ言っていて。興味深いことを」

「興味深いことは他所で探して」

「そうしてもいいですよ、キングさん—失礼、メイフィールドさんでしたっけ—でも本当にそうしていいんですか？」

彼女は動かず目も動じなかった。おれはタバコを箱から揺すって取りだし、ジッポライターのてっぺんを親指で押し上げて着火ホイールを回そうとした。片手でできるはずだ。できるにはできるが、かなり苦労させられる。ようやくやりとげて、タバコに何とか火をつけ、あくびをして、鼻から煙を吹き出した。

「アンコールは何をしていただけるのかしら？」

「本当にお堅いことを言うなら、ロスに電話しておれを遣わした筋に告げるべきなんだ。説得次第ではやめとくかもね」

女は吐き捨てるように言った。「まったく、この午後だけで二人とはね。女としてツキの絶頂ってどこかしら」

「さあねえ。おれは何も知らないんだ。手玉にとられたような気もするが、はっきりしない」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「ちょっと待って」彼女はおれの鼻先でドアを閉めた。だがそう長くは消えていなかった。チェーンが中の溝から外されて、ドアが開いた。

おれはゆっくり中に入り、彼女は下がっておれから離れた。「どこまで聞いたの？ それとドアをしまてちょうだい」

肩でドアを閉めて、そこにもたれた。

「いささか剣呑な会話の切れ端をね。ここの壁はタップダンサーの財布並に薄いもんで」²²

「芸能界の人なの？」

「芸能界の真逆。かくれんぼ商売の人間だ。名前はフィリップ・マーロウ。以前に会ってる」

「そうなの？」彼女は慎重に小さな足取りで遠ざかって開いたスーツケースのところに行った。いすの肘掛けによりかかる。「どこで？」

「ロスのユニオン駅。二人とも列車の乗り継ぎを待ってた。おれは君に興味があった。君とミッチェルさんとの間のやりとりに興味があった—そういう名前だろ、あいつは。そこでは何も聞かなかったし、大したものは見えなかったよ。おれは喫茶店の外にいたからね」

「で、その何が興味を引いたわけ、でっかくかわいらしい^{なにがし}某さんかなんか？」

「いまその一部は話した通り。もう一つ興味を引かれたのは、あいつと話したあとでの君の変わりようだ。役作りの様子を見せてもらった。きわめて意図的だったね。そこらの軽薄なたたき上げの当世風かわいこちゃんに変身してみせた。なぜなんだ？」

「その前のあたしは何だったの？」

「素敵で静かな育ちのいい娘」

「そっちが芝居なのよ。もう片方が自然な人格。だからこんなのも似合うでしょう」と小さな自動拳銃を脇から持ち上げた。

それを見つめた。「ああ、銃ね。銃で脅そうとは思わなくてくれ。生涯ずっと銃と暮らしてきたんだおしゃぶりは古いデリンジャー、シングルショット、リバーボートの賭博師どもが持ち歩いてるようなやつだ。大きくなったら、それは卒業して軽量スポーツライフルに移り、それから.303口径の射撃ライフルとかね。一度望遠スコープなしで、八百メートル先の牛を倒したよ。ご参考までに、八百メートル先だと、その標的の全身が切手サイズになっちまうんだ」

「すばらしいご経歴なこと」

22 Hooper's wallet. 清水訳「ダンサーの財布」村上と田口訳「浮浪者の財布」。hooper は歩く人という意味もあり、ここだけ見れば浮浪者という解釈もあるが、次の女の「芸能界の人か」という台詞が出てくるためには、ダンサーのほうでないとダメ。清水訳が正解。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「銃じゃ何も解決しないよ。下手な第二幕にさっさと引かれる幕でしかないんだ」

女はかすかに微笑して銃を左手に移した。右手でブラウスの襟の端をつかみ、すばやい決然とした動きでそれを腰まで引き裂いた。

「次に、別にまったく急ぐこともなく、こんなふうに銃を持ち替えて」——彼女は銃を右手に戻したが、銃身のほうを握った——「銃床で自分の頬骨にたたきつけるの。見事な青あざができるわよ」

「そしてその後、君は銃をきちんと構えなおして、安全装置を解除して引き金を引くわけだ。その頃にはちょうどおれも、スポーツ欄のトップ記事を読み終えてるだろうよ」

「部屋の半ばまでもたどりつけないわね」

おれは脚を組んで後ろにもたれ、椅子の横のテーブルから緑のガラス製灰皿を持ち上げて、それをひざにのせ、吸っていたタバコを右手の人差し指と中指にはさんだ。

「部屋のどこまでだろうと行き着きやしないよ。ここにこうやってすわってるよ、実に快適にリラックスしてね」

「でもいささか死んだ状態になるわ。あたしは射撃の腕はいいし、距離だって八百メートルもない」

「そしたら、おれが君を襲おうとして、自分は身を守ったという話をサツに売り込むわけか」

女は銃をスーツケースに投げ込んで笑った。心底からの笑いで、本当におもしろがっているように聞こえた。「ごめんなさいね。あなたがそこに脚を組んですわって、頭に穴を開けて、あたしが自分の名誉を保とうとして撃ちましたと説明するなんて——その様子を考えたらちょっと笑えるわ」

女は椅子にどすんとすわり、あごを片手で覆いつつ身を乗り出し、ひじを膝についた。顔はこわばり生気がなく、濃い赤毛がその顔をいささか豪勢すぎるほどに取り囲んでいたの、その顔は実際よりも小さく見えた。

「結局あたしをどうするおつもり、マーロウさん？ それとも話が逆なのかな——まったくどうもしない代償として、あたしが何をして差し上げられるのかしら？」

「エレノア・キングってだれ？ ワシントンDCではどんな人間だったんだ？ なぜ道中のどこかで名前を変えて、かばんのイニシャルをはがしたんだ？ そういう細かい話を教えてほしいもんだね。だが話しちゃくれまい」

「さあどうなんでしょうねえ。持ち物からイニシャルをはがしてくれたのは赤帽よ。とっても不幸な結婚をして、いまや離婚したから、昔の名前に戻る権利ができたと話したのよ。それがエリザベスとベティ・メイフィールド。決してありえない話じゃないでしょう？」

「ああ。だがミッチェルの説明がつかない」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

女はうしろにもたれてくつろいだ。その目は警戒したままだった。「道中で知り合っただけよ。列車に乗ってた人」

おれはうなずいた。「だがあいつは自分の車でここにやってきた。ここに君の予約を取ったのもあいつだ。この人たちに気に入られちゃいないが、明らかにかなり有力な人物の友人だ」

「列車や船で知り合って急速に仲が深まることだってあるわ」

「そうらしいね。借金の無心までしたもんな。大した急速だ。そして、君はあいつにさほど気がないような印象を受けたんだが」

「ふん、それがどうしたの？ でも正直いって、あたしあの人に夢中なの」彼女は手のひらを上に向けて見下ろした。「マーロウさん、だれに雇われたの、そして何のために？」

「ロサンゼルスで、はるか東部からの指示で動いている。君を尾行してどこかにチェックインさせるのが仕事だ。それはやった。だがいまや君はチェックアウトしようとしてる。こっちは元の黙阿弥だ」

女はこずるそうに言った。「でもいまやこっちはあなたがいるのを知ってる。だからあなたの仕事もずっとやりにくくなるわ。すると、私立探偵かなんかでしょう」

その通りだと言った。タバコはしばらく前に燃え尽きていた。おれは灰皿をテーブルに戻して立ち上がった。

「おれにとってはやりにくくなるが、探偵は他にもいくらでもいるよ、メイフィールドさん」

「ええそりゃそうでしょう、みなさんとっても素敵なせこい連中。中にはそこそこ後ろ暗くない人だっているわ」²³

「警察に追われてるわけじゃないだろう。警察なら楽々と捕まえられたはずだ。君の列車は知られていた。君の写真と説明までくれたよ。だがミッチェルは君を思い通りに操れる。あいつは金以外のものも求めてくるぜ」

女がちよっと赤面したように思ったが、その顔に光は当たっていなかった。「そうかもしれないわそしてあたしも嫌じゃないのかも」²⁴

23 Some of them are even fairly clean. 村上訳「清潔な人」清水訳「女に手を出したりしないひと」。この時点でまだマーロウは彼女に手を出していないので清水訳はまずおかしい。またこの次にマーロウは警察の話をする。だからこの clean は衛生面の話ではなく、後ろ暗いところのない潔白なヤツということ。だからマーロウは、身ぎれいと言っても天下のご正道の警察ってわけじゃないだろう、と言う。みんな何か魂胆があって追ってくるはずというわけ。だから「清潔な人」も正しくない。全員まちがひ。

24 Perhaps I don't mind. 金以外のものを求められるぞ、つまり体を求められるぞというのに対して、別にそれを気にしない、嫌じゃないかも、ということ。これまでも彼女は、自分がミッチェルにベタ惚れだとか、口先では彼のことがまんざらではないようなことを言っている。その続きの発言。村上訳「そんなことはどうでもいいかもしれないわよ」はピント外れの誤訳。田口、清水も同様。特に清水は、この前の部分でラリー・ミッチェルと女がすでにセックスをしたと思っている模様で「なんとも思っていなかったかもしれないのよ」と過去形にしている。実際は

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「嫌だろう」

彼女はいきなりたちあがってこちらに近づいた。「あなた、決して大もうけできる稼業じゃないんでしょう？」

おれはうなずいた。二人はふれあいそうなほど近づいていた。

「じゃあここから出て行って、あたしに会ったことさえ忘れるにはいかほど？」

「出ていくのは無料だ。それ以外となると、報告はしなきゃならない」

「いかほど？」その口調は本気のようなようだった。「あたしはかなりの依頼料を払えるのよ。そう呼ばれていると聞いたわ。強請よりもずっとすてきな言い方」

「意味がちがう」

「ちがわないこともあり得る。本当よ、まったく同じことにもなれる——一部の弁護士や医者でもそうよ。たまたまそういうのは詳しくて」

「そいつはご愁傷様ってところかい？」

「どういたしまして、お兄さん。この世でいちばんついてる女よ。生きてるんだから」

「おれは味方じゃないよ。ネタはばらさないほうがいい」

彼女は間延びしたしゃべり方をした。「おやおやこいつはびっくりね。良心をお持ちの探偵^{イヌ}とはね。聞いて呆れるわよ、ドチンピラが。あたしにとっては寝言も同然よ。さ、行っちまいなさいよ、私立探偵マーロウさん、ご懸念のくだらない電話でもしたらいかが。止めやしないから」

彼女はドアに向かったが、その手首を捕まえてくるりはこちらを向かせた。破れたブラウスは、別にすごく肌をむき出しにしてたわけじゃない、単にちょっと肌とブラジャーの一部をのぞかせてただけだ。ビーチにいけばずっと肌の露出は見られる、はるかに多く。でも避けたブラウス越しのお目にかかれない。

ちょっといやらしい目つきをしていたんだろう。というのも女はいきなり爪をむいて引っ掻こうとしたからだ。食いしばった歯の間からこう言う。

「さかりのついた雌犬なんかじゃないのよ。その薄汚い手をどけて」

もう片方の手首も掴んで、女を引き寄せた。女は膝で股間に蹴りを入れようとしたが、すでに近寄りすぎていた。すると身体の力が抜けて、頭を後ろに投げだし目を閉じた。その唇がせせら笑うようによじれて開かれた。涼しい夜で、海辺では寒いくらいだったかもしれない。だがおれのいるところは寒くなんかなかった。

まだキスだけ。今後求められるぞ、というのが主旨。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

しばらくして彼女はため息混じりの声で、ディナー用に着替えないといけないと言った。

「そうかよ」

またも間が空いて、男にブラジャーを外されたのはもうずいぶん前のことだと言う²⁵。おれたちはツインのソファベッドの片方に向かってゆっくりとターンした²⁶。どちらにもピンクと銀のカバーがかかっている。つまらん変なことばかり気がつく。

女の目は見開かれてからかうようだった²⁷。おれはそれを片方ずつ検分した。両方いっしょに見るには近すぎたからだ。均整が取れているように思えた²⁸。

女はささやくように言った。「ハニー、あなたすごくいいわ、でもどうしても時間がないの」

その口をかわりにふさいでやった。どうやら外からドアに鍵がさしこまれたようだったが、おれはあまり注意を払っていなかった。鍵がかちりといって、ドアが開き、ラリー・ミッチェル氏が入ってきた。

おれたちは身を離した。振り向くと、男はしょげた目つきでおれを見た。身長一八三センチ、タフで精悍。ほとんどうわの空のようにこう言った。

「ちょっと事務所でチェックしようと思ってね。12 Bがこの午後に貸し出され、それもこっちの部屋にチェックインしてまもなくだ。ちょっと不思議に思ったんだよ、だってここはいま空き室だらけじゃないか。そこでもう一つのキーを借りたんだよ。それで、このむきむき男はどなた、ベイビー？」

「『ベイビー』呼ばわりするなと言われたろう、忘れたか？」

それで何か思い当たったとしても、顔には出なかった。握りしめた手を脇でゆっくりと揺らしている。

「この人はマーロウっていう私立探偵よ。だれかに雇われてあたしを尾行してるの」

25 she said it was a long time since a man had unhooked her brassière. 清水訳「彼女は男にブラジャーをはずされたのは久しぶりだと言った」は、マーロウもすでに彼女のブラジャーをはずしたことになるのでまちがいの。まだはずしていない(彼女は策士なので、これからあなたが外してと暗に誘惑しているのですね)。田口訳はそのまま、村上訳はこれをカッコに入れて女のせりふにしているが、特に必然性はない。

26 one of the twin day beds. ここはツイン部屋なので、二つある一人用ベッドの片方ということ。清水訳「ツイン・ベッドの一つ」は正解。村上・田口訳「二人用の寝椅子」はまちがいの。

27 Quizzical. からかう、または問いかけるような意味。村上・田口訳は「戸惑う」で、まずそういう意味はないし、状況的にもここで女は戸惑ってなんかいない。すでに自分からブラジャーの話をして興奮させたり、誘う気満々、むしろ女のペースで事態が進んでいる。清水訳「何かを問いかけるようだった」は語義的にはありだが文脈的に見て意味はちがう。

28 細かい話になるが They seemed well matched. 片目ずつしか見られないので、均整がとれているかどうかはマーロウがそれぞれの目を頭の中で思い浮かべて比べるという作業が必要。だから本当に均整がとれているかはわからず、「そう思えた」というのがポイント。既訳はすべて、ストレートに均整／釣り合い／揃っているとなり、要点をはずしている。話の流れからはそれほど重要ではないが……

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「そこまで密着して尾行しなきゃいけなかったわけ？　なんだか美しい友情の現場におじゃましちゃったみたいだけど」

彼女はおれから身を引き剥がしてスーツケースの銃を取った。「お金の話をしてたのよ」と告げる。

「いつだって大間違いだ」とミッチェル。紅潮して目がギラギラしすぎている。「特にその立場だね。銃なんかいないだろう、ハニー」

そいつは右ストレートでおれを攻撃した。すごくすばやくリーチもいい。おれはその内側に踏み込んだ。クールで賢い動き。だが右が本命じゃなかった。それにこいつは左利きだった。ロスのユニオン駅でそれに気がつくべきだった。場数を踏んだ観察者、決して細部を見落とさない。おれの右フックは相手を空振りしたが、相手の左は空振りじゃなかった。

それをくらって頭がのけぞった。バランスをしばし崩し、その間に男は横に跳んで女の手から拳銃を取り上げた。それが宙を舞って、男の左手に落ちていたようだった。

「まあ落ち着いてくれよ。キザな台詞かもしれないけど、あんたに風穴を開けてもぼくはおとがめなしなんだぜ。本当にそうなる」

「わかった。一日五〇ドルの報酬は撃ち殺されない限りのことだ。射たれたら七十五ドルはもらわないと」

「あっちを向いてくだしやんせ。あんたの札入れを拝見させていただければ欣喜雀躍」

おれはそいつに、銃を無視して突進した。パニックにならない限り撃たないだろうし、こいつは自分のホームグラウンドにいて、何もパニックするようなことはない。だが女のほうはそこまで確信がなかったのかも。視界のいちばん端でぼんやりと、彼女がテーブルのウィスキーボトルに手を伸ばすのが見えた。

ミッチェルの首の横にくらわした。その口が何かわめいた。向こうもおれのどこかを殴ったが、どうでもよかった。おれのパンチのほう効いた。だがそれで賞品の腕時計がもらえることはなかったというのもその瞬間に軍用ラバに脳の後ろを直撃されたからだ。おれは暗い海の上に飛び出していつて、炎のかたまりとなって爆発した。

[6]

最初の感覚は、だれかにきついことを言われたらワッと泣きだしそうだというものだった。二番目の感覚は、この部屋がおれの頭には狭すぎるというもの。頭の全部が後頭部と思いきり離れていて横はすさまじい距離で乖離しているのに、こめかみからこめかみに鈍い脈打つビートがあるのだ。最近じゃ距離なんて何の意味もない。

三つ目の感覚は、何か遠からぬところでしつこいなる騒音がしているというものだった。四つ目最後の感覚は、背中に氷水が流れているというものだ。ソファベッドの片方のカバーから見て、おれは顔を下にうつ伏せに転がっていたということだ。顔がまだあればの話だが。おれはゆっくりと転がって身を起こし、するとガシャガシャいう音がして、それがドスンといって止まった。ガシャガシャドスンといったのは、溶けた水のたくさん入った、タオルの包みだった。おれをとっても愛してくれただれかが、それを後頭部にあてがってくれたのだ。それほど愛してくれなかつただれかが、おれの頭蓋骨の後ろを叩き潰したために。その二人は同一人物だったかも。人は移り気だ。

立ち上がり、あわてて腰を探った。札入れは左ポケットに入ったままだったが、そのフラップのボタンがはずれていた。中身を探った。全部揃ってる。情報はばれたが、それはもともと秘密ではなかった。スーツケースはソファベッドの足下のスタンド上で開いたままだった。つまり自分の部屋に無事戻っていたわけだ。

鏡のところに行って顔を見てみた。おなじみの顔に見えた。戸口に行ってドアを開けた。うなる音が大きくなった。真ん前には手すりにもたれた小太り男がいた。中背のデブだが、その脂肪はぶよぶよしているように見えない。眼鏡と、陰気な灰色のフェルト帽の下に大きな耳をしてる。トップコートの襟を立てている。手はコートのポケットに突っ込んでいる。頭の脇にのぞくかみのけは戦艦の灰色だ。スタミナはありそう。デブはたいがいそう。おれの背後の部屋からもれる光が、そいつの眼鏡に反射している。口に小さなパイプをくわえている。トイ・ブルドッグと呼ばれる種類のパイプだ。おれはまだ頭が朦朧としてはいたが、その男には何か気にかかるものがあつた。

「こんばんは」と男。

「なんかご用？」

「男を捜してるんですよ。あんたじゃない」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「おれはここで一人きりなんだ」

「なるほど。どうも」と男はおれに背を向けて、腹をポーチの手すりにもたせかけた。

うなる騒音のほうにポーチを進んだ。12 C室のドアが開けっぱなしで、照明がついていて、騒音は緑の制服姿の女性がかけている掃除機だった。

中に入ってその部屋を見渡した。女性は掃除機を切っておれをにらんだ。「なんかお探し？」

「メイフィールドさんはどこだ？」

彼女は首を振った。

「この部屋を借りてた女性だよ」

「ああその人。チェックアウトしましたよ。三十分前に」また掃除機のスイッチを入れた。「フロントで訊いてくださいよ」と騒音越しに声を張り上げる。「この部屋は清掃中です」

おれは後ろ手にドアを閉じた。掃除機のコードの黒蛇を壁までたどり、コンセントを引っこ抜いた。緑の制服姿の女性はおれを怒ってにらみつけた。彼女のところにいった一ドル札を渡した。怒りはおさまったようだ。

「電話したいだけだ」

「そっちの部屋に電話ないんですか？」

「考えるな。一ドル分だ」

おれは電話のところに行って受話器を上げた。「フロントです。ご注文は」と女子の声。

「マーロウだ。すごく悲しいよ」

「え、何？……ああそうだ、マーロウさんですね。どんなご用でしょう」

「彼女がいらない。話もできなかったんだ」

「あらそれはご愁傷様です、マーロウさん」まるで本気のような声。「ええ、ご出発になりました。こちらとしても引き留めるわけには――」

「行き先は言った？」

「支払いをして行ってしまいましたよ。ほんとに突然で。転送先の住所とかも何もなし」

「ミッチェルとか？」

「もうしわけございません。だれもいっしょにはいませんでした」

「なんか見たはずだ。どうやってここを立ち去ったんだ？」

「タクシーです。すみませんが――」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「わかった。ありがとう」おれは自室に戻った。

中背のデブが、膝を交差させて椅子に悠々とすわっていた。

「お越しくださり光栄ですよ。何かお役に立てることもありますか？」

「ラリー・ミッチェルの居場所を教えてくれ」

「ラリー・ミッチェル？」おれは慎重に考えてみた。「おれの知り合い？」

男は札入れを開いて名刺を抜き出した。苦労して立ち上がり、それをおれに寄越した。その名刺にはこうある。ゴープル&グリーン、捜査員、ミズーリ州カンザス市ブルーデンスビル310。

「さぞおもしろい仕事でしょうねえ、ゴープルさん」

「ふざけるんじゃない、この野郎。気は短いほうなんだ」

「そうかい。気が短いとどうなるか見せてもらおう。何するの——ヒゲでも噛むのか？」

「ヒゲなんかないだろ、このバカ」

「生やしたらどうだ。待ってやる」

男は立ち上がったがさっきよりずっと素早かった。自分の拳を見下ろした。いきなりその手に銃があらわれた。「拳銃で殴られたことあるのか、このバカ」

「カリカリすんなって。退屈なやつだ。鈍いやつはいつだってつまらん」

男の手が震えて顔が真っ赤になった。そして銃をショルダーホルスターに戻し、よたよたと戸口に向かった。「これで終わりじゃないぞ」と肩越しにすごんだ。

言い返しはしなかった。気の利いた返しがいるほどの台詞じゃない。

[7]

しばらくして事務所向かった。

「うまく行かなかったよ。お二人とも、彼女が乗っていったタクシーの運転手に見覚えはない？」

女子が即答した。「ジョー・ハームス。グランド通りを半ば行ったスタンドでたぶんもしかして見つかるかも。あるいは事務所に電話したらいかが。結構いいヤツですよ。一回あたしにコナかけてきましたけど」

「それがはるかパソ・ロブレスまでその話を蒸し返したいほど嬉しかった、と」受付係が嫌味っらしく言った²⁹。

「あら何よ。あなた、確かそのときいなかったわよねえ」

若者はため息をついた。「そうだよな。一日二十時間働いて家を買う金をなんとか工面しようとしてたからな。そしてその金が貯まるまでに、他の男が十五人も彼女といちゃついてるってわけ」

おれは言ってやった。「この娘はちがうよ。君をじらしてるだけだよ。君を見るときにはいつも目が輝くからね」

そしてニコニコ見つめ合う二人を残して外に出た。

ほとんどの小さな町と同様、エスメラルダは大通りが一本で、その両側に短い一街区かそこらだけ商店がゆったりと並び、その後ほとんど雰囲気は何も変わらずに人々が暮らす住宅街になる。だがほとんどのカリフォルニア州の小都市とはちがい、張りぼてのファサードもないし、お愛想まみれの看板もないし、ドライブイン式のハンバーガー屋もないし、葉巻カウンターやビリヤード場もないし、その前にたむろする街場のギャング連中もない。グランド通りの店舗は、古くて狭いが安っぽくはない店か、さもなくばしっかり現代風に板ガラスとステンレスの店頭に、はっきりまばゆい色のネオン照明がついている。エスメラルダの全員が裕福なわけじゃないし、全員が幸せってわけでもないし全員がキャデラックだのジャガーだのライレーだのに乗っているわけじゃない。だがはっきりと裕福

29 "And missed by from here to Paso Robles," 受付の若者と交換機的女子はカップルで、若者のほうは彼女がほかの男にナンパされたのをまんざらでもなさそうに語るのだから当然おもしろくないのだ。だからここは「そんなに嬉しかったのかよ、いい加減にしろよ」と言いたいので、この嫌味が出てくる。清水訳「そしてみごとにはねつけられたんだろう」は、彼女がきっちりねつけたなら若者が怒る理由はないのでまちがい。村上、田口訳「そしてここからパソ・ロブレスくらい遠くまでのを外した」「大きく的外した」も同様。みんなこのmissを狙いはずす、と解釈しているのでそうなるが、ここでのmissはそれ(ナンパされたこと)を恋しく思う、I miss youのmissなのだ。全員まったくダメ。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

な人間の比率はとても高いし、高級品を売る店は、ビバリーヒルズの店舗に負けないほど小ざれいで高価に見えるが、ずっと落ち着いた雰囲気だ。もう一つ小さなちがいがあった。エスメラルダでは、古いものは同時にきれいで、ときには格式があった。他の小都市では、古いものは貧相なだけだ。

街区の半ばあたりに駐車すると、電話局が真ん前だった。もちろん閉まっていたが、入り口はセットバックしていて、意図的に金のとれるスペースを犠牲にして作ったしゃれたアルコーブには、ダークグリーンの電話ボックスが二つ、見張り兵の詰め所のように設置されている。通り向かいには淡い黄褐色のタクシーが、歩道に対して斜めに、赤ペンキで印された場所に停まっていた。中に灰色の髪の男がすわり、新聞を読んでいる。そっちのほうに道を横切った。

「あんた、ジョー・ハームス？」

彼は首を振った。「しばらくしたら戻るよ。タクシー要るの？」

「いや結構」

そこを歩いて離れて店のウィンドウをのぞいた。そのウィンドウにはチェックの茶色とベージュのスポーツシャツがあり、それでラリー・ミッチェルが思い浮かんだ。栗の木色の重い靴、輸入物のツイード、ネクタイが二、三本、それにマッチするシャツが、ずいぶんと余裕をもって並べられている店の上には、かつて有名な運動選手だった男の名前がかかっている。その名は筆記体で、それがアカシアの背景にレリーフとして刻まれ塗装されている。

電話ががなり、運転手はタクシーを降りて電話に答えようと歩道を横切った。何かしゃべり、受話器を置き、タクシーにのって駐車場所からバックして出て行った。それがいなくなると、通りは一分ほどまったく空っぽとなった。そして何台か車が通り過ぎ、そして見てくれも身なりもいい有色人種の少年と、その着飾ったお連れさんが、街区を下りつつウィンドウを覗いてしゃべっている。緑の使い走りの制服を着たメキシコ人が、だれかのクライスラー・ニューヨーカーに乗って—もちろんそいつ自身の車かもしれない、わかったもんじゃない—ドラッグストアに入り、タバコを一カートン持って出てきた。そしてホテルのほうに車で戻っていった。

エスメラルダ・タクシー社という名前の書かれた、別のベージュ色タクシーが角をぐりとまわり赤い駐車場所にすべりこんだ。分厚い眼鏡をかけた、でかいボクサーじみたヤツが降りて、壁にかかった電話で到着を告げ、自分の車に戻るとバックミラーの後ろから雑誌を引っ張り出した。

そいつのところに歩み寄ると、そいつでまちがいがなかった。上着なしで、袖は肘より上までまくりあげている。まだビキニスーツの気候でもないってのに。

「うん、ジョー・ハームスはおれだがね」口にモクをつっこんで、ロンソンのライターで火をつけた。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「ランチョ・デスカンサードのルシールに言われたんだが、あんたがちょっと情報をくれるかもってね」とおれはタクシーにもたれ、でっかい満面の微笑を浮かべた。縁石を蹴飛ばしたほうがましだったかもしれない。

「何の情報？」

「今晚、あそこのコテージの一つから客を拾ったろ。12C 号室。ちょっと背の高い、赤っぽい髪でいい体つきの女子。名前はベティ・メイフィールドだが、たぶんそれは話してないだろうね」

「だいたい、おれには行き先を言うだけでよ。奥ゆかしいだろ？」彼は肺いっぱい煙をフロントグラスに吹き付け、それが平たく広がってタクシーの中を漂うのを眺めた。「で、どんな話を聞かせてくれるの？」

「ガールフレンドが出ていっちゃってねえ。ちょっと口論したんだよ。全部おれのせいだ。謝りたいんだ」

「そのガールフレンドさんはどっかに家はないの？」

「ずっと遠くで」

男はタバコをくわえたまま小指でそれをはじいて灰を落とした。

「それが彼女の腹だったのかもな。あんたに行き先を知られなくなかったのかも。そのほうがあんたのためかも。この街じゃホテルに女としけこむとパクられかねないもん。まあ確かに、かなり派手にやらささない限りそんなことにはならんけど³⁰」

「あるいはおれがウソつきなのかもな」と札入れから名刺を取り出した。男はそれを読んでこちらに返した。

「このほうがマシだ。かなりマシ。が、社の規定に反する。おれがこのポンコツを乗り回してんのは別に暇つぶしってわけじゃないんでな³¹」

「五で何とかならない？ それも社規に反する？」

「社の持ち主はおれの親父なんだ。そういう小遣い稼ぎがばれたらカンカンになる。金が嫌いなわけじゃないんだが」

30 "it has to be pretty flagrant" 公式にはホテルで未婚カップルがナニすんのは違法ってことになってるが、flagrant, つまりよっぽど目立つことをやらなきゃ、実際にはお咎めなしよ、ということ。清水訳「あんまりかっこうのいいもんじゃないぜ」村上と田口も同じ意味にしているが全員まちがいの。

31 "I'm not driving this hack just to build muscle." Build muscle は、古いスラングだけど 何もしない、という意味。既訳はすべて「運動のために」「筋肉/体を鍛えるために」と字義通りにとってまちがえてる。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

壁の電話が鳴った。男はタクシーから降りて、大股三步でそこまでたどりついた。おれはその場に立ち尽くし、唇を噛んでいた。男は何か話してから戻ってきてタクシーに乗り込み、一動作でハンドルの前にすわった。

「いかないと。すまんね。ちょっと遅れ気味なんだ。デル・マーから戻ったばかりで、ロス行きの7時47分便があそこで、乗降客があれば停車するんだよ。ここからの人はほとんどがそっちのほうに行くね」

男はエンジンをかけて、タクシーから身を乗り出してタバコを道端に落とした。

おれは「ありがとう」と言った。

「何が？」男はバックで出ていくと消えた。

おれはまた腕時計を見た。時間と距離を確認。デル・マーまで丸二〇キロ。だれかをデル・マーに運んで駅でそいつを降ろし、すぐに戻ってくるには一時間近くかかる。あいつは自分なりのやり方で教えてくれたんだ。何か意味がない限り、わざわざそんなことを話してくれるはずがない。

そいつが見えなくなるのを見送って、そして電話局の外の電話ボックスへと道を横切った。電話ボックスのドアは開けばなしにして、十セント玉を入れるとでかいゼロのダイヤルをまわした。

「ウェストロサンゼルスにコレクトコールを頼みたい」とブラッドショー局の番号を交換手に伝えた
「指名通話、クライド・アムニー氏。こちらの名前はマーロウ、エスメラルダ 4-2673 の公衆電話からかけている」

おれがそれだけのことを伝えるのにかかった時間よりはるかに素早く、交換手はアムニーの電話につないだ。ヤツは即座に手厳しく口を開いた。

「マーロウか？ やっと報告というわけか。まあ—聞こうじゃないか」

「いまサンディエゴにいます。彼女を見失いました。昼寝をしている間にこっそりずらかられた」

「まったく思ったとおり、ずいぶんと賢い探偵さんだな」やつは不愉快そうに言った。

「お考えほど悪い状況じゃありませんよ、アムニーさん。だいたいどこにいるか見当がついてます」

「だいたいじゃ話にならんのだよ。だれかを雇うときには、ずばり注文通りのものを提供してくれるものと期待してるんだから。そもそも、そのだいたい見当ってのはどういうことだ？」

「この一件がどういう話なのかについて、多少の目安を与えていただくわけにはいきませんかね、アムニーさん。列車に間に合うように、かなりあわててこの仕事に取りかからざるをえなかったもので秘書さんは実に魅力的な方ではありましたが、情報はほとんどくれなかった。あなただって、私が満足のいく仕事をできるようにってほしいと思うでしょう、ちがいますか、アムニーさん？」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

彼は不機嫌そうに言った。「ヴァーミリエ嬢が知るべきことは全部伝えたと理解しておる。私はワシントンの重要な法律事務所の要請で動いている。向こうの顧客はいまのところ名前を明かしたくない。君はとにかく、その人物を滞在場所まで追跡すればそれでいいんだ。滞在場所といっても便所やハンバーガー屋じゃないぞ。ホテルか、アパートか、だれか知り合いの家かもしれん。それだけだ。これ以上どう単純にしろというんだ？」

「単純にしてくれなんてお願いしてませんよ、アムニーさん。背景材料をお願いしてるんです。この女性がだれなのか、どこから来たのか？ こんな仕事を必要とするなんて、何をしでかしたことになるのか」

彼は罵声を浴びせてきた。「必要だと？ 何が必要か決めるなんて、何様のつもりだ？ あの娘を見つけて、居場所をはっきりさせ、その居場所を電話で伝えろ。そして支払いを受けるつもりなら、思いつき急いだほうがいいぞ。明朝十時まで時間をやる。間に合わなければ他を手配する」

「わかりましたよ、アムニーさん」

「いまズバリどこにいて、その電話番号は何番だ？」

「いまはなんかうろうろしてまして。ウィスキーボトルで頭を殴られたもので」

アムニーの口調は辛辣だった。「それはご愁傷様だな。どうせそのボトルの中身は君が飲み干したんだろう」

「おやおや、もっとひどかったかもしれませんよ、アムニーさん。殴られるのはおたくの頭だったかもしれないんですけど。朝十時頃にそっちの事務所に電話しますよ。だれがだれを見失うとかはご心配なく。同じ方面から同じ標的を追ってるやつらが他に二人いますから。一人はミッチェルっていう地元の野郎で、もう一人はカンザス市のゴープルっている探偵です。そいつは銃を持ってる。ま、おやすみなさい、アムニーさん」

アムニーは怒鳴った。「待て。ちょっと待て！ それってどういうことだ——他に二人の捜査員ってのは？」

「おれにその意味を訊くんですか？ 質問したのはこっちのほうですよ。どうやらおたくも、この仕事のかげらしかもらってないようですねえ」

「待った！ ちょっと待った！」そして沈黙、それからもはや怒鳴り散らさない、落ち着いた声。「朝一でワシントンに電話しよう、マーロウ。さっきは高飛車だったようなら失礼した。どうやら私もこのプロジェクトについて、もう少し情報をもらう資格があるように見えてきたぞ」

「そうっすねえ」

「また連絡をするときには、ここに電話してくれ。何時でもかまわん。本当にどんな時間でも」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「わかりました」

「ではおやすみ」彼は電話を切った。

受話器を戻して深呼吸した。頭はまだ痛んだが、めまいは消えていた。海霧と混じった冷たい夜風を吸い込んだ。電話ボックスを押し開けて外に出ると、通り向かいを見た。来たときにタクシー停車場にいた年寄りが戻っていた。おれはぶらぶらと道を渡り、グラスルームにはどう行けばいいか尋ねた。ミッチェルが、ベティ・メイフィールドさんをディナーつれていくと約束した場所だ——彼女の意向などお構いなしに³²。年寄りは教えてくれて、おれは礼を言い、また空っぽの通りを横切って戻り、自分のレンタカーに乗り込んで、来た道を戻り始めた。

メイフィールド嬢が7:47の列車に乗って、ロサンゼルスか途中の駅を目指した可能性はある。だがそうしなかった可能性のほうがずっと高い。駅まで料金をもらって客をのせたタクシー運転手は、そこに残って客が列車に乗るのを確認したりはしない。ラリー・ミッチェルはそう簡単にふりきれる相手じゃない。エスメラルダに来させるだけのネタを掴んでいるなら、そのまま居残らせるだけのネタがあるってことだ。おれがだれか知っていて、何をやってるかも知っている。その理由は知らない。だっておれ自身も知らないからだ。頭が半分でもあれば、そしてそれよりずっとたくさんあるはずだと判断しているが、おれがタクシーの行き先までは彼女の動きを追跡できると想像するのはまちがいない。最初の憶測としていま考えているのは、あいつがデル・マーまで車で行き、でかいビュイックをどっかの物陰に駐車して、女のタクシーがやってきて客を降ろすのを待った、というものだ。タクシーが元のところに戻り始めたら、ミッチェルが彼女を拾って、エスメラルダまで連れ戻す。考えている二番目の憶測は、女があいつに教えるのは、すでにあいつの知っていることだけだというものだ。おれはロサンゼルスで、未知の方面がおれを雇って彼女を尾行させ、おれはそれをこなして、そしてお近づきになりすぎようとするというまちがいを犯した。それでミッチェルは頭にくるだろう、動いているのが自分一人じゃないと示唆することになるからだ。だがあいつの情報が何であれそれが新聞記事からくるものであれば、永遠にそれを自分で独占できるはずもない。十分な興味と辛抱のある人間なら、いずれはそれを掘り起こせる。私立探偵を雇うだけの理由がある人間ならだれでも、すでにその情報を知っているはずだ。するとそこから、あいつがベティ・メイフィールドからむしり取ろうとしているものは、金銭的だろうと色事方面だろうとその両方だろうと、かなり素早く引き出さなきゃいけないということだ。

峡谷を五百メートルほど下ったところに、小さな照明付きの看板が海のほうを矢印で示し、こう書かれている。「グラスルーム」。道はくねくねと崖っぺちの家の間を通り抜ける。その家は窓に暖か

32 原文 whether he liked it or not だが、明らかに she のまちがいを。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

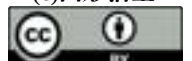
い照明をつけて、ぴかぴかの庭としっくい壁、一軒か二軒は自然石かれんが造の壁で、そこにメキシコの伝統様式のタイルが埋め込まれている³³。

最後の丘陵の最後のカーブを下ると、生の海藻の匂いが鼻腔を満たして、グラスルームの霧に覆われた照明がふくれあがって琥珀色の輝きとなり、ダンス音楽のサウンドが舗装された駐車場を横切って漂った。おれは見えないほぼ足下で海がうなる場所に駐車した。駐車係はいない。自分で車をロックして中に入るのだ。

せいぜい何ダースかの車だ。それを検分した。少なくとも山勘が一つ報われた。ビュイック・ロードマスターのハードトップは、おれがポケットのメモに書いたナンバーをつけていた。ほとんど入り口のあたりに停まっていて、入口側の最後の駐車スペースには、淡い緑と象牙色のキャデラック・コンバーチブルがあり、オイスターホワイトの革シート、前部シートを乾燥させておくためのタータンチェックの旅行毛布がかかっている、さらにディーラーの思いつくがらくたすべて、たとえばミラーつきの巨大なスポットライト二つ、マグロ漁船でも用が足りそうな長いラジオアンテナ、遠くまで優雅に旅行したいときにトランクを補うための折りたたみ式クロームラック、サンバイザー、バイザーで隠れる信号を拾うためのプリズムリフレクター、制御盤になりそうなほどつまみのついたラジオ、タバコを入れると代わりにそれを吸ってくれるタバコライター、その他各種のがらくたがついていてそれを見るといづれレーダーだの録音装置だの、バーだの高射砲だのが設置されるのも時間の問題だと思えてしまう。

このすべては、クリップオン式懐中電灯の明かりで見て取ったものだ。それを自動車登録証ホルダーに移動させた。そこにある名前はクラーク・ブランドン、ホテル・カーサ・デル・ポニエンテ、カリフォルニア州エスメラルダだ。

33 cliffside houses with (...) stucco walls and one or two of fieldstone or brick inset with tiles in the Mexican tradition.
この文は one or two of の of がポイント。その前の walls が省略されてる。ほとんどの家はしっくい壁だけど、一つ二つの家は壁が石やれんが造だ、ということ。既訳はみんな、全部の家がしっくい壁で、そこに石やれんがが一、二個はまっているとの解釈だが、まちがい。of がなければそういう解釈になるが、もっとちゃんと読まない。



[8]

入り口ロビーはバルコニーにあって、それが二層にわたるバーと食堂を見下ろしている。カーブしてじゅうたん敷きの階段がバーに続いていた。上階にいるのは、手荷物預かり係の娘と、電話ボックスの高齢者だけで、その高齢者の表情は、この人をなめちゃいけないぜ、と思わせるものだった。

階段を下りてバーに向かい、ダンスフロアを見渡せる、小さなカーブした場所に体をおさめた。建物の片側は巨大なガラス窓だった。その外には霧しかなかったが、晴れた夜に月が水面の上低くにかかっていればすばらしかっただろう。三人編成のメキシカンバンドが、メキシカンバンドのいつも演るような音楽を演っていた。何を演奏しようとするみんな同じに聞こえる。いつも同じ歌を歌い、いつも素敵な開放母音を持ち、引き伸ばした甘ったるい陽気さがあり、歌うヤツはそれをいつもギターでつま弾いて、アモールだのミ・コラソンだの、だがなかなか^{リンダ}なびいてくれない美女だのがやたらに出てきて、いつも髪は長すぎてギトギトすぎ、惚れた腫れたを演ってないときには、まるで裏通りのナイフさばきが無駄のない手練の技になっていそうだ。

ダンスフロアでは半ダースほどのカップルが、関節炎の夜警のようなあたりかまわぬ無謀さで跳ね回っていた。ほとんどはチークダンスをしていた、それをダンスと言えるものならだが。男たちは白のタキシード、女はキラキラおめめ、ルビーの唇、テニスやゴルフ仕込みの筋肉を身につけている。チークダンスをしていないカップルが一组。男は酔っ払いすぎてリズムが取れず、女はパンプスを踏まれないようにするのに忙しくて、それ以外のことは目に入らない。ベティ・メイフィールド嬢を見失う心配など無用だった。彼女はそこにいてミッチェルもいっしょだったが、とても喜んではいなかった。ミッチェルの口は開き、ニタニタして、赤くテカテカで、目はどんよりしている。ベティは首が折れないぎりぎりまで顔を背けていた。もはやラリー・ミッチェル氏のすべてにうんざりしてるのは実に明らかだった。

丈の短い緑の上着と、脇に緑の縞入り白ズボンを着たメキシコ人給仕が横にきたので、ダブルのギブソンを注文し、ここでクラブ・サンドイッチを食べていいか聞いた。そいつは「ムイ・ビエン、セニョール」と言って満面の笑みを浮かべ、姿を消した。

音楽が止まり、散漫な拍手があった。オーケストラは大感激して別の曲を演奏し始めた。ハーバート・マーシャルが巡業に出たような黒髪の給仕頭がテーブ



ハーバート・マーシャル

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

ルの間をまわり、親密な笑顔を振りまいては、あちこちで立ち止まってご機嫌伺いをしていた。それから、ちょっと髪に白いものが実に適度に混じり始めた、アイリッシュ風のでかいハンサムな人物のテーブルで椅子を引き、その向かいに腰を下ろした。その男は一人きりらしい。黒いディナージャケットを着て、襟にえび茶色のカーネーションをつけている。ちょっかいを出さない限り感じのいい男に見えた。その距離と照明では、それ以上のことはわからないが、ちょっかいを出すつもりなら、でかく、すばやく、タフで、体調最高でないと怖いぞ、というくらいはわかった。

給仕頭は身を乗り出して何かを言い、二人ともミッチェルとメイフィールド娘のほうを見た。給仕頭は不安そうで、大男のほうはまるで気にしていないようだった。給仕頭は立ち上がってそこを離れた。大男はタバコをホルダーにはめ、すると給仕が一晩中その機会を待っていたかのように、すぐにライターを差し出した。大男は顔も上げずに礼を言った。

おれのドリンクがきたので、ひつつかんで飲んだ。音楽が止まり、次の曲はなかった。カップルたちは分かれて自分たちのテーブルに戻った。ラリー・ミッチェルはまだベティから離れなかった。まだニタニタしている。そしてミッチェルは彼女をさらに引き寄せようとした。手を彼女の頭にまわす女はそれを振り払おうとした。男はさらに引き寄せて、紅潮した顔を彼女の顔に押しつけた。抗ったが、男の力が強すぎた。男は女の顔をさらに貪る。女は男を蹴飛ばした。男はむかついて顔をパッとあげた。

「離しなさいよ、この酔っ払いのろくでなし」息の下での声だがはっきりと聞き取れた。

男の顔に凶悪な色が浮かんた。女の腕をあざができそうなほど握りしめると、ゆっくり力まかせに相手を自分の体にぴったり引き寄せてそのまま押さえつけた。みんなそれを凝視したが、だれも動かなかった。

「ベイベー、どうしちゃったのよーん。もうパパのこと好きじゃなくなっちゃったのお？」と男は大きなだみ声で尋ねた。

彼女がひぎでそいつに何をしたかは見えなかったが。見当はついたし、痛かったらしい。女を突き飛ばし、その顔が険悪になった。そして飛びだして、女の横っ面を左右に張り飛ばした。すぐに女の肌は赤くなった。

彼女はほとんど動かず立っていた。それから、その部屋全体に聞こえよがしな声で、はっきりゆっくり言った。「こんどそれをやったら——防弾チョッキを着たほうがいいわよ、ミッチェルさん」

女はきびすを返して歩み去った。男はその場に立ち尽くした。顔がぎらつくほど蒼白となった——痛みのせいか怒りのせいかはわからなかった。給仕頭がゆっくりと男のところへ行き、問いたですように眉をあげつつ何かつぶやいた。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

ミッチェルは視線を下げて給仕頭を見下ろした。そして一言も発することなくそっちに歩き出したので、給仕頭はヨロヨロと道を開けるしかなかった。ミッチェルはベティの後を追ひ、その途中で椅子の男にぶつかったが謝ることもなかった。ベティはいまや、あのディナージャケットのでかい色黒の男のすぐ隣にある、ガラス壁脇のテーブルにすわるころだった。男がベティを見た。そしてミッチェルを見た。口からタバコホルダーを取りだしてそれを見た。その顔はまるで無表情だった。

ミッチェルはテーブルにやってきた。そしてだみ声ながら大声で言った。「痛いじゃないか、かわいこちゃん。おれに痛い目をさせたらずいだろうに。わかるか？ とってもまずいぜ。謝ったらどうだい」

彼女は立ち上がり、椅子の背から肩掛けを引きむしると男と対面した。

「お勘定はあたしがしましょうか、ミッチェルさん——それともあなたが支払いますの、あたしから借りたお金で？」

彼の手が、彼女の顔めがけて再びふりかぶられた。女は動かなかった。隣のテーブルの男が動いた滑らかな動き一閃で立ち上がり、ミッチェルの手首をつかまえた。

「落ち着けよ、ラリー。飲み過ぎだぞ」その声はクールで、ほとんどおもしろがるようだった。

ミッチェルは手首をもぎはなし、振り向いた。「口出しすんじゃねえ、ブランドン」

「喜んで、相棒さん。私も興味ないからね。だがそのご婦人を二度と殴ったりしないほうがいいぞ。ここはめったに人を放り出したりはしない——でもやるときもあるんだぞ」

ミッチェルは怒りをこめて笑った。「気取るんじゃねえよ、旦那」

大男は静かに言った。「落ち着けて、ラリー。そう言っただろう。これ以上は言わんぞ」

ミッチェルは相手をにらみつけた。「わかったよ。じゃあまた後でな」とおもしろくなさそうな声で言った。そして歩きかけて足をとめた「ずっと後でな」と付け加えつつ、ふり返った。そして出ていった——よろよろしつつもすばやく、何も見ずに。

ブランドンはじっと立っていた。女はじっと立っていた。次にどうすればいいか、自信がないようだった。

彼女は男を見た。男は彼女を見た。微笑したが、単に礼儀正しくさりげない微笑で、誘うような微笑ではない。彼女は微笑みかえさなかった。

「何かお役にたてることは？ どこかへお送りいたしますか？」そしてちょっと首をまわした。「おい、カール」

給仕頭がすばやくやってきた。ブランドンは言った。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「お勘定はなしでね。つまりこの状況を考慮して——」

女はきつい口調で言った。「ちょっと。他の人にお勘定を払ってもらうのはお断りよ」

彼は首をゆっくり振った。「当店のならわしです。私個人とは何の関係ありません。ですがドリンクを一杯お届けさせていただいてもよろしいでしょうか？」

彼女はさらに男を見つめた。確かに女を酔わせる男ではあった³⁴。「届けさせる、なの？」

彼は礼儀正しく微笑した。「おやそれでしたら、私がお持ちいたしますよ——もしおかけになっていたのでしたら」

そして今度は、彼は自分のテーブルの椅子を引いた。そして彼女はすわった。そしてその瞬間、一秒の狂いもなく、給仕頭がオーケストラに合図して、別の曲の演奏が始まった。

クラーク・ブランドン氏は、声を張り上げずとも欲しい物を手に入れられる人物らしかった。

しばらくして、おれのクラブ・サンドイッチがきた。自慢するほどのものじゃなかったが、食べた。食った。三十分ほどそこにとどまった。ブランドンと彼女はうまくやっているようだ。どちらも静かだった。しばらくして二人は踊った。そこでおれは店を出て外の車の中にすわりタバコを吸った。彼女はおれを見たにしても、気づいたそぶりは見せなかった。ミッチェルがおれに気づかなかったのはわかってる。階段をあまりに急いで上がり過ぎていたし、頭に血が上りすぎて何も見えなかった。

十時半頃、ブランドンが彼女と出てきて、二人でキャデラック・コンバーチブルの幌を下ろして乗り込んだ。おれは隠れようとせずそれに追跡した。というのも二人が向かう道は、エスメラルダのダウンタウンあたりに戻ろうとするならだれでも使う道だからだ。二人が赴いたのはカーサ・デル・ポニエンテで、ブランドンは車庫に通じる斜路を車で下っていった。

つきとめるべきことはあと一つしかなかった。おれは脇の駐車スペースに車を停めて、ロビーに入って構内電話のところに行った。

「メイフィールドさんにつないでもらえますか。ベティ・メイフィールド」

「少々お待ちください」——しばし間——「ああ確かに、ちょうどチェックインされたところです。いまお部屋の電話を鳴らしております」

またも、ずっと長い間。

「もうしわけありません、メイフィールド様のお部屋はお出にならないようです」

34 He had what it took all right. 女が値踏みして、良い男だわー、と思わせるだけのものを持っていた、ということですねー。次の「届けさせる？」はもちろん「人に届けさせるの？ あなたがきてよ」という誘い文句。それが出てくるために、ベティがそうやって相手を値踏みしたのがポイントで、文として実質的にベティ視線。村上訳「彼は彼女に好きなだけ自分を見させておいた」田口訳「彼のほうは悠然と構えていた」はどちらも、ベティ視線とその値踏み内容がまったく出ていないので訳として不適切。清水訳は……言うまでもない。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

おれは礼を言って電話を切った。彼女とブランドンがロビーで一回下りないとも限らないので、急いでそこを出た。

自分の借り物馬車に戻り、霧の中を峡谷を抜けてランチョ・デスカンサードになんとか戻った。事務室のあるコテージはもう施錠され無人のようだった。外にあるぼやけた照明一つが、夜間用呼び鈴の場所を示している。おれは手探りで 12C までたどりつき、車を駐車場所におさめて、あくびしつつ部屋に入った。寒くて湿気てて惨めだった。だれかが部屋に入って、縞模様のカバーをソファベッドから外し、それとおそろいの枕カバーも取りのぞいていた。

おれは服を脱ぐと髪ぐしゃぐしゃのまま頭を枕にのせて³⁵、寝た。

35 put my curly head on the pillow. 村上訳「縮れ毛の頭」田口訳「カールした髪」。完全なまちがいはないが、「そんなヘアスタイルにしたんですかー」と思ってしまう。髪をとかすことなく寝ました、ということ。清水俊二はもちろん無視。

[9]

何かを叩く音で目が覚めた。軽い音だが、とてもしつこかった。それがずいぶん長いこと続いていて、それがとてもじわじわとおれの眠りを貫通したのだという感じがした。寝返りを打ってそれを聞き入った。だれかがドアを開けようとして、そして叩く音がまた始まった。腕時計を見た。かすかな燐光表示で、三時過ぎなのがあった。おれは起き上がり、スーツケースのところに行って手をつっこみ銃を取りだした。ドアのところに行って、それをかすかに開けた。

スラックス姿の黒い人影がそこにあった。何やらウィンドブレーカーも着ている。それに頭に黒いスカーフを巻いている。女だ。

「何かご用？」

「入れて——急いで。明かりは点けないで」

ベティ・メイフィールドってわけか。おれはドアを開き、彼女は霧の一筋のようにすべりこんだ。おれはバスローブに手を伸ばして着た。

「他にだれか外にいるのか？ 隣はだれもいない」

「いえ、一人よ」彼女は壁にもたれて粗い息をついた。おれはおぼつかない手つきでペン型懐中電灯をコートから取り出し、小さな光であたりを照らしてヒーターのスイッチを見つけた。その小さな光で彼女の顔を照らした。彼女はまぶしそうに瞬きしつつ目をそらし、手を挙げた。おれは明かりを床に向け、そのまま窓まで這わせて両方とも閉じ、ブラインドを下ろしてスラットを閉めた。そして部屋に戻って明かりのスイッチを入れた。

彼女はため息をついたが、何も言わなかった。まだ壁にもたれている。一杯飲みたい様子だった。おれはミニキッチンに出かけて、ウィスキーをグラスに注ぎ、持って行ってやった。彼女はそれを振り払ったが、それから気を変えてグラスをつかむと飲み干した。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

おれはすわってタバコに火をつけた。いつもながらの機械的な反応で、他のだれかがやると本当に退屈な行動だ³⁶。そしてそこにじっとすわって、彼女を見て待った。

広大な無の深遠を横切っておれたちの目があった。しばらくして、女はウィンドブレーカーの斜めに切ったポケットにゆっくり手を入れると、あの銃を引っ張り出した。

「参ったね。またそれか」

女は銃を見下ろした。その唇がわなないた。それをどこに向けるわけでもなかった。体で押すようにして壁から離れると、部屋を横切って銃をおれの肘のところに置いた。

「もう見たよ。古くからの知り合いでね。最後に見たときはミッチェルが持ってた。それで？」

「だからあなたをノックアウトしたのよ。あの人があなたを撃つと思って」

「そんなことをしたら、あいつの計画がすべてフイになっただろう——どんな計画であれ」

「ふん、確信が持てなかったのよ。ごめんなさい。殴ってごめんなさい」

「氷をありがとう」

「銃は見ないの？」

「もう見たよ」

「カーサからずっと歩いてきたの。いまはあそこに滞在してるのよ。この午後に——移ったの」

「知ってる。デル・マー駅までタクシーに載って、晩の列車に乗ろうとして、そしたらミッチェルがそこで君を拾って車で連れ帰った。いっしょにディナーを食べて踊って、ちょっとしたいさかいがあった。クラーク・ブランドンっていう男がコンバーチブルでホテルに連れ帰ってくれた」

彼女はおれを見つめた。そしてとうとう、他のことを考えているうわの空の声で言った。「あそこであなたは見かけなかったけれど」

「バーにいたんだ。そこにミッチェルといるとき、君はひっぱたかれたり、今度のときは防弾チョッキを着るとあいつに言ったりするので忙しかったよな。そしてブランドンのテーブルで、君はおれに背を向けてすわってた。おれは君より先に出て外で待っていたんだ」

「あなたがまともな探偵に思えてきたわ」と彼女は静かに言った。その目がまた銃を見た。「あいつ、最後まであたしに返さなかったの。もちろん証明はできないけど」

36 I sat down and lit a cigarette, the always mechanical reaction that gets so boring when someone else does it. ご覧の通りこれは一文なので、「機械的な反応」「他人がやると退屈」はすわってタバコに火をつけることにかかる。ところが田口訳は「こっちが誰かにやられたら、必ずうんざりさせられるリアクションながら、私のほうからは動かず、ただ彼女を見た」と、その後のすわって彼女を見るほうにかける解釈にしている。村上訳も、少しあいまいにしているが「いつもながらの紋切り型の対応だ。もし誰か他人が同じことをやったら、ひどく退屈に見えるだろう。それでもやはり私はそこに座って彼女を眺め」と、すわって彼女を見るほうにかかっているとも読める訳にしている。文の句点通りにするだけで、迷うところじゃないと思うんだがなあ。清水俊二は正しい解釈。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「それはつまり、証明したいと思っているってことか」

「ちょっとは役に立つかも。たぶん十分な助けにはならないでしょうけど。あたしの過去がばれてしまえばね。たぶん、何の話かあなたも知ってるんでしょう」

「すわれよ、歯ざしりはやめろ」

彼女はゆっくりと椅子のほうにいてその端っこにすわり、身を乗り出した。そして床を見つめた。

「ばれるようなことがあるのは知ってるよ。ミッチェルがそれをつきとめたからね。だからおれも見つけられる——その気になれば。見つけ出すべきことがあると知ってる人なら、だれだってできることだ。いまはまだ知らない。おれが雇われたのは、目を離さず報告するためでしかない」

彼女は一瞬顔をあげた。「それはやったの？」

少し間を置いた。「報告はしたよ。そのときは君を見失ってた。サンディエゴのことは言った。それは交換手からどうせわかることだ」

彼女は淡々と繰り返した。「見失った、ね。だれだか知らないけど、さぞ頼りがいのある探偵と思われてるでしょうね」そして唇を噛んだ。「ごめんなさい。こんなこと言うつもりじゃなかった。何かについて腹を決めようとしてるの」

「ごゆっくり。まだ朝の三時二十分だ」

「こんどはあなたがせせら笑うの？」

おれは壁のヒーターのほうを見た。何も見えなかったが。どうも寒気が和らぐような感じはしていた。おれは一杯飲もうと思った。台所にいて取ってきた。それを飲み干し、さらに注ぐと戻った。

いまや彼女は人工皮革の小さなフォルダーを手に持っていた。それをおれに見せた。

「この中にアメリカンエクスプレスの小切手が五千ドルあるの——百ドル単位で。五千でどこまでやってくれる？」

おれはウィスキーを一口すすった。値踏みするような表情で考えてみせた³⁷。

「通常の経費を想定するなら、それだけあればフルタイムで数ヶ月おれを買い取れる。ただし、おれがたまたまそのとき売りに出ていればの話だが」

彼女はそのフォルダーで椅子の肘掛けを叩いた。もう片方の手は、ほとんど自分の膝小僧を引きむしりそうになっている。

37 I thought about it with a judicial expression. Judicial は裁判官のような、つまりは思慮深げで真面目くさった、という意味。そういう表情で考えた、と言っている。ついでに言うなら、まじめくさってと言うことは実際にはまじめではなく、単なるお芝居でそういう表情を浮かべてみせたということ。村上春樹訳「法律の枠内にある返事をした」はまったくまちがい。清水訳「判事のような顔を見せながら、彼女の言ったことを考えた」田口訳「裁判官のような顔をして考えてから言った」は、まあ合格。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「当然売りに出てるでしょう。それにこれはただの頭金。大金出せるのよ。あなたが夢にも見たことないほどお金があるの。最後の夫は金持ちすぎてあわれなほどだったわ。そこから優に五十万ドルいただいたのよ」

彼女はハードボイルド風の冷笑を浮かべて、それに慣れるまでの時間をたっぷり与えてくれた。

「だれも殺す必要はないと願いたいもんだがね」

「だれも殺す必要はないわ」

「その言い方は気に入らないな」

おれはこれまで指一本触れていない銃のほうを横目で見た。彼女は真夜中にカーサから、これを届けに歩いてきたのだ。触れるまでもなかった。おれはそれを見つめた。身をかがめてその匂いをかいだ。それでもまだ触れる必要はなかったが、いずれ触れることになるのはわかっていた。

「だれが弾を一発くらったんだ？」部屋の寒気が血管に忍び込んだ。氷水が流れている。

「一発だけ？ なぜわかるの？」

やっとおれは銃を手にとった。マガジンを抜き取り、それを眺め、戻した。握りの中にカチリとおさまった。

「二発だったかもしれん。マガジンには六発。この銃は七発入る。銃身に一発装弾してマガジンにもう一発加えることも可能だ。もちろん全弾打ち尽くしてマガジンに六発足したのかもしれないが」

彼女はゆっくり言った。「これ、ただの時間稼ぎね。核心の話をはっきり口にしたくないから」

「わかった。あいつはどこだ？」

「あたしの部屋の、バルコニーの長椅子に横たわってる。そっち側の部屋にはすべてバルコニーがあるのよ。すべての部屋をつなぐ壁があって、端の壁——部屋やスイートの間の壁ってこと——は外に斜めに張り出しているわ。尖塔職人か登山家なら、端の壁をまわって隣にいけるかもしれないけど、重い物を抱えては無理。あたしのいるのは十二階。その上はペントハウス階しかないわ」と彼女は口を止めて顔をしかめ、それから膝をひきむしっていた手で、何やら無力だという身振りをしてみせてから、続けた。「これ、ちょっと嘘くさいかもしれないけど、彼がそこに出るにはあたしの部屋を通るしかないのよ。そしてあたしは自分の部屋を通らせたりなんかしなかった」

「でもまちがいなく死んでるのか？」

「絶対まちがいない。絶対死んでる。完全に冷たくなって死んでる。いつ起きたかわからない。物音もしなかった。もちろん何かで目は覚めたんだけど。でも銃声みたいな音じゃなかった。とにかく、あいつはすでに冷たくなってたのよ。だから何で目が覚めたかわかんないの。それに、すぐに起き上

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

がったりはしなかった。ただ横になって、考え事してたの。眠りに戻れなかったから、しばらくして灯りをつけて、たちあがってタバコを吸ったわ。すると霧が晴れていて月が出てるのに気がついたのよ。地上はちがったけれど、上のほうのあたしの階ではね。バルコニーに出たら、下の方にはまだ霧が見えたわ。えらく寒かった。星がすごく大きい。壁際にかなりそうやって立ってて、それからやっとあの人を見たのよ。たぶんそれかなり嘘くさいでしょうね——ていうかかなりあり得ないように聞こえるはず。警察がそれをまともに受け取ってくれるとは思えないわ——初見ですら。そしてその後となると——まあ、こういう言い方をしましょうか³⁸。あたしは百万に一つのチャンスもないのよ——だれかに手助けしてもらわない限り」

立ち上がり、グラスに多少なりとも残ったウィスキーを飲み干すと、女のところに行った。

「二つ、三つ、言っておこう。まず、この件で君の反応はとても普通じゃない。冷静沈着とまでは言わないが、あまりに平然としてる。パニックも、ヒステリーも、何もしない。宿命論者まがいだ。次にこの午後の君とミッチェルの会話は全部聞かせてもらった。あの電球をはずして」——と壁のヒーターを指さした——「聴診器を裏の仕切り壁に当てたんだ。ミッチェルが握っていたネタは君の正体についての知識で、その知識はもし公表されたら、またも名前を変えて、またもどこか他の街に逃亡するはめになるようなことだ。命があるだけでこの世でいちばん幸運な女だと言ったね。いまや男が君のバルコニーで死んでいて、君の銃で撃たれていて、その男はもちろんミッチェルだ。だろ？」

女はうなずいた。「そう、ラリーよ」

「そして自分は殺してないと言う。そしてサツは初見ですら、まずそんなことは信じない。そして後になればまったく信じないと言う。すると前にもこの立場になったことがある、という見当になる」

彼女はまだおれを見上げていた。そしてゆっくり立ち上がった。二人の顔が近づき、お互いの目をしっかりと見つめた。そんなの、何の意味もない。

「五十万ドルといったら大金よ、マーロウ。あなたなら、あたしも決していやじゃないし³⁹。あたしとあなた、二人ですばらしい生活が送れる場所が世界にはあるのよ。リオの海辺沿いの高層マンション

38 well, just take it this way. これはマーロウへの呼びかけ。次に述べるような理解をしてくれということ。マーロウには自分の過去は語っておらず、したがってその後彼女の身元がわかるとなぜ事態がさらに悪化するか、マーロウにはわからない。彼女はここでそれを説明したくないので、ここで言い方を切り替えている。村上訳「ええ、どんなことになるかわかりきってる」は、初見とその後の方がいいというのが出ず、それをベティが語るのを避けようとしているのが出ない。田口訳「ええ、こういったほうがいいわね」は正しいが、その前が「あとになっても」で、後になれば事態が改善しそうなニュアンスになってしまいイマイチ。清水訳「しばらくして、気持ちが落ちついて、こう考えたの」はまったくの作文で意味的にもはずれ。

39 You're not too hard to take. あなた(マーロウ)なら、あたしが受け入れる (take) のもそんなにいやじゃない (not too hard)、つまりあなたとならつんでもいい、手に手を取っていっしょに逃げましょうよ、というお誘い。清水訳「かたくるしく考えることはないわ」村上訳「あなただって、それをあっさり断るほどお堅くはないでしょう」田口訳「そういう大金をみすみす逃すほどあなたはお堅いわじゃない」はすべて意味をかんちがいの誤訳。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

とかね。それがどこまで長続きするかはわからないけど、いつだって何かしら手は打てるものよ。そう思わない？」

「まったくもって百面相の女だなあ、君は。いまの君はギャングの情婦まがいの口ぶり。初めて見たときは、物静かで育ちのいいレディだった。ミッチェルみたいな優男に言い寄られるのを嫌がってたするとタバコを一パック買って、大嫌いだという様子でそれを一本吸った。それからあいつに身体をまさぐらせた——ここについてから。それからおれに向かって自分のブラウスを引き裂いたね、ハッハッハ、お手当くれるパパさんが帰ったあとのパーク・アヴェニューの愛人みたいにやさぐれて。それからおれにも身体をまさぐらせた⁴⁰。そしてウィスキーボトルで頭をぶん殴った。そしていまやりオでの美しい生活の話だ。朝に起きたときに隣の枕にのっかってる頭は、この中のどの君なんだい？」

「五千ドルの頭金。後からずっと大金。警察なんて、爪楊枝五本もくれないわよ。そう思わないんなら、ここに電話はあるわね」

「五千のために何をしろと？」

彼女は、危機が過ぎたとでもいうようにゆっくりと息を吐いた。「ホテルはほとんど崖っぷちに建ってるの。敷地の壁沿いには狭い歩道があるだけ。すごく細いの。崖の下は岩と海よ。ほとんど満潮。あたしのバルコニーはそういうのの真上なの」

おれはうなずいた。「非常階段はあるか？」

「車庫から続いてる。地下のエレベーターホールのすぐ横から始まるのよホールは車庫の床から二、三段上がったところなの。でもかなり長いきつい上りよ」

「五千ドルなら潜水服を着て上るのだってやろう。君はロビーを通して出てきたのか？」

「非常階段から。夜勤の警備員が車庫にはいるけど、車の一つで寝てたわ」

「ミッチェルは長椅子に横たわっていたと言ったな。血はたくさん流れてたか？」

女は顔をしかめた。「えーと——気がつかなかったわ。でも流れてたはずよね」

「気がつかなかった、だと？ あいつが死んで冷たくなってるのがわかるくらい近づいたんだろう。どこを撃たれてた？」

「あたしに見えるところじゃなかった。たぶん身体の下だったんでしょう」

「銃はどこにあった？」

「ポーチの床に転がってたわ——あの人の手の横」

40 Cuddle. 身体触らせてベッティングに近いことまでさせるという意味。本番までは行ってないのがポイント。既訳は「抱かせた」「身体を委ねた」「抱かれた」で、セックスしたように誤解されかねない。清水は最初のミッチェルとはセックスしたと思っているので、最初が「抱かれた」、次のマーロウに対しては「腕に抱かれた」と表現を変えているが、どっちもやってない。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「右、左？」

彼女はちょっと目を見開いた。「どうでもいいでしょ。どっちかなんて知らないわよ。なんか長椅子に横になって、頭が片っぽに垂れ下がって反対側に脚が垂れてたのよ。まだこの話、続けなきゃいけないの？」

「わかった。ここらの潮や海流については何も知らない。明日浜辺に打ち上げられるかもしれないし二週間は出てこないかもしれない。もちろん、うまく始末しおおせたらの話だ。死体が見つかるのがずっと先なら、男が撃たれたことさえわからないかもしれない。おそらく、まったく死体があがらない可能性だってある。高い可能性じゃないが、でもないわけじゃない。この水域にはバラクーダとか他のものもいるから」

「よくまあ、そこまで吐き気がしそうな話に仕立ててくれるわね」

「先に始めたからな。それと、自殺の可能性がなかったか考えてた。それなら銃は戻さなきゃならない。あいつは左利きだったのは知ってるか？ だからどっちの手か知りたかったんだ」

「あら。ええ、左利き。その通り。でも自殺じゃない。あのせせら笑いの自己満紳士でそれはない」

「人は自分の愛する最も大切なものを殺すこともあると言うぜ。それが自分自身だったのでは？」

「この御仁でそれはない」と彼女は手短かつ決然と言った。「もしあたしたちがとてもツイていたらたぶんあの人がバルコニーから転落したと思うでしょう。まったく、それに十分なくらい飲んだくれてたから。そしてその頃には、あたしは南米よ。パスポートはまだ有効だから」

「パスポートの名前は？」

女は手を伸ばして指先をおれの頬に走らせた。「あとちょっとであたしのすべてがわかるわ。焦っちゃダメ。あたしの秘めごとも、何もかもわかつちゃうんだから。ちょっとはお待ちなさいって」⁴¹



「そうだな。まずその秘めたアメックスのチェックをやっても アメックスのTC. サインは購入時と使用時の2回らおうか。暗闇はあと一、二時間続かし、霧はそれより長持ちする。君は小切手遊びにかかってくれおれは着替えるから」

おれは上着に手を突っ込んで万年筆を渡した。女は照明の近くにすわって、トラベラーズチェックのカウンターサインに取りかかった⁴²。歯の間から舌がのぞいている。ゆっくり慎重に書いている。書いた名前はエリザベス・メイフィールドだった。

41 ここは姦婦として、金と色で完全に男を籠絡したという確信に満ちて、甘えと媚びとエロいほのめかしと邪悪さを混ぜた、上から目線の雰囲気を出したいところ。既訳はどれもまちがっちゃいないが生真面目。短いので限界はある。最後の部分とか「もうちょっとだけ、お・あ・ず・け♡」とかしたい誘惑にはかられるが、そこまではね。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

つまり名前を変えるのはワシントンを出る前に計画済みだったってことだ。

着替えながら、おれが本当に死体始末の片棒担ぎをすると思うほどこの女はバカなんだろうか、と不思議に思った。

グラスをミニキッチンに運び出し、ついでに銃を持ってきた。スイングドアを閉じるに任せ、銃とマガジンをコンロのグリル部分下のトレイにすべりこませた。グラスをゆすいで拭いた。居間に戻り服を着た。彼女はおれを見もしなかった。

彼女は小切手のサインを続けた。終わると、おれは束になった小切手を受け取り、それを一枚ずつめくってサインをチェックした。大金はおれには無意味だ。その束をポケットに押し込み、明かりを消して戸口に移動した。それを開いたが、彼女が隣にいた。おれの近く、すぐ横だ。

「こっそり外に出てくれ。柵の終わるすぐ上あたりのハイウェイで君を拾う」

彼女はおれと向き合い、少し身を乗り出した。「あなたを信じていいの？」と囁き声で尋ねる。

「ある程度はね」

「あなた、少なくとも正直ね。それで隠しおおせなかったらどうなるの？ だれかが銃声を通報したり、あの人が見つかったり、部屋に入ったら、そこが警官だらけだったりしたら？」

おれはただ立ち尽くして彼女の顔を見つめ、答えなかった。

彼女はとても静かにゆっくり言った。「当ててみましょうか。さっさとあたしを売り渡すんでしょ。そしたら五千ドルは完全にパアよ。チェックは古新聞も同然。一枚たりとも現金化できないわ」

それでもおれは無言だった。

「このろくでなしが」という彼女の声は声色を半音すら上げることがなかった。「あたし、なんだってあなたのところなんかに来たんだか」

おれは彼女の顔を両手ではさみ、唇にキスした。女は身を引き離れた。

「このためじゃないわ。絶対にそれじゃないから。そしてちょっとした点をあと一つ。ホントにつまらないことで、どうでもいいのはわかってるんだけど。それは身を以て学ばなきゃならなかった。手練れの先生たちから。長く厳しく痛々しい講義で、それも大量に。でも信じられないかもしれないけど、でもあたしは本当に殺してないのよ」

「おれは君を信じてあげるかもしれないぜ」

42 began to sign them with the second signature. トラベラーズチェック経験者はもう絶滅危惧種かな。TC のサイン場所は2ヵ所あり、片方は購入時にサイン、使用時にもう片方にカウンターサインする。いまはその2つ目の、カウンターサインのほうを書いているのでそう訳した。既訳はすべて、「小切手にサイン」等とだけ。second はまったく出ない。が、それがないと次の段落で「名前を変えるのはワシントンを出る前に計画済み」となぜマローウにわかったのか理解不能なはず。購入時のサインがすでにエリザベス・メイフィールドになっていたからわかるのだ。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「無理しないでいいわよ。他のだれも信じようとしないうし」

彼女は向こうを向いてポーチに沿って忍び足で進み、階段を下りた。木々の間を敏捷に抜けた。百メートルもいかないうちに霧の中に姿が消えた。

おれは部屋の鍵をかけるとレンタカーに乗り込み、無音のドライブウェーを通して、夜間ベルを照明が照らす閉まった事務所の前を抜けた。この場所すべてがぐっすり寝ていたが、この峡谷をトラックが、建材やガソリンや、でっかい密閉式貨物車で、牽引つきのものもあればないものもあり、街が生きるために必要なものは何でもすべて満載して猛然と通り抜けている。フォグライトがついていてトラックは丘をのぼるのにゆっくりと重たげだった。

門から五十メートル行ったところで彼女が柵の端の物陰から出てきた。おれはヘッドライトを点けた。どこか水面で霧笛がうめいていた。上のほう、空の雲がきれた部分では、ノースアイランド基地からのジェット編隊が悲鳴と轟音と衝撃波の爆音をたてて通過し、おれがダッシュボードからライターを取りだしてタバコに火をつけるよりも短時間で見えなくなった。

女は身動きもせずに隣にすわり、まっすぐ前を見たまま無言だった。霧も前にいるトラックの後ろも見えていない。何も見えていない。単にそこにたった一つの姿勢で凍りつき、絶望で硬直し、まるで絞首刑に向かう人物のようだ。

さもなければ、彼女はまれに見る千両役者ってことだ。

[10]

カーサ・デル・ポニエンテは崖のふちに建てられ、3ヘクタールほどの芝生と花壇の中にあり、海と反対側に中央パティオがあって、ガラス仕切りの背後にテーブルが並べられ、格子屋根つきの歩道がその真ん中を歩いてエントランスに続いている。片側にバーがあり、反対側には喫茶室、建物の両端には黒い屋根の駐車場があって、それが高さ180センチの花咲く生け垣の背後に部分的に隠されている。駐車場には車が停まっている。全員が地下の車庫をわざわざ使おうとはしなかった。とはいえ、地下の湿った塩風はクロームによくないのだ。

おれは車庫に入る斜路近くの場所に車を停めたが、海の音がとても近く、漂う潮の霧が感じられ、その匂いもするしその味もする。車を降りて車庫の入り口へと移動した。狭い一段上がった歩道がその斜路の縁についている。入り口の途中に看板がかかっている：「下りはローギヤで。クラクションを鳴らしてください」。女はおれの腕をつかんで止めた。

「あたし、ロビーから入るわよ。階段を上がるには疲れすぎてから」

「わかった。それを禁じる法律もない。部屋番号は？」

「1224号室。つかまったらどうする？」

「何をしてつかまるの？」

「ほら、わかるでしょう。アレを片付けて——アレをバルコニーの壁越しに落とすの。それかどこかに」

「蟻塚の上に磔になるだろうよ。君がどうなるかは知らん。他に君のどんなネタをつかんでるか次第だろう」

「朝ご飯も食べてないのによくもそんな口がきけるわね」

彼女はきびすを帰してすばやく歩み去った。おれは斜路を見下ろした。そういうものの常としてカーブしていて、そして事務所がわりのガラス張り詰め所があり、上から灯りがぶら下がっている。もう少し進むとそれが無人なのが見えた。だれかが車のちょっとした作業をしている音がないか、聞き耳をたてた。洗車場の水、足音、口笛、夜警の男がどこにいるかを示す、どんなちょっとした音でもかまわない。地下の車庫ではとても小さな音でも聞こえる。でも何も聞こえなかった。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

下に降り、事務所の上端とほとんど同じ高さまできた。いまやしゃがみこめば、地下のエレベーターロビーに通じる小さい階段が見えた。そこに案内つきのドアがある。「エレベーター方面」。ガラスの小窓があり、その向こうには灯りが見えたが、それ以外はほとんど見えない。

さらに三步進んで凍りついた。夜警の男がまっすぐおれを見ている。でっかいパッカード・セダンの後部座席にいたのだ。その顔を照明が照らし、眼鏡をかけているので光がその眼鏡に反射している車の隅に快適そうにもたれかかっている。おれは立ち尽くして相手が動くのを待った。動かなかった頭が車のクッションにもたれている。口が開きっぱなし。なぜ彼が動かないか知る必要があった。おれがいなくなるまで寝たふりをしているだけかもしれない。おれが去ったら電話に急行して事務所に連絡するのだ。

だがそこで、それは馬鹿げていると思った。このシフトに入ったのは晩になってからのはずだし、客すべての顔を覚えているはずもない。斜路のふちの歩道は、歩くためのものだ。いまは朝四時近いあと一時間もすれば明るくなってくる。そんな遅い時間にやってくるホテル荒しはいない。

おれはまっすぐパッカードのところに歩み寄り、そいつをのぞき込んだ。車はすべての窓がぴっちり閉まっている。男は動かなかった。ドアのハンドルに手を伸ばし、音をたてずに開けてみようとした。それでも動かなかった。とても肌の色が薄いようだ。そして寝ているようで、ドアを開ける前からいびきが聞こえた。そして真正面からくらってしまった——しっかり乾燥させた大麻⁴³の甘ったるい匂いだ。男はあっちの世界にいっちゃって、平和の谷におわし、そこは時間が遅くなって停止する場所で世界は色彩と音楽まみれ。そしていまから数時間後にはクビになるだろう、おまわりに逮捕されてブタ箱送りにならなかったとしても。

車のドアを閉め直して駐車場を横切りガラスパネルのドアに向かった。小さなむきだしのエレベーターロビーを通り抜けた。そこはコンクリート床で無地のエレベーターのドアが二つ、その隣には重たい自動で閉じるドアスプリングのついた開口部がある。非常階段だ。それを引き開けて上った。ゆっくりと。十二階に地下一階はかなりの階段だ。通り過ぎるごとに各階の消防ドアを数えた。階数が書いていなかったからだ。重く、固く、灰色で、階段のコンクリートと同じだ。おれは汗をかき、息をきらして、やっと十二階の廊下に通じるドアを開けた。こそこそと進んで 1224 号室にたどりつき、ドアノブをまわしてみた。鍵がかかっていたが、すぐに開かれた。まるで彼女がすぐ横で待っていたかのようなようだった。おれはその横を通り抜けて椅子にすわりこみ、息が整うまで待った。大きく広々と

43 Well-cured marijuana. cured は本当なら、保存できるようにした、つまり大麻の場合なら乾燥させたということ。

村上訳「味付け加工された」田口訳「風味をつけた」は 17 章冒頭でのこの駐車係との会話で「cured with honey」というのが出てくるので生まれた訳だろう。だから誤訳と言うのはためらわれるが、そんなものが実在するとも思えない。ドラッグがらみなら W.バロウズで鍛えたワタシを信じなさい。だからここでは、単に「乾燥」にしておいた。清水俊二は、もちろん無視。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

した部屋で、フランス窓がバルコニーに続いている。ダブルベッドは、だれかが寝た様子があるか、そう見えるように細工されていた。脱ぎ捨てた服があちこちの椅子に散らばり、洗面用品がたんすの上、荷物。シングル泊二〇ドルの部屋に見えた。

彼女はドアの夜間ラッチをまわした。「何かトラブルあった？」

「夜警の男は目一杯ヤクをやってた。子猫なみに無害だ」おれはヨイショと立ち上がると、部屋を横切ってフランス式ドアのほうに向かった。

「待って！」と彼女が鋭く言った。おれは振り返った。「無駄よ、そんなことはだれもできない」

おれは立ったまま待った。

「警察を呼んだ方がましよ。それであたしがどうなろうとも」

「すばらしいアイデアだよ。どうして今まで思いつかなかったんだろう？」

「あなたは行って。これに巻き込まれる必要はないわ」

おれは何も言わなかった。彼女の目を見た。ほとんど開けていられないようだ。ショックが今頃襲ってきたか、あるいは何かのヤクだ。どっちかはわからなかった。

彼女はこっちの考えを読んだらしい。「睡眠薬を二錠飲んだの。もう今夜はこれ以上の面倒はもうたくさん。ここから出てって。お願い。起きたらルームサービスを呼ぶ。給仕がきたら、なんとかしてバルコニーまで行かせて、そしたら見つけるでしょう——何を見つかるにしても。そしてあたりはそれについて何一つ知らないの」舌がもつれ始めている。身震いして、こめかみを強くこすった。「お金のことはごめんなさい。あたしに返さないでね。そうでしょう？」

おれは彼女に近寄った。「返さなかったら、君自身が警察に洗いざらい話すからか？」

彼女は眠そうに答えた。「話すしかないでしょ。だってどうしようもないもの。いずれ吐かされるあたし——あたしもう疲れすぎて戦えない」

おれはその腕を取ってゆすった。彼女の頭がぐらぐらした。「二錠しか飲んでないのはまちがいないんだな？」

彼女は目をぱちくり開いた。「ええ。二錠以上は絶対のまないの」

「なら聞け。これからテラスに出てヤツの様子を見てくる。それからランチョに戻る。金は預からせてもらう。それと銃も持ってる。おれのところまで足がつくことはないだろうが——起きろ！ 聞け！」彼女の頭がまたぐらぐらし始めていた。彼女ははっと起き直り、目が広がったが、鈍くぼんやりしている。「聞け。君のところまで足がつかなければ、まちがいなくおれのところには足がつかない。おれは弁護士の依頼で働いていて、君を尾行するのが仕事だ。トラベラーズチェックと銃が見つ

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

かればすぐに話は決まってしまう⁴⁴。そして警察に君がする話なんて、木製のコインほどの価値もない。君のお縄がきつくなるだけのことだ。わかってんのか？」

「え、ええ。もうどうだっていいのよ」

「それは君自身が言ってるんじゃない。睡眠薬が言ってるんだ」

彼女はふらふら前進し、おれはそれを捕まえてベッドのほうへと向かわせた。彼女は何もおかまひなしにそこに倒れ込んだ。おれは靴を脱がせて、毛布をかけてやり、ベッドを整えた。彼女はすぐに寝てしまった。いびきをかきはじめた。おれは洗面所に行ってガサゴソ探し回り、棚にネプタールのびんがあるのを見つけた。ほぼ満杯だ。処方箋番号と日付があった。一ヶ月前の日付で、薬局はボルチモアのものだった。黄色いカプセルを手のひらに空けて数を数えた。四十七個あり、それでびんはほぼ満杯だ。自殺でのむときには、びんを全部飲み干す——こぼした分は別だが。あの手合いはほぼ必ず少しこぼす。錠剤をびんに戻し、びんをポケットに入れた。

戻ってまた彼女を見た。部屋は寒かった。ラジエーターをつけた、少しだけ。そしてやっと、ついにおれはフランス式のドアを開けてバルコニーに出た。外は死ぬほど寒かった。バルコニーは三×四メートル弱で、正面に高さ 70 センチほどの壁があり、そこから低い鉄の手すりが出ている。飛び越えるのはそこそこ簡単だろうが、うっかり転落することは絶対にあり得ない。

アルミ製のポーチ用長椅子が二つあり、クッションがついている。同じ種類の肘掛け椅子も二つある。左側の仕切り壁は彼女が言ったとおり張り出していた。尖塔職人ですら、登攀装具なしにはその出っ張りをまわりこむのは無理だ。反対側の壁は、ペントハウスのテラスの一つらしきものの縁へと上がって続いていた。

どちらの長椅子でもだれも死んでいないし、バルコニーの床にも死人はなく、どこにも死人はなかった。血痕がないかを調べた。血はなし。バルコニーに血はない。安全壁に沿って調べた。血はなし。何かが乗り越えさせられたような跡もまったくない。壁際に立って、鉄の手すりにつかまり、思いつき可能な限り身を乗り出してみた。壁面からまっすぐ下を見下ろすと地面だった。近くには茂みが生え、狭い芝生があり、石敷きの歩道があり、さらに別の帯状の芝生、そして重たい柵があってそれに沿ってさらに茂み。距離を目測した。その高さからの見極めは容易ではなかったが、少なくとも 10 メートルはあるはずだ。柵の向こうでは、海が半分水没した岩の上で泡だっている。

44 The traveler's checks and the gun will go right where they belong. 非常に意味がとりにくいところ。この段落でマローは、TC と銃を隠してたどれなくする、と一生懸命言っている。その続きなので、それが見つければすぐにそれぞれの役割がはっきりしてしまい、もう言い逃れできなくなるぞ、ということ。村上訳「旅行小切手と拳銃は、やがてしかるべきところに落ち着くだろう」田口訳「旅行小切手も銃もいずれ持ち主のもとに戻るだろう」は、やがて／いずれ、と悠長すぎ。right という単語があるので、すぐに、という意味合い。見つかり次第、というのが省略されているので解釈がちょっとむずかしい。清水訳「旅行小切手と拳銃は当分ぼくが預る」は、この二つが見つからないようにしなきゃいけない、という意味合いをきちんと理解し表現しているのでえらい。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

ラリー・ミッチェルはおれより二センチ弱ほど背が高かったが、体重は大まかな推測で七キロほど低い。80キロの死体をあの手すり越しに持ち上げて⁴⁵、海に落ちるほど遠くまで投げられるような人間は、まだこの世に生まれていない。女がそれに気がつかない可能性は、ギリギリあると言えはある。本当にギリギリの、一パーセントのそのまた十分の一あり得るかもしれないというだけ。

おれはフランス式のドアを開き、それを抜けて閉じると、部屋を横切ってベッド脇に立った。彼女はまだ熟睡している。まだいびきをかいている。おれは手の甲で彼女の頬に触れた。湿っていた。彼女はちょっと動いてムニャムニャ言った。そしてため息をついて枕に頭をおさめた。高いびきはなし昏睡もなし、コーマもなし。したがって薬の過剰摂取はない。

一つだけは本当のことを言ったんだな。それ以外についてはからっきしだが。

彼女のハンドバッグをたんすのてっぺんの引き出しで見つけた。裏にジッパーのポケットがついている。そこに彼女のトラベラーズチェックフォルダーを入れて、さらに情報を求めてバッグを探ったジッパーのポケットにはピン札が二つ折りで入っている。サンタフェの時刻表、彼女のキップが入っていたフォルダーと、鉄道キップの半券とプルマン車両の寝台予約票。ワシントン DC からカリフォルニア州サンディエゴまで 19 号車 E 寝台。手紙もなく、彼女の身元がわかるものもない。それは荷物の中に鍵をかけて入れてあるんだろう。ハンドバッグの主要部分には、女の持ち物だ。口紅、コンパクト、小銭入れとコイン、鍵が何本か、小さなブロンズの虎がぶらさがったキーリングにつけてある。ほぼ満杯に見えるが封は切られているたばこの箱。一本だけ使われた紙マッチ。イニシャルのついていないハンカチ三枚、爪ヤスリの袋、爪のお手入れナイフ、何やら眉毛道具、皮ケース入りのくし、マニキュアの小さな丸いびん、小さなアドレス帳。それに飛びついた。白紙、まったく使われていない。さらに袋にあったのは、ケース入りでフレームのキラキラしたサングラス、ケースには名前なし万年筆、小さな金の鉛筆、それだけ。バッグをもとのところに戻した。机にいてホテルの便せんと封筒を取り出した。

ホテルのペンを使ってこう書いた。「ベティ、死んでられなくてすまない。明日説明する。ラリー」

そのメモを封筒に入れて封をして、「ベティ・メイフィールドさんへ」と宛名を書くと、ドアの下から押し込まれたらありそうな場所に置いた。

ドアを開けて外に出て、ドアを閉め、非常階段を降り、声に出して「くそくらえ」と言った。そしてエレベーターのボタンを鳴らした。こなかった。何度も鳴らし続けた。やっと上がってきて、眠た

45 清水訳「175 ポンドの人間が手すりからからだを投げ出して海中にとびこむ」は、珍しくかんちがい。ミッチェルが飛び込むのではなく、だれかが死体を投げ込むということ。他の二人はあっている。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

い目をした若いメキシコ人がドアをあけて、おれに向かってあくびをして、それからすまなそうにニヤリとした。おれはニヤリとし返して何も言わなかった。

エレベーター正面のデスクは無人だった。メキシコ人は椅子にすわり、おれが六歩も歩かないうちにまた寝た。みんなおねむだったが、マーロウだけはちがうのです。マーロウは二十四時間働いて、その料金すら回収しないのです。

ランチョ・デスカンサードに車で戻ったが、そこではだれも起きていなかったの、愛おしそうにベッドを眺めたものの、スーツケースを荷造りした——その底にベティの銃も入っている——封筒に十二ドル入れて、出がけにそれを事務所のドアのスロットから部屋の鍵といっしょに入れた。

サンディエゴまで行き、レンタカーを返却して駅向かいの店で朝食を食べた。七時十五分にロス直行のディーゼル機関車二台編成の列車をつかまえた。十時ちょうどの向こうに着く。

家までタクシーで帰り、シャワーを浴びて2回目の朝食を食べると朝刊をざっと見た。十一時近くになって、弁護士クライド・アムニー氏の事務所に電話した。

ご本人が電話に出た。ヴァーミリエちゃんはまだお目覚めでないのかも。

「マーロウです。家に戻りました。そちらに寄っていいですか？」

「彼女は見つけたか？」

「ええ。ワシントンには電話しました？」

「女はどこだ？」

「面と向かってお伝えしたいんです。ワシントンには電話しました？」

「まずそっちの情報をいただこう。今日一日これからすごく忙しいんだ」その声は脆そうで魅力に欠けていた。

「三十分でうかがいますよ」おれはすぐに電話を切ってオールズモービルを預けたところに電話した。

[11]

クライド・アムニーの事務所みたいなのは多すぎるくらいだ。壁は直角にはめ込んだ櫛目模様の正方形の合板張りで、チェッカー盤みたいな感じになっている。間接照明で壁から壁まで一面のじゅうたん、家具はブロンド、椅子は快適、賃料はたぶんぼったくり。金属の窓枠は外開きで、建物の背後には小さいが整った駐車場があり、どのスペースも名前が白い板に描かれている。なぜだかクライド・アムニーの場所が空いていたので、使わせてもらった。運転手にオフィスまで運転させているのかも。建物は四階建てで真新しく、医者と弁護士しか入居していなかった。

入るとヴァーミリエちゃんがちょうど、一日のつらい仕事に向けての準備として、プラチナブロンドのセットした髪に仕上げを加えているところだった。少しばかりお疲れのようだった。彼女は手鏡を片付けてタバコをくわえた。

「おやおや、頑固野郎さん御自らお出ましってわけ。そんな榮譽に預かれるとはいったいどのようなことでございますの？」

「アムニーと約束がある」

「アムニー『様』と言いなさいよ、このサンピン」

「おにいたまと言いなさいよ、ねえちゃん」⁴⁶

彼女は一瞬で激怒した。「だれが『ねえちゃん』よ、この安手のチンピラが！」

「だったらサンピン呼ばわりはやめてくれ、とっても高価な秘書ちゃん。今夜はお暇？ またも水兵さん四人とおでかけだなんて言わないでくれよ」

彼女の目のまわりの皮膚の血の気がさらに失せた。その手は文鎮をつかんでかぎ爪状となった。ただそれをおれに投げつけようとはしなかった。「このろくでなしが」と彼女はいささかとげとげしく言った。そして通話機のスイッチをパチリと入れて、マイクに言った。「マーロウさんがお見えですアムニーさん」

46 *Boydie boy to you, sister.* この *Boydie boy*、清水訳「お兄さんだろ、ねえちゃん」。ぼくはこの解釈がしっくりくる。発音を崩しているのを反映して上のような訳にした。村上と田口は、アムニーはおまえのパパだろ、という意味の訳にしているが、そう断言できる材料はない。強いていうなら *Boydie-boy* が *body boy* と似ているので、肉体関係、つまりはセックス相手という解釈。厳しいと思う。愛人を兼ねているのは後ではっきりするが、アムニー弁護士がそんなムキムキ肉体派ではなく、*body boy* にはほど遠いのは明らかなので。だが村上/田口の解釈がまちがっているとはまでは言えない。結局何かははっきりわからず、その場でのいい加減な思いつきで、確証はない。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

そして後ろにもたれてあの目つきをくれた。「あんたを切り刻んで、靴をはくにも踏み台がいるくらいにしちゃえる友達だっているのよ」

「その台詞、だれかがずいぶん苦勞して思いついたんだろうなあ。でもいくら頑張っても才能がないとその程度だな」

いきなり二人とも爆笑した。ドアが開きアムニーが顔を突き出した。あごで入るように合図したが目はプラチナ娘を見つめていた。

おれは中に入り、一瞬後に彼はドアを閉めて巨大な半円形デスクの向こうにまわった。緑の革の天板と、そこに重要書類がどこまでも大量に山積みになっている。ダッパーフアッションの男で、きわめて入念に装いをしており、脚が短すぎ、鼻持ちならなすぎ、髪が薄すぎる。澄んだ茶色の目をしていて、弁護士にしてはかなり信用できそうに見えた。

「うちの秘書にちょっかい出してるのか？」と平静にはほど遠い声で尋ねた。

「いやいや。単なるあいさつのやりとりですよ」

おれは顧客用の椅子にすわり、何か礼儀正しさがいの態度で彼を見た。

「ずいぶんと怒っていたように見えたがな、彼女は」彼は取締役副社長めいた椅子にしゃがみ込み、タフな顔つきをしてみせた。

「三週間先まで予定が一杯だそうで。おれもそこまでは待てませんよ」

「とにかく言動には気をつけることだな、マーロウ。すっこんでろ。彼女は私有財産なんだ。おまえなんか鼻にも引っかけない。美しい女性であるにとどまらず、彼女は実に賢いんだ」

「じゃあそれ以外にタイプや口述筆記もこなせるってことですか？」

「何以外にと言いたいのかね？」彼はいきなり赤面した。「君からの御託はもうたくさん。とにかく気をつけることだな。十分に。私はこの街でそれなりの影響力があるんだから、君に赤信号を出すくらいにはできる。さあ報告を聞かせてもらおうか。手短に要点だけにしてくれ」

「もうワシントンとは話したんですか？」

「こっちのやったりやらなかったりしたことはどうでもいい。いますぐ報告したまえ。それ以外はこっちの問題だ。キングという娘のいまの居場所は？」

彼は素敵な削った鉛筆と、すてきなまっさらのメモ帳に手を伸ばした。そして鉛筆を落とし、黒と銀色の魔法瓶から水を一杯注いだ。

「取引しましょう。なぜ彼女を見つけないか教えてくださいよ、そしたら彼女の居場所をお伝えします」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「おまえは私の使用人だ。何も情報なんぞくれてやる義理はない」相変わらずタフな態度だったが、だんだんボロが出てきた。

「あなたの従業員になるかどうかは、おれの判断次第でしょう、アムニーさん。まだ小切手を現金化していないし、何も契約も交わしたわけじゃない」⁴⁷

「仕事を引き受けたらろう。前渡し金を受け取った」

「ヴァーミリエさんは前渡し金として二百五十ドルの小切手をくれました。そして経費分として二百ドルの小切手も。でもそれをまだ決済していない。ここにあります」とおれは二枚の小切手を札入れから取り出して、彼の前のデスクに置いた。「持っていてくださいよ、調査員がほしいのかイエスマンがほしいのか、腹を決めるまでね。そしてこっちとしても、仕事を提示されたのか、だまされてわけのわからん状況に巻き込まれたのかわかるまでは」

彼は小切手を見下ろした。ご不満の様子。「すでに経費を使ってるだろう」とゆっくり言う。

「それはかまいませんよ、アムニーさん。何ドルか貯金もありますし——それに経費は控除できる。それにおもしろかったし」

「頑固者だな、マーロウ」

「ですかねえ。でもこの稼業じゃそうならざるを得ない⁴⁸。さもないとこの稼業をやってられない。彼女が脅迫されてると言いました。ワシントンのご友人たちはその理由を知ってるはずだ。彼女が犯罪者なら、それはそれで結構。でもそれを教えといてもらわないと。それに、あなたではどうてい太刀打ちできない申し出を受けてるんですよ」

「金を積まれたら鞍替えするというのか？ それは倫理にもとる」と彼は怒ったように言った。

おれは笑った。「じゃあおれが倫理を持ってるって認めてくださる。腹を割って話ができるかもですねえ」

彼は箱からタバコを取りだして、魔法瓶とペンセットにマッチした中太りのライターで火を点け、うなるように言った。

「相変わらず気に食わん態度だ。昨日は君と同じくらいのことしか知らなかった。高名なワシントンの法律事務所なら、法的倫理にもとることを求めたりしないのは当然と思っていたのだよ。彼女はすぐにでも楽に逮捕できるのだから、何やら家庭のもめごとだろうと思ったんだ。奥さんか娘が逃げた

47 契約書がなくても合意は成立します。まして小切手を受け取ったらね。現金化してないから契約してないなんて言えません。「口座にお金は振り込まれたけど使ってないから無効」というに等しい無理筋。だがベティとのやりとりでも、小切手を受け取っておいて顧客でないとか屁理屈を何度もこねていて、なんか現金化しないとセーフとマジでチャンドラーは思ってるみたい。

48 but I have to be in my business. 頑固だと言われた次の文で、but I have to be (stubborn) in my business の省略。村上訳「私なりの仕事上の決まりを守らなくてはなりません」は誤訳。清水&田口訳は正しい。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

とかな。あるいは重要だが気乗りしない証人が、召喚状を出せる行政区をすでに離れてしまったとかこれはただの憶測だ。今朝になって事態が少し変わった」

彼は立ち上がり、大きな窓のところにいて、机に日光がギリギリあたらないよう、ブラインドのスラットを調整した。そこに立ってタバコを吸い、外を見て、そして机に戻ってきてまたすわった。そしてゆっくりと思慮深げなしかめっ面で続けた。

「今朝、ワシントンの同僚たちと話をして、この女性が金持ちの重要人物の秘密秘書だったと報された——その人物の名前は報されていない。そしてこの人物のプライベートなファイルから、何か重要で危険な書類を持って逃亡したのだとのことだ。公表されたらその人物にとって損害が生じるのかもしれない。税金の還付申告をごまかしていたのかも。最近じゃ何でもありだ」

「その人物を脅すために女はその書類を盗んだんですか？」

アムニーはうなずいた。「そう思うのが普通だろう。それ以外に彼女にとっては何の価値もない代物だ。顧客の、A氏と呼ぼうか、その人物は彼女が州境を超えるまで、姿を消したのに気がつかなかった。そしてファイルをチェックしたら、書類の一部がなくなっているのを発見した。警察にはいきたくなかった。彼女が安全に思えるくらい遠くまで行って、そこから高額でその書類を返す交渉を開始する気だろうと考えている⁴⁹。気づかれぬように彼女の居場所を抑え、そこに赴いて不意をつき、特に彼女が敏腕弁護士と接触する前にそれをやりたい。そういう弁護士は残念ながらあまりに多いのでね。敏腕弁護士が彼女と相談して、訴追を逃れられるようにする前にやりたいわけだ。だが君のほうは、だれかが彼女を脅迫していると言う。何を根拠に強請っているんだ？」

「そのお話が成り立つものなら、その人物が彼女のシナリオを台無しにできる立場にあるからですかねえ。もう片方のお宝の箱を開けずに、彼女が逮捕されるようなことを知ってるのかも」

「そのお話がなり立つものなら、と言ったな。どういう意味だ？」とアムニーは囁みついた。

「流しのゴミ受け網並に穴だらけだってことです。口先で丸め込まれてますよ、アムニーさん。あなたのおっしゃったような重要書類をどこに保管するのでしょうかね——そもそも保管するとしてのことですが。秘書が見つかるような場所には置かないでしょう。そして彼女の出発前に書類紛失に気づかなかったら、乗った列車を追えるはずがない。さらに、カリフォルニアまで切符を買ったにしても、いくらでも途中下車はできますよ。だから列車の中でも監視が必要だ。そしてそれをやっていたなら、なぜそれを迎えるのにおれなんかが要るんです？ 次に、これはおっしゃった通り、全国的なコネのある大手探偵事務所の仕事ですよ。たった一人に賭けるなんてバカのやることだ。おれは昨日彼女を

49 He expects the girl (...) to start negotiations with him. そうするだろうと予測してる、ということ。清水&村上は正しく訳しているが田口訳「女が交渉してくるのを待つことにした」は誤訳。交渉始めるところまでいったらヤバイから、それが起こる前にこうやって弁護士だの探偵だの雇って追わせてるんじゃない！

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

見失った。また見失いかねない。ある程度の規模の場所なら、普通の尾行をするにも最低限で六人のスタッフが必ず必要です。そしてこれは掛け値なし——ギリギリ最低限です。スタッフだって、喰って寝て着替えもしますからね。車で尾行してるなら、駐車場所を探している間に見張り役を置かなきゃいけないデパートやホテルには半ダースも出入り口があることもある。でもこの女子は、ユニオン駅で三時間もうろつくだけで、まるっきり姿を隠そうともしない。そしてワシントンのご友人のやることは、彼女の写真を郵送して電話を寄越し、そしてテレビ鑑賞に戻るだけ」

「よくわかった。他に何か？」その表情は無表情だった。

「ほんのちょっと——もし尾行されると思ってないなら、なぜ彼女は名前を変えるんでしょう？ 尾行されると思っていたなら、なぜこんなに尾行されやすい行動を取るんでしょう？ 同じ仕事で他に二人が動いていると言いましたね。一人はカンザス市の私立探偵ゴープル。昨日、エスメラルダにいました。どこに行けば良いか、しっかり知ってましたよ。だれが教えたんですかね？ おれは彼女を尾行してタクシーの運ちゃんに無線設備を使ってもらおうよう袖の下を出して、彼女のタクシーの行き場をやっと突き止めたんですよ、見失わないように。するとおれは何のために雇われたんです？」

アムニーはそっけなく言った。「その話はまた後だ。同じ側で活動しているというもう一人はだれなんだ？」

「ミッチェルというプレイボーイ。あの街に住んでる。列車の中で彼女に出会ったんです。エスメラルダで彼女の宿の予約を取ったのもこいつです。二人はこんなご関係」——とおれは二本の指をくっつけて見せた——「でも彼女のほうは相手が大嫌い。何か彼女のネタをつかんでいて、恐れられています。そのネタは彼女の正体、どこから来たか、そこで何が起きたか、別の名前で隠れようとしている理由ですね。そこまでわかるくらいの盗聴はしましたが、はっきりした情報が得られるほどじゃない」

アムニーは辛辣な口調で言った。「もちろん彼女は列車の中でも監視されていたとも。君が相手にしているのがバカばかりだとでも思ってたのか？ 君は罔でしかない——彼女に共犯者がいないか見極めるためのね。君の評判——ろくなもんじゃないが——からして、何やら派手な真似をしでかして、尾行に気づかれるだろうと踏んでいたんだ。オープンシャドーというのは知ってるだろうな」

「もちろん。尾行相手にわざと見つかって撒かれる役柄ですよ、これで安全になったと思わせておいて、別の尾行者がその後を引き継ぐ」

「それが君なんだよ」と彼はバカにしたようにニヤリとした。「だがまだ彼女の居場所を話してないぞ」

話したくはなかったが、話さなければならないのはわかっていた。ある程度までこの仕事を引き受けたのだし、小切手を突っ返したのは、こいつから情報を無理矢理引き出す手口でしかない。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

おれは机越しに手をのばし、二百五十ドルの小切手を取った。「これを料金全額として受け取ってきますよ、経費込みで。彼女はエスメラルダのカーサ・デル・ポニエンテに、ベティ・メイフィールド嬢としてチェックインしてます。山ほど金を持ってます。でももちろん、あんたの優秀な組織は、こんなことは全部とっくにご存じでしょうがね」

おれは立ち上がった。「相手にしてくれて、礼を言いますよ、アムニーさん」

外に出てドアを閉めた。ヴァーミリエちゃんは雑誌から顔を上げた。かすかにくぐもったカチリという音が、彼女の机のどこかから聞こえた。

「さっきは態度が悪くてすまなかった。昨晚あまり寝られなかったもんでね」

「気にしないで。お互い様だったんだから。もうちょっと練習すれば、あなたのこと気に入るようになるかもね。下衆なりに、ちょっとかわいいところあるじゃない」

「ありがとう」と言っておれはドアのほうに向かった。何もおれに恋い焦がれた顔をしてるとは言わないが、ゼネラル・モーターズの経営権よりはモノにしやすそうだ。

おれはふり返ってドアを閉じた。

「今夜はどうも雨じゃないようだなあ。酒を飲みながら何か相談事があったよね、雨降りの夜に。それとそっちがお暇だったら」

彼女は冷ややかながらおもしろがる視線を向けた。「どこで？」

「そちらにお任せ」

「おたくに伺おうかしら？」

「そいつはずいぶんとご親切に。あのフリーウッドで来ていただけると、おれの信用もぐっと上がるうってもんだ」

「必ずしもそんなこと考えてたわけじゃないんだけど」

「それはおれも同じ」

「六時半頃とか。そしてストッキングはちゃんとお手入れしとくわ」

「そうしてくれるのを期待してたよ」

二人の視線が絡み合った。おれはさっさと外に出た。

[12]

六時半にフリートウッドがうちの玄関前に、絶妙なエンジン音とともにやってきて、彼女が階段を上がってくるとおれはドアを開けた。帽子はない。肌色のコートで、襟が立ってプラチナの髪に触れている。彼女は居間の真ん中に立って、さりげなくあたりを見回した。そしてしなやかな動きでコートをすべり落とし、ソファに投げてすわった。

「ほんとに来てくれるとは思わなかった」

「そうよね。あなた奥手ですもんね……って、来るのは百も承知だったくせに。スコッチとソーダ、あれば」

「ある」

おれはドリンクを持ってきて、彼女の隣にすわったが、意味ありげなほどは近づかなかった。二人で乾杯して飲んだ。

「ディナーはロマノフでいかが？」

「そしてそれからどうするの？」

「お住まいは？」

「西ロサンゼルス。静かな古い通りの家。なぜかあたしの持ち家。それからどうするのってきいたでしょ、忘れた？」

「それは君次第だよ、もちろん」

「あなたタフガイだと思ってたのに。じゃあディナー代は自腹じゃなくていいってこと？」

「そのへらず口、ひっぱたいてやろうか」

彼女はいきなり笑って、グラスの縁ごしにおれを見つめた。

「ひっぱたかれたことにしましょう。お互いちょっと相手を誤解してたみたい。ロマノフは後でもいいんじゃない？」

「最初に西ロサンゼルスを試して見てもいいな」

「ここじゃダメなの？」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「こう言うと引かれるかもしれないな。昔ここで夢を見たことがあった。一年半前に。それがまだカケラほど残ってるんだ。ここはまだそいつに仕切らせておきたい」

彼女はすばやく立ち上がりコートをつかんだ。何とかそれを着る手伝いをした。

「すまん。あらかじめ言っておくべきだった」

彼女はくるりと振り向いて顔をおれに近づけたが、おれは彼女に触れなかった。

「夢を見たことがあって、それが死んでないからすまないの？ あたしも夢はあったけど、あたしのは死んだわ。それを生かし続ける勇気がなかった」

「そんなんじゃないんだ。女がいてね。金持ちで。おれと結婚したがった。うまくいったはずがない二度と彼女には会うまい。でも思い出は残る」

彼女は静かに言った。「行きましょう。そしてその思い出に仕切らせてあげて。あたしも、記憶しておく価値のある思い出がほしかった」

キャデラックに下る途中も、おれは彼女に触れなかった。運転は見事だった。女が実に上手いドライバーだと、ほとんど完璧と言える。

[13]

家はサン・ヴィンセンテとサンセット大通りの間の、カーブした静かな通りにあった。道からずっと奥まって建てられ、長いドライブウェイがあり、家の入り口は裏手で、その前に小さなパティオがあった。彼女はドアの鍵を開けて、家中の灯りをつけ、一言もなしに姿を消した。居間は素敵にござの家具と快適な感覚を備えていた。おれがそこに立って待っていると、彼女が背の高いグラスを二つ持って戻ってきた。コートはすでに脱いでいた。

「結婚してたことがあるんだな、もちろん」

「続かなかった。この家と、少しお金はもらえたけど、でもそれを狙ってたわけじゃないのよ。素敵な男だったんだけど、お互い相性が悪かったの。もう死んだわ——飛行機の墜落——ジェット機のパイロットだったの。よくあることよ。ここからサンディエゴまでの間には、生きていた頃のジェット機パイロットたちと結婚してた女の子だらけの場所があるのよ」

おれはドリンクを一口すすって下に置いた。

彼女のグラスをその手から取って、それも下に置いた。「昨日の朝、脚ばかり見るのはやめてと言ったのを覚えてるかい？」

「なんかそんな記憶があるわ」

「いまのおれを止めてごらん」

おれは彼女を捕まえ、彼女は無言でおれの腕の中にきた。彼女を抱え上げて運び、なぜかベッドルームを見つけた。彼女をベッドに下ろした。美しいナイロンで覆われた長い足の上の、白い太ももが見えるまでスカートをめくった。いきなり彼女は腕を伸ばし、おれの頭を乳房に押しつけた。

「ケダモノ！ ちょっと灯りを落として」

おれは戸口まで行って部屋の灯りを切った。まだ廊下からの光があった。振り返ると、彼女はベッド脇に、エーゲ海から上がってきたばかりのアフロディーテのように、全裸で立っていた。そこにほこり高く、恥も誘いもなしに立っていた。

「ちくしょうめ。若い頃には、ゆっくりと女の服を脱がせられたもんだ。最近じゃこっちが自分の襟ボタンと格闘しているうちに、女はもうベッドの中だ」

「フフッ、じゃあせいぜい襟ボタンと格闘してなさいよ」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

彼女はベッドカバーを引き剥がして、恥ずかしがる様子もなくヌードでベッドに横たわった。ありのままの自分であることをまったく恥じていない、ただの美しい裸の女だ。

「あたしの脚にはご満足？」

おれは答えなかった。

彼女は半ば夢見るように言った。「昨日の朝、あなたで気に入ったところがあると言ったわね——お触りしてこなかったこと——そして気に入らないところがあるとも言ったわ。なんだかわかる？」

「いや」

「あのときに、あたしにこうさせなかったこと」

「そんなことができるような態度を見せなかったじゃないか」

「あなた、探偵さんのはずでしょうに。さあ、もう灯りを全部消して」

* * * * *

そしてまもなく彼女は闇の中で「ダーリン、ダーリン、ダーリン」と、女があの特異な瞬間にだけ使う、あの実に特別な声の調子で言うのだった。そして、ゆっくりとした優しい弛緩、穏やかさ、静けさ。

「相変わらずあたしの脚にはご満足？」 夢見るように彼女は尋ねた。

「満足する男なんか永遠にいるもんか。何度君と愛を交わそうと、この脚はずっと取り憑いて離れない」

「このろくでなし。ホントにろくでなしね。もっと近くにきてよ」

彼女はおれの肩に頭をのせ、二人はずっと近づいた。

「あなたを愛しちゃいないのよ」

「愛する理由もない。だがそれについて斜に構えるのはよそう。崇高な瞬間だってある——瞬間でしかないにしても」

彼女がきつく暖かく身体を寄せるのを感じた。その身体は活力でうねった。その美しい腕がおれをしっかりと抱きしめた。

* * * * *

そしてまた暗闇の中で、あのくぐもった叫び、そしてまた緩慢で静かな平穏。

「あなたなんか大嫌い」と彼女は、おれの口に唇を合わせつつ言った。「このことじゃないわ。でも完璧というのは一度しかやってこないもの。あたしたちにはそれが早く来すぎてしまったから。だから二度とあなたには会わないし、会いたくない。これは永遠か、あるいは決して起きないかのどちらかなのよ」

「それなのに君は、人生の悪い面を見すぎた、心の凍りついた尻軽女みたいな振る舞いだった」

「そういうあなただって。そして二人ともまちがっていたわね。でも、もうせんないこと。もっと強くキスして」

いきなり彼女はベッドから、ほとんど音も動きもなく消えた。

まもなく廊下の灯りがついて、長いローブを着て戸口に立っていた。そして落ち着き払って言った。

「さよなら。タクシーを呼んであげる。家の前で待ってて。あたしには二度と会うことはないわ」

「アムニーはどうなんだ？」

「あわれな怯えたろくでなしよ。自分のエゴを鼓舞するだれか、力と征服の感覚を与えてくれるだれかが必要なの。あたしがそれを与えるのよ。女の身体なんて、利用できないほど神聖なものじゃないわ——特にその女がすでに愛に敗れているときにはね」

彼女は姿を消した。おれは起き上がり服を着て、そこを出る前に聞き耳をたてた。何も聞こえなかった。呼びかけたが答えはなかった。家の前の歩道にやってきたとき、タクシーがちょうど停まろうとするところだった。

ふりかえった。家は完全に暗いようだった。

そこにはだれも住んでいなかった。すべては夢だった。ただしだれかがタクシーを呼んでくれた。おれは乗り込んで家まで連れ帰ってもらった。

[14]

ロサンゼルスを後にして、いまやオーシャンサイドをバイパスするスーパーハイウェイに乗った。考える時間はあった。

ロサンゼルスからオーシャンサイドは、上下分離の六車線スーパーハイウェイが三十キロ続き、高い土手にひしゃげ、はぎとられ、放棄された車が運び去られるまでさび付いて点在している。そこでおれは、自分がなぜエスメラルダに戻ろうとしているのか考え始めた。この事件は何もかもあべこべだし、そもそもおれの事件ですらなかった。通常、私立探偵ってのはあまりに少額で、あまりに多くの情報をほしがる顧客がつくもんだ。そんな情報が得られるかどうかはその状況次第。料金についても同様だ。だがたまに、情報だけでなくそれ以外にあまりに多くのものが手に入ってしまう。たとえばバルコニーの死体の話で、しかも探しに行くとそれがないという代物。常識は、家に帰って忘れちまえという。金が入ってこないんだし。常識はいつも、手遅れになってからあれこれ言う。常識は、今週になって車の正面をぶつけたときに、先週の内にブレーキのライニングを貼り直しておけばよかったと言うヤツみたいな存在だ。常識ってのは、自分さえチームにいれば試合に勝てたはずなのにという、岡目八目のクォーターバック気取りの評論家だ。でもそいつは決してチームにはいない。スタンドの高いところで、ウィスキー容器を持って高みの見物。常識ってのは、足し算を絶対まちがえない、グレーのスーツを着た小男だ。でもそいつが足し算しているのは、いつだってだれか他人のお金なのだ。

ハイウェイを降りて、おれは峡谷へと下り、ランチョ・デスカンサードにたどりついた。ジャックとルシールが定位置にいた。おれはスーツケースを下ろしてデスクにもたれかかった。

「こないだ置いてったお金は足りた？」

「ええ、ありがとうございます。そしていまは、前の部屋にまた入りたいんでしょうね？」とジャック。

「できれば」

「なんで探偵だって教えてくれなかったんです？」

おれはニヤリとしてみせた。「おいおい、なんていう質問だい。探偵たるもの、自分が探偵だなんてだれにも言うわけないだろ？ テレビで見てるだろうに、ちがうかい？」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「たまには見ますがね。ここではあんまり」

「テレビではいつも探偵はすぐにそれとわかる。絶対帽子を取らない。ラリー・ミッチェルのことは何か知ってる？」

ジャックはこわばった。「何も。ブランドンの友人です。ブランドンさんはこのオーナーです」
ルシールが明るい声で言った。「ジョー・ハームスはちゃんと見つかりましたか？」

「うん、ありがとう」

「それと——」

「はいはい」

「その唇は閉じておくんだ」とジャックがきっぱり言って見せた。おれにウィンクして、カウンター越しにキーを押しやった。「ルシールの人生は退屈なんですよ、マーロウさん。ここでぼくと交換台を相手にふん詰まっちゃってるんですから。それとあのホントにちっちゃいダイヤの指輪——小さすぎて、ぼくも彼女にあげるのが恥ずかしかったくらい。でも男たるもの、ほかにどうしろと？ 女を愛したら、それを彼女の指で見せびらかしたいもんですよ」

ルシールは左手を掲げ、小さな宝石からのきらめきが見えるように動かした。「こんなの大嫌い。お日様と夏とまばゆい星と満月みたいに。そのくらい嫌いなんです」

おれは鍵とスーツケースを拾って二人を後にした。もうちょっとあれが続いたら自分自身と恋に落ちるところだ。果ては自分自身に、小さい飾り気のないダイヤの指輪を贈ったりしかねない。

[15]

カーサ・デル・ポニエンテの構内電話では 1224 号室から応答がなかった。おれはフロントにでかけた。生真面目そうなフロント係が手紙を仕分けしていた。この手の連中はいつだって手紙の仕分けだ。

「メイフィールドさんはこちらに滞在しているはずだよね？」

彼は手紙を箱に入れてから答えた。「はい。どちら様だとお伝えしましょうか？」

「部屋番号は知ってるんだが、電話に出ない。今日は見かけた？」

彼は少しこちらに注意をむけたが、本気で相手をするほどではなかった。「いやあ見かけておりません」と肩越しに見た。「キーがありませんね。ご伝言なら承りますが？」

「ちょっと心配なんです。昨夜あまり具合がよさそうじゃなかった。部屋で病気で、電話にも出られないんじゃないかと。彼女の友人でマーロウといいます」

彼はおれを眺めた。賢い目だった。出納所の方向にある仕切りの向こうに行ってみてくれと話をしたまもなく戻ってきて、ニコニコしている。

「メイフィールド様がお病気とは思いません。お部屋で大量の朝ご飯を注文なさいましたから。昼ご飯も。電話も何本かおかけでした」

「ありがとう。伝言を残してくれ。私の名前と、かけなおすだけで」

「グラウンドかビーチに出かけられているかもしれませんよ。当ホテルには暖かいビーチがあって、防波堤でしっかり遮られていますんで」と背後の時計を見た。「もしそうなら、それほど長居はされないかと。そろそろ寒くなってまいりますので」

「ありがとう。出直します」

ロビーの主要部分は、三段上がってアーチを抜けたところにあった。そこには単にすわっている人々がいた。ホテルのラウンジの専門座り人たちで、普通は高齢で、普通は金持ちで、普通は飢えた目で見守る以外何もしない。生涯そうやって過ごすのだ。厳しい顔立ちと紫がかったパーマの老婆二人が、専用のキングサイズのトランプ台に広げた巨大なジグソーパズルと格闘していた。そのさらに先では、カナスタのゲームが進行中だった——女性二人、男性二人、女性の一人は氷のようなダイヤをつけすぎていて、モハーヴェ砂漠でも冷やせそうだし、メイクも濃すぎて蒸気ヨットでも塗装できそうなほど。どちらの女性もタバコを長いホルダーに入れていた。いっしょにいる男たちはしょぼくれ

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

て疲れているようだったが、たぶん小切手にサインするので力を使い果たしたのだろう。さらに向こう、まだ窓ガラス越しに外が見えるところにすわっているのは、手をつないだカップルだ。女はダイヤとエメラルドの宝飾品と、結婚指輪をしていて、それを指先で撫で続けている。いささか舞い上がっているようだった。

おれはバーを抜けて庭園をのぞいてまわった。崖のてっぺんをたどり、昨夜ベティ・メイフィールドのバルコニーから見下ろした場所を何の苦もなく見つけ出した。鋭角になっているので見つけれられたのだ。

海水浴ビーチと小さく曲がった防波堤は百メートルほど続いていた。崖からそこに階段が降りている。人々は砂の上に寝転がっていた。水着やトランクス姿の人もしれば、敷物の上にすわっているだけの人もいる。子供が叫びながら走り回っている。ベティ・メイフィールドはビーチにはいなかった。おれはホテルにもどりラウンジにすわった。

すわってタバコを吸った。売店にでかけて夕刊を買い、流し読みして捨てた。フロントデスクの脇をぶらりと通りがかった。おれの伝言はまだ 1224 号室のボックスに入ったままだ。構内電話にいて、ミッチェル氏を呼び出してもらった。返事なし。もうしわけございません、ミッチェル様は電話にお出になりません。

女の声が背後でした。「フロントの人に、何かあたしにご用があるとか聞いたんですが、マーロウさん——」と彼女。「あなたがマーロウさんですか？」

朝のバラのように新鮮に見えた。ダークグリーンのスラックスと、サドルシューズ、緑のウィンドブレーカーを白いシャツの上に来て、そのまわりにゆるくペイズリー柄のスカーフを巻いている。髪留めが素敵な風に吹かれた感じを出していた。

ボーイ長が二メートル向こうで思いっきり聞き耳をたてていた。おれは言った。「メイフィールド様でいらっしゃいますか？」

「メイフィールドはあたしです」

「外に車がございます。物件をご覧頂くお時間はいただけますでしょうか？」

彼女は腕時計を見た。「え、ええ、まあそうですね。もうすぐ着替えないといけないんだけど、でも——わかった。いいわ」

「こちらです、メイフィールド様」

彼女はおれの横に並んだ。二人でロビーを横切った。だんだんそこにかなり馴染んできた。ベティ・メイフィールドはジグソーパズルの二人に険悪な視線を浴びせた。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「ホテルって大嫌い。十五年たって戻ってきても、同じ人が同じ椅子にすわってるのよ」

「よくわかります、メイフィールド様。クライド・アムニーという名の人物はご存じでしょうか？」

彼女は首を振った。「どうして？」

「ヘレン・ヴァーミリエは？ ロス・ゴープルは？」

また首を振る。

「一杯やる？」

「いまはいいわ」

バーから出て遊歩道沿いに歩き、おれはオールズモービルのドアを彼女のために押さえてやった。スロットからバックで出ると、グランド通りをまっすぐ上って丘に向かった。彼女はキラキラ縁のサングラスを鼻にのせた。「トラベラーズチェックは見つけたわ。あなたってなんか変な探偵ね」

おれはポケットに手を入れて睡眠錠のボトルを差し出した。「昨夜はちょっと怖かった。これを数えたが、最初に何錠あったかは知らない。君は二錠飲んだと言った。でも君が勢いに任せて一つかみ飲んだりしなかったか、確信が持てなかった」

彼女はボトルを受け取って、ウィンドブレーカーに突っ込んだ。「かなり飲んでいたのよ。アルコールとバルビツール類は相性が悪いわ。なんか気を失っちゃって。それだけのことよ」

「確信できなかった。致死量はあれだと最低三十五グレン⁵⁰だ。それでも数時間はかかる。おれも厳しい立場だった。脈や呼吸は大丈夫そうだったが、後になれば変わるかもしれない。医者をつんだらいろいろ説明がいる。過剰摂取する量を飲んだら、君が持ち直しても殺人課の警察に話がいく。連中は自殺だって未遂も含めてすべて捜査するからな。だがおれが推測をまちがえていたら、今日君はここにはいない。そしてそうなったら、おれだってどうなっていたことやら」

「そういう考えもあるわね。それをそんなにひどく心配するつもりもないんだけど。さっき名前の出た人たちはだれなの？」

「クライド・アムニーは、君の尾行におれを雇った弁護士だ——ワシントンDCの弁護士事務所からの指示だそう。ヘレン・ヴァーミリエはその秘書。ロス・ゴープルはカンザス市の私立探偵で、ミッチェルを探してるんだと言っていた」。その風体を彼女に説明した。

彼女の顔は石のようになった。「ミッチェルですって？ その人、なんでラリーなんかに興味があるの？」

50 1 グレン=0.0648g だから 35 グレンは 2.2g。既訳はすべて「35 錠」。この錠剤の中身次第では、そのくらいの量(前の文の「一つかみ」)になる可能性もあり、厳密に正しくはないが裁量のうちかなー。ドラッグ関係の精度がいるパロウズの小説なら外せないところだが、この小説ならそこまで気にしなくても……

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

おれは四番街とグランド通りの角で停車し、電動車椅子の老いぼれうすのろが時速六キロで左折するのを待った。エスメラルダはこのろくでもない代物だらけだ。彼女は辛辣な口調で尋ねた。

「なんだってその人、ラリー・ミッチェルなんか探してるのよ。どいつもこいつも、他の人をほっとけないのかしら？」

「そうそう、おれには何も話すんじゃない。おれが答えを知らない質問をどんどん続ければいい。おれの劣等感を煽ってくれる。もう仕事はないと言ったよな。ならなぜおれはここにいる？ それは簡単。おれはあの、トラベラーズチェックで五千ドルを再びモノにしようとしてるんだ」

「次の角で左折して。丘に上がれるから。そこからだと眺めがすばらしいの。それにとっても華やかなおうちもたくさん」

「おうちなんかくそ食らえ」

「それに上はとっても静かよ」彼女はダッシュボードにクリップ留めしたパックからタバコを取り出し、火をつけた。

「二日で二本目だぜ。すごい勢いで吸ってるじゃないか。昨夜、君のタバコも数えたんだ。マッチもハンドバッグを漁らせてもらった。あんなインチキに引きずり込まれると、いささか詮索好きになるもんでね。時にお客が気を失って、肝心なことをおれに任せたままになっちまうとね」

彼女は首をめぐらしておれを見つめた。「ヤクとお酒のせいにちがいないわ。ちょっとどうかしてたんだわ」

「ランチョ・デスカンサードで君はピンピンしてたじゃないか。もう元気いっぱい。手に手をとってリオに逃げ出して豪華に暮らすはずだったろう。どうやら犯罪者として。そのためにはおれが死体の始末をすればいいだけだったのに。それがなんともがっかり！ 死体がない」

彼女はまだおれを見つめていたが、運転中のおれは道路を見なけりやならなかった。徐行して左折した。またも行き止まりの道に入ったがそこは古い路電の線路がまだ舗装の中に残っていた。

「あの標識のところで丘を上がって。あの下にあるのが高校よ」

「銃を撃ったのはだれで、何を狙った？」

彼女は両手のひらのつけねをこめかみに押しつけた。「たぶん、このあたしがやったんだと思う。どうかしてたんだわ。どこにあるの？」

「銃か？ 安全な場所だ。万が一、君の夢が現実になった場合に備えてね。そうなったらあれを提出しなきゃならない」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

いまや登坂になったのでオールズモービルのギヤをサードに固定するようポイントをあわせた⁵¹。彼女はそれを興味津々で眺めた。自分のまわりの淡い革シートやがらくたを見回した。

「どうしてこんな高い車を買えるの？ そんなに儲かってるわけじゃないんでしょうに」

「昨今じゃ車はみんな高いよ、安物でもね。どうせなら旅行できるやつを持ってるほうがいい。どこかで読んだが、探偵たるもの常に、だれにも意識されない平凡な黒い目立たない車を持つべきだそう。それを書いたやつはロスに来たことがないだろう。ロスでは目立たないためには、肉々しいピンク色のメルセデスベンツに乗らなきゃいけない。しかもルーフにはサンポーチをつけてきれいな女の子三人がそこで日光浴してないと」

彼女はクスクス笑った。

おれはこのネタを引き延ばした。「それと、いい宣伝になる。自分がリオに行くという夢を見たのかもな。あそこなら、これを新車で買ったときの値段より高く売れる。貨物船を使えば輸送費もさほどかからない」

彼女はため息をついた。「もう、その話でからかうのはやめて。今日は冗談の気分じゃないの」

「ボーイフレンドくんは見かけた？」

彼女は身じろぎもせずすわっていた。「ラリーのこと？」

「他にいるの？」

「だって——クラーク・ブランドンの話をしてるのかもしれないでしょ、もちろんあの人のことはほとんど知らないんだけど。ラリーは昨晚、かなり酔っ払っていたわ。いいえ——見かけてない。寝て酔いを覚ましてるのかも」

「電話に出ないぜ」

道が枝分かれした。白線の一本が左へとカーブしている。おれは直進を続けたが、特に理由はなかった。斜面高くに建った古いスペイン風家屋を何軒か通り過ぎ、さらに反対側の下り斜面に建てられた、とてもモダンな家屋も通り過ぎた。道はそれらの前を通り、大きく右に曲がった。ここの舗装は真新しく見えた。道路はとがった土地と、方向転換用のサークルとなった場所へと続いていた。この方向転換サークルをはさんで、二軒の大きな家が向かい合っていた。ガラスブロックが大量に積まれて、海に面した窓は緑色のガラスだ。風景は壮大だった。おれは丸三秒もそれを眺めていた。奥の縁石に沿って車を止め、エンジンを切ってそのまますわっていた。街から三百メートル以上も高いところにきていて、街全体が眼の前に四十五度の角度で撮った航空写真のように広がっている。

51 ぼくも知らなかったんだけど、この頃のオールズモービルなどはハイドラマチックというオートマ方式ギヤで、登坂用にローギヤに抑える目盛りもあったんだって。清水、村上は律儀に訳しているが、田口はそこまで細かい話は略して「ギヤをサードに切り替えた」ですませている。それも一つの見識。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「病気かもしれない。外に行ったのかも。すでに死んでる可能性もある」

「言ったでしょう——」彼女は身震いしはじめた。おれはタバコの吸いさしを彼女から取り上げて灰皿に入れた。車の窓を上げて、彼女の肩に腕をまわし、頭をおれの肩にのせた。彼女はぐったりして抵抗もしなかったが、まだ身震いしていた。

「心地よい人なのね。でもせかさないで」

「ダッシュボードにパイントびんがある。一杯いる？」

「ええ」

それを取り出して、片手と歯でなんとか金属片をむしり取った。ボトルをひざの間にはさみ、キャップをはずした。それを彼女の唇に当ててやった。彼女は少し飲み込んで身震いした。おれはパイントびんのキャップを戻して片付けた。

「ボトルから直飲みは大嫌い」

「うん。粗野だもんな。君とじゃれてるわけじゃないんだぜ。心配してるんだ。何かやってほしいことはないか？」

彼女はしばらく沈黙した。そして出てきた声は安定していた。「たとえばどんな？ あの小切手は返してあげるわよ。あなたのものだから。あなたにあげたんだから」

「だれであれ、どんな相手だろうとあんなふうにあっさり五千ドルをくれてやったりはしない。まったく筋が通らない。だからこそロスから戻ってきたんだ。早朝に車ででかけてきたんだ。おれみたいな輩にデレデレして、五十万ドル持ってるだの、リオへ行きましょうだの、豪華品完備のすてきなうちだのの話をするヤツなんかいない。バルコニーに死人が転がってるという夢を見て、だから急いでやってきてそれを海に投げこんでほしいとかいう理由でそんなことをするやつは、しらふだろうと飲んだくれだろうと絶対にいないんだ。おれがあそこに着いたら、そもそもおれに何をしてほしいと思ってたんだ？ 夢を見ている間、お手々を握ってほしいとでも？」

彼女は身を引いて車の遠い隅っこにもたれかかった。「わかったわよ。あたしは嘘つきよ。昔からずっと嘘つきなのよ」

おれはルームミラーをちらりと見た。背後の道路に小さな黒い車が曲がって入ってくると停車しただれ、または何が乗っているのかは見えなかった。そして路肩にこすりつけるように右に急カーブして、バックをして、来た方向に戻っていった。だれかが道をまちがえて、ここが行き止まりだと気がついたのだ。

「おれがああいうクソ非常階段を登っている間に、君は睡眠薬を飲んで、やたらにひどく眠いふりをしてしばらくしたら本当に寝たんだ——と思う。まあいい。バルコニーに出てみた。死体なし、血もなし。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

死体があれば、なんとか壁のてっぺんから投げ落とせたかもしれない。重労働だが、持ち上げ方を知っていれば不可能じゃない。だが海に落ちるほど遠くに投げ飛ばすとなると、訓練を受けたゾウ六頭でも不可能だ。柵まで十メートルあって、それを乗り越えるにはものすごい距離を投げなきゃならない。死体ほど重たいものとなると、あの柵を越えるには優に十五メートルは投げる必要があると見た」

「あたしはウソつきだと言ったでしょう」

「でもその理由は話さなかった。真面目な話、仮に君のバルコニーで男が死んでいたとしよう。おれに何をさせるつもりだったんだ？ 非常階段を抱え下りて、手持ちの車に乗せて、どこか森に運んで埋めろとでも？ 死体が転がっているなら、たまにぐらいはだれかに正直にならないとダメだぜ」

彼女は棒読み口調で言った。「お金を受け取った。あれはあたしに話を合わせただけだったのね」⁵²

「そしたらだれがイカレてるかわかるかもしれないからな」

「わかったんでしょう。ご満足？」

「何もわからなかった——君の正体すら」

彼女は立腹した⁵³。急いた声で言った。「不安、恐怖、酒、薬——どうしてほっといてくれないのよ。あなたにあの金は返すって言ったじゃない。他に何がほしいのよ？」

「その対価に何をしろと？」

「受け取ればいいのよ」と彼女はいまやおれに噛みついていた。「それだけよ。受け取ってどっか行っちゃってよ。どっか遠く、はるか彼方に」

「いい弁護士がいると思うんだが」

彼女はせせら笑った。「明示矛盾ね。いい人は弁護士なんかにならないわ」⁵⁴

「なるほど。するとそっちの方面でいろいろ痛い目にあってきた、と。いずれそれは明らかになるよ君からだろうと、何かほかの方面からだろうと。でもおれはまだ真面目なんだ。君は困ったことに

52 You played up to me. Play up to... はだれかに気に入られるようへつらうこと、つまりは話をあわせること。ここではつまり、マーロウはもともとベティの話なんか真に受けていなかったけれど、真相を知りたかったので話をあわせてウソを承知でそれにつきあったということ。話をあわせた、という意味合いと、ベティからすれば自分を信じたわけじゃなかったんだ、という意味合いの両方が必要。清水訳「私のいうことをきいてくれたわ」は、「あたしを信じてたわけじゃないのね」という意味が表現できず 50 点。村上春樹「私の共犯になったのよ」は完全な誤訳。だいたいベティはこの時点で自分が何か悪事を働いたとは認めていない。田口訳「あなたはわたしにへつらった」は文字通りすぎ。どれもダメ。ここでの訳はその意味合いを明確にするため「だけ」を追加した。

53 こういう、外から見えない内心について描くのは「長いお別れ」にはなかった。

54 かけことばはむずかしい。good が「優秀」と「善良」の両方の意味を持つので成り立つ表現。村上春樹は両方「優秀な」と訳をあてるが、優秀な人間が弁護士にならないことはないので不自然。清水&田口は「いい弁護士／いい人は弁護士にならない」と訳すことで切り抜けている。ここでもそれを踏襲。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

なっている。ミッチェルに起きたこともあるが、それとは別に、弁護士を雇っていい理由が十分にある。名前を変えた。何か理由があるね。ミッチェルは君を脅していた。だからあいつも何か理由を持っていた。ワシントンの弁護士事務所が君を探している。だからそいつらも理由を持ってる。そしてそいつらの顧客も、そいつらを雇って君を探すだけの理由がある」

おれは言葉を切って、暗くなりたての晩の中に見える限り、しっかり彼女を見つめた。下のほうでは、海がラピスラズリの青色となったが、なぜかそれでヴァーミリエちゃんの目を連想するようなことはなかった。カモメの群れがかなり固まった集団となって南下していったが、別にノースアイランド基地からの飛行機で当然の緊密な編隊を組んでいたわけじゃない。ロサンゼルスからの夕方の飛行機が海岸線に沿って降下し、右舷と左舷の光を見せている。そして同隊の下にある点滅灯がつき、それが海へと大きくふくれてから、リンドバーグ空港へと長くゆるやかなターンを見せた。

「じゃあ、あなたは性悪弁護士の手先でしかないのね」と彼女は意地悪く言うと、おれのタバコをもう一本つかみ取った。

「そんな性悪じゃないと思う。ただ頑張りすぎるだけだ。だがそれはどうでもいい。こいつに小銭をむしり取られたところで、そんな大騒ぎすることもない。重要なのは守秘特権と呼ばれるものだ。免許を持つ調査員にはないものだ。弁護士にはそれがある。もちろん自分をやとった顧客の利益に沿ったものである限りだが。もし弁護士が、その利益を守るために調査員を雇ったら、その調査員にも守秘特権がある。それ以外にはその特権は与えられない」

「その特権で何ができるのかはよくわかってるんでしょうに。特にあたしをスパイするのにあなたを雇ったのが弁護士なんだから」

おれは彼女からタバコを取り上げ、それを何回かふかしてから返した。

「わかったよ、ベティ。おれは君の役には立てない。そんな努力のことは忘れてくれ」

「口先はいっちょまえね。でも何か役に立つことをすれば、もっとお金が取れると思ってるだけでしょ。あなただって、あの連中と何も変わりゃしない。それにあなたのクソなタバコだっていらないわよ」と彼女はそれを窓から投げ捨てた。「ホテルにつれて帰って」

おれは車を降りてタバコを踏み消した。「カリフォルニアの山地ではこういうことはするな。山火事シーズンでなくても」。車に戻ってキーをまわし、スターターボタンを押した。バックしてUターンすると、道の分岐するカーブまで戻った。その少し上、白い実線がカーブして離れていくところに小型車が停まっていた。ヘッドライトをつけていない。無人かもしれない。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

おれはオールズモービルを思いっきりやってきた方向と反対にふりまわし、ヘッドライトをハイビームにしてつけた。おれが曲がるにつれてそのライトが車を照らした。乗員は顔を帽子で覆ったが眼鏡と太った広い顔、飛び出した耳を隠すには間に合わなかった。カンザス市のロス・ゴープル氏だ。

そのままライトは車を通りすぎ、おれは緩慢なカーブの長い丘を走りおりた。それがどこに続くかは知らなかったが、どうせここの道は遅かれ速かれ海に出るのだ。その底はT字路になっていた。右に曲がり、狭い道が何街区か続いてから大通りにぶち当たり、もう一度右折した。いまやエスメラルダの中心部に向かっていた。

ホテルにつくまで彼女はもう口をきかなかった。停車するとすばやく飛び出した。

「ここで待ってて。お金を取ってくる」

「尾行されてた」

「なんですって——？」と彼女は、頭を半分まわしかけたまま凍りついた。

「小さな車。丘のてっぺんでおれがUターンしたときに、こっちの車のヘッドライトが照らしたのを見てなければ気がつかなかっただろう」

「だれなの？」

「知るもんかい。ここでおれたちを見つけたにちがいない。だから戻ってくるはずだ。おまわりかな？」

彼女はおれを見つめ返し、身動きもなく凍りついていた。ゆっくりと脚を踏み出し、そしておれの顔を引っ掻きそうな勢いで駆け寄ってきた。おれの腕を掴んで揺さぶろうとした。その息がゼイゼイ言った。

「ここから逃がして。ここから連れ出して、お願いだから。どこでもいい。隠して。ちょっとでも落ち着かせて。尾行されたり、追いかけられたり、脅されたりしない場所へ。あいつ、あたしをそういう目にあわせるって断言したわ。地の果てまで追いかける、太平洋のいちばん遠い島までも——」

「最高峰の山頂までも、隔絶したる砂漠の深奥までも。だれかがいささか古くさい本を読んでいたらしいな」

彼女は腕を落として両脇にだらりと下げた。

「あなたって、借金取りまがいな同情心のかけらもないのね」

「君をどこへも連れて行くつもりはない。何に悩まされているのか知らないが、しっかりして立ち向かうんだ」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

おれはきびすを返して車に乗り込んだ。振り返ると、彼女はすでにバーの入り口への道半ばで、その足取りはすばやかかった。

[16]

おれに理性というものがあつたなら、スーツケースを拾って家に戻り、彼女のことなどすべて忘れるところだ。どの芝居のどの幕のどの役を自分が演じているのか彼女が腹を決める頃には、すでにおれが何をするにも手遅れになっているだろう⁵⁵。せいぜいが郵便局でうろついていたことでパクられるくらいだ。

おれは待ってタバコを吸った。ゴーストとその薄汚いケチなボンコツが、いまにも姿をあらわして駐車場所に滑り込むはずだ。あいつが他の場所でおれたちを見つけたはずはないし、そこまで知っていた以上、おれたちの行き先を知る以外の目的で追跡してきたはずもない。

やつは現れなかった。おれはタバコを終え、窓の外に落としてバックで出た。進入路から曲がって街に向かうと、道の反対側にやつの車があり、路肩の左側に寄せる形で駐車している⁵⁶。おれはそのまま進み、大通りで右折して、あいつが追いつこうとしてガスを吹飛ばさないよう、ゆっくりめに走ってやった。一キロ半ほど行ったところに、エビキュアというレストランがあつた。屋根は低く、赤いレンガ壁で通りから遮断され、バーもあつた。入り口は横手にある。そこに駐車して中に入った。まだまともに店を開けていない。バーテンは給仕頭とおしゃべりしており、その給仕頭はディナージャケットすら着ていない。予約台帳を置いた、よくある高いデスクの前にいる。台帳は開いており、その晩遅くの予約の名前が並んでいた。だがいまは時間が早い。おれでもテーブルがもらえる。

ダイニングは薄暗く、ロウソク明かりで、低い壁で半分に仕切られている。三十人もいれば混雑して見えただろう。給仕頭はおれを隅っこに押し込んで、ロウソクに火をつけてくれた。ギブソンをダブルでくれと告げた。給仕がやってきて、おれの向かい席の食器を片づけようとした。置いといてくれ、友人が後からくるかもしれないと告げた。メニューを検分したが、それはこのダイニングそのものと同じくらいでかかった。本当に中身を知りたいければ、懐中電灯を取りだしたところだ。こんなに

55 By the time she made up her mind (...) it would probably be too late. 決める頃にはもう手遅れになっているだろう、という文。made up と過去形になっているのはこれが仮定法だから。清水、村上は正しく訳しているが、田口訳「彼女が自ら決めるにはもう遅すぎる」はまちがひ。いまはまだ間に合うが、この調子で態度をコロコロ変えていると手遅れになる、ということ。

56 アメリカは車は右側通行なので、普通なら右側に寄せる。反対側(または逆向き)に停めているのでわざわざマーロウは指摘しているのです。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

薄暗い店には入ったことがない。自分のおふくろのとなりテーブルにすわっていても気がつかないほどだ。

ギブソンがきた。グラスの形は見えて、その中に何か入っているようだ。味見したが、そんなに悪くない。その瞬間に、ゴースが向かいのテーブルに静かにすわった。なんとか見分けられる範囲で言えば、前の日とほとんど同じ様子をしている。おれはメニューをのぞき続けた。点字で印刷しうてほしい。

ゴースはテーブルの向こうから手を伸ばしておれのお冷やのグラスを取った。「女とはよろしくいたしたのかよ」とさりげなく尋ねる。

「一向に進まんね。なぜだ？」

「なんであんな丘の上なんかに出かけたんだい？」

「ネッキングくらいできるかと思ったんだ。向こうがその気にならなかった。何でそんなことに興味があるんだ？ ミッチェルとかいう野郎を探してるんじゃないのか？」

「笑わせんな。ミッチェルとかいう野郎だと。そんなやつは聞いたことないって言ってたくせに」

「その後聞いたんだよ。実物も見た。飲んだくれてた。泥酔。店からほとんど放り出されそうになってた」

「笑わせるぜ」とゴースはせせら笑った。「そして名前はどやってわかったんだ？」

「だれかがその名前呼びかけたからだよ。もう本当に爆笑しちゃうよな、だろ？」

彼は顔をしかめた。「邪魔すんと言ったはずだ。もうおまえが何者かはわかってるんだ。調べたからな」

おれはタバコに火をつけて煙を顔に吹きかけてやった。「ほっといてくれよ」⁵⁷

彼はせせら笑った。「タフぶりやがって。おまえなんかよりでかい野郎だって、何人も手足をもうでやってるんだからな、おれは」

「へーえ。そのうち二人の名前挙げてみてくれよ」

彼はテーブル越しに身を乗り出したが、そこへ給仕がやってきた。ゴースは告げた。

57 Go fry a stale egg. ほっといてくれという意味。清水訳「しらべるのは君の勝手だよ」村上訳「もう少し気の利いたことを言えよ」田口訳「とっとと失せろ」。どれもちがうが、清水訳がいちばん正解に近いかなあ。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「バーボンと水をくれ。品質監査品だぞ⁵⁸。業務用のウィスキーなんかよこすんじゃない。ごまかそうとするなよ。わかるからな。それと水はびん入りのやつだ。この街の水道水はひでえもんだ」

給仕はじっと彼を見つめた。

「おれはこいつをおかわり」とおれはグラスを押しやった。

ゴーストは問い詰めた。「今夜は何がうまいんだ？　こんな看板なんか見ないよ、おれは」と軽蔑したようにメニューに指をはじいてみせた。

「本日のお料理はミートローフでございます」と給仕は意地悪げに言った。

「クズ肉料理を気取って見せたやつか。じゃあミートローフで」

給仕はおれを見た。おれもミートローフでいいと言った。給仕は去った。ゴーストはまたテーブルに身を乗り出したが、まず背後と両脇をすばやく確認した。そして嬉々として言った。

「おまえ、ツイてねえな。逃げおおせられなかったな」

「そりゃ残念。何を逃げおおせられなかったって？」

「とんでもなくツイてねえな、ご同輩。最悪。潮の満ち干がおかしかったかなんかだ。アワビ漁師——あの水かきとゴムマスクつけた連中の一人——が岩の下にはさまっちゃったんだ」

「お宝探しの漁師が岩の下にはさまれた？」冷たいチクチクする感触が背筋をつたい下りた。給仕がドリンクを持ってきたとき、自分のやつをひつつかみたい衝動を抑えるのに苦労した。

「まったく笑えるよな、ご同輩」

「もう一度いってみろ、そのろくでもないメガネか、さもなきやあんたをぶちのめす」おれは歯をむいた。

彼はドリンクを手にしてすすり、味わい、思案して、うなずいた。そしてひとりごちた。

「おれは金儲けにここまで来たんだよ。面倒ごとを起こしにきたわけじゃないんだ。面倒起こしたら稼げないからな。稼ぐには身辺をきれいにしないと、そうだろう？」

「あんたには目新しい経験なんだろうな。どっちの意味でも。アワビ漁師がどうのこうのってのは何の話だ？」おれは声を抑えようとしたが、かなり努力が必要だった。

彼はうしろにもたれた。そろそろ目が暗さになれてきた。その太った顔がおもしろがっているのがわかった。

58 Bonded stuff. 豆知識として、当時は粗悪ウィスキーがはびこっていたので、アメリカ政府の品質監査制度があった。もちろんそれをいちいち説明するのは面倒なので、既訳は「名前のしれてるやつ」「まともなウィスキー」「ちゃんとしたやつ」という具合。ぼくも普通の翻訳ならそれですませる。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「ただの冗談だよ。アワビ漁師なんかだれも知らない。ただ昨晚、その言葉の発音を覚えたんだ。相変わらずそれが何かは知らないけどな。でもそれを言うならなんかおかしいんだよな。ミッチェルが見つからないんだ」

「ホテル住まいだよ、あいつは」おれはドリンクをさらに飲んだ。飲み過ぎないように。いまは深酒をするときじゃない。

「あのホテル住まいなのは知ってるよ、相棒。わかんないのは、いまこの瞬間にどこにいてることなんだ。自分の部屋にやいやしねえ。ホテルの連中も見かけちゃいねえ。あんたと女に何か心あたりがあるんじゃないかと思ってね」

「あの女はくるくるパーだ。当てにしないほうがいい。それとエスメラルダじゃ『見かけちゃいねえ』なんて言わない。そのカンザス市方言は、ここでは公衆道徳違反なんだぜ」

「うるせえよ、この野郎。英語の話し方のことで、くたびれたカリフォルニアののぞき見野郎なんか指図は受けねえよ」彼は振り向いてどなった。「おい給仕！」

何人かがこちらに軽蔑するような視線を向けた。しばらくして給仕がやってきて、お客と同じ表情でそこに立ち尽くした。

「これもう一杯」とゴーブルはグラスに向けて指を鳴らした。

「いちいち怒鳴る必要はないですから」と給仕はグラスを下げた。

「おれが呼んだら余計なこと言わずに言われたとおりにやれ！」ゴーブルはその背中にわめいた。

「メチルのお味がお気に召すといいね」とおれはゴーブルに言ってやった。

「あんたとおれなら、うまくやってけるぜ。あんたにちょっとでも脳みそがあればな」とゴーブルは無関心に言った。

「そしてあんたに多少なりともマナーがあって、背がもう十五センチ高くて、ちがう顔で名前も別で自分がカエルの卵をぶちのめして粹がるような態度を取らなけりゃな」

「御託はたくさん、ミッチェルに話を戻せ。それとおまえが丘でくどき損ねたねーちゃんにな」と彼は鋭く言った。

「ミッチェルは彼女が列車で出会った男なんだ。彼女が受けた印象は、おれがあんたから受けてる印象と同じだ。彼女の心の中には、燃えるような欲望が生まれたんだよ、その男と反対方向に旅したいというね」

時間の無駄だ。この男はおれのひい祖父並に口を割りそうにない。ゴーブルはせせら笑った。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「すると、ミッチェルは女にとって、列車で出会っただけの男で、お知り合いになったら女はヤツが気に入らなくなった、と。そこで袖にしておまえに乗り換えた？ そんなところに居合わせたなんてなんとも都合がいいもんだな」

給仕が料理を持ってきた。何の華やかさもなくてそれを置いた。野菜、サラダ、ナプキンに包んだ熱いロール。

「コーヒーはいかがですか？」

おれは、後でもらうと言った。ゴープルはコーヒーを出せと言ひ、自分のドリンクがどうなっているのか知りたがった。給仕は、いま参りますと言った——その口調からして、ずいぶんとゆっくりした便で配達されてくるらしい。ゴープルはミートローフを味見して、驚いたようだった⁵⁹。「なんと、美味いじゃないか。こんなに客がいらないのなら、ろくでもないにちがいないと思ってた」

「時計を見ろよ。ずっと後にならないと賑やかにはならんだろう。そういう街なんだよ、ここは。それに閑散期でもある」

「ずっと後ってのは確かだな」と彼は頬張りつつ言った。「すさまじく後。朝の二時、三時のときもある。みんな友だちを訪ねたりするんだ。あんた、ランチョに戻ってんの、相棒？」

おれは何も言わずにそいつを見た。

「いちいち説明しないとわかんないかなあ、相棒。おれは仕事するときには遅くまで働かなきゃならないんだよ」

おれは何も言わなかった。

彼は口をぬぐった。「岩の下にはさまったって言ったとき、あんた何やら硬直したよな。おれの気のせいかな？」

おれは答えなかった。

ゴープルは歯をむいた。「そうかい。ダンマリかい。いっしょにちょっとした商売でもできるかと思ったんだがな。あんたは体つきはいいし、打たれ強そう。だがなーんもわかっちゃいねえだろ。この稼業でやってくための資質ってもんがない。おれが来たところだと、やってくにはおつむがないとな。ここらだと、ひたすら日焼けでもして、シャツの襟ボタンはめるの忘れるようになるしかないもんな」

「どんな商売したいんだ」おれは歯をくいしばりつつ言った。

⁵⁹ 余談ながら、『長いお別れ』ではこういう表現もほとんどなかった。「目が大きく見開かれた」とか具体的な観察できる変化で表現をしていた。こういう工夫のなさが『プレイバック』のやっつけ感に貢献している。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

こんなにしゃべりすぎていても、彼は早食い野郎だった。自分の皿を押しやり、コーヒーを飲んでチョコッキから爪楊枝を取り出した。

「ここは金持ちの街だ。調べたんだぜ。とっくり拝見したんだ。いろんな連中に話を聞いた。なんでもここは、我が美しき祖国で金だけあっても好き勝手にできない、数少ない場所の一つだって言うじゃないか。エスメラルダでは内輪に入るか、さもなきゃゴミだ。内輪に入ってあちこちでお声をかけていただいて要人と仲良しになりたいなら、品格ってものがないと。ここにはカンザス市でヤバイ橋を渡って五百万ドルかそこら儲けたヤツがいるんだ。土地を買って敷地割して、家を建てて、街で最高の物件をいくつか建てた。でもビーチクラブには入れなかった。紹介されなかったから。そこでそのビーチクラブを買収した。みんなそいつがだれかは知ってるし、資金集めのイベントをやるときには平身低頭、サービスも受けるし払いはきちんとしてるし、立派な非の打ち所がない市民だ。でっかいパーティーも開く。でも来るのは街の外からの連中ばっか、そうでなきゃ、おべっか使いのたかり屋、ハンチク連中、金があるところにいつもうろついてるような、ありがちなゴミクズどもばっかだがこの街の上流階級の連中ときたら。そいつらから見れば、そいつだったただのクロンボ同然」

えらい長広舌で、その途中でこっちをさりげなく観察し、部屋の中を見回し、椅子に快適そうにもたれて、歯をせせった。

「その人、ずいぶんとがっかりしてるだろうねえ。でもそいつが元手をどうやって稼いだかなんて、どうしてバレたんだ？」

ゴープルは小さなテーブルに身を乗り出した。「財務省からの大物が春ごとにここに休暇でやってくるんだ。たまたまこの金持ち野郎を見かけたんだが、そいつのことを全部知ってた。そこで噂を流した。そりゃあこいつも絶望に駆られるだろうよ。この手の大儲けして足を洗った連中のことなんかおまえは知らないだろ。こいつは内心、血を流して死にそうなくらいなんだぜ、相棒。札びら切っても買えないものを見つけてしまい、それでもう心がむしばまれて空っぽだ」

「それだけのことをどうやって調べた？」

「おれは賢いんだ。顔もきく。いろいろつきとめる」

「ただし一つ突き止められていないことがある」

「そりゃ一体何だ？」

「言ってもわかるまい」

給仕が遅ればせながらゴープルのドリンクを持ってきて皿を下げた。メニューを出してくる。

「デザートなんか食うか。失せろ」とゴープル。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

給仕は爪楊枝を見た。手を伸ばして、決然とそれをゴープルの指からむしり取った。「ここには洗面所ってもんがあるんだぜ、おっさん」と言って、爪楊枝を灰皿に落とし、灰皿も下げた。

「ほらこういうことだよ、わかる？ 品格ってやつ」とゴープルがおれに言った。

給仕に、チョコパフェとコーヒーを頼むと告げた。「それと伝票はこちらの紳士に」と付け加えた。

「喜んで」と給仕。ゴープルは露骨に嫌な顔つきをした。給仕はスッと消えた。おれはテーブルに身を乗り出して静かに語った。

「この二日で、あんたほどのひでえ嘘つきにお目にかかったのは初めてだよ。あんた、ミッチェルなんかには全然興味ないだろう。あいつを見たことも聞いたこともなくて、昨日になって口実に使おうと思いついただけなんだろうが。ここにはある女の監視で送り込まれたんだ。だれの指図かも知ってる——だれが雇ったかは知らんが、その大本だ。なぜ彼女が見張られているかも知っているし、そんな監視をなくすように計らう方法だってわかってる。何やら切り札を隠してるんなら、今すぐ使ったほうがいいぜ。明日じゃ手遅れかもしれないぜ」

彼は椅子を押し下げて立ち上がった。勘定書きとしわくちの札を折ったものをテーブルに落とした。冷ややかにおれをねめつけた。

「大口叩きの脳たりん。そんなセリフはゴミ出し日の木曜までとときやがれ。てめえは何も全然わかつちやいねえんだよ、相棒。この先もどうせ決してわかんないだろうよ」

そして頭を好戦的に突き出しつつ歩き去った。

おれはテーブル越しに手を伸ばし、勘定書きと、ゴープルが残したしわくちの札を取った。予想どおり、たった一ドル。下り坂でも時速七十キロ出れば御の字のポンコツを運転するやつなら、食事だって85セントのディナー定食が土曜の晩の大ご馳走となるような店ですませるだろう。

給仕がすべるようにやってきて、伝票をおれに寄越した。おれは全額支払って、ゴープルの一ドルを皿に残したままにした。

「ありがとうございます。あの旦那は本当に親しいご友人なんですねえ、でしょ？」と給仕。

「親しいにもいろいろあってねえ」とおれ。

給仕は、いかにも寛容そうに言った。「あの人は貧乏なのかもしれませんねえ。この街の格別な点の一つは、ここで働く人はここの生活費がまかなえないってことなんです」

おれが出たときには、店には全部で二十人がいて、その声が低い天井に反射し始めていた。

[17]

車庫に下る斜路は、朝四時に見たのとまったく同じ様子だったが、カーブを曲がるところで放水の音が聞こえた。ガラス張りの詰め所は無人だった。どこかでだれかが車を洗っていたが、駐車係のはずはない。おれはエレベーターロビーに通じるドアへと横切って、それを開けておさえた。背後の事務室でブザーの音がした。ドアを離して外に立って待っていると、長く白い上着を着た男が角を曲がってきた。メガネをかけていて、冷めたオートミールみたいな肌の色に、虚ろな疲れた目をしていて、顔はなんだかモンゴロイド的なものがあり、国境南のメキシコめいたものもあり、インディアンめいたものもあり、それよりもっと黒いものもあった。黒髪は狭い頭蓋骨にぴったり貼り付いている。

「お車ですか？ お名前をお願いします」

「ミッチェルさんの車はあるか？ ツートンカラーのビュック・ハードトップ」

そいつはすぐには答えなかった。目が泳いだ。この質問を以前にもされているのだ。

「ミッチェルさんは今朝早くに車を出されていますが」

「どのくらい早朝？」

彼は、赤字で縫い取ったホテル名の上にクリップされていた鉛筆に手を伸ばした。その鉛筆を取りだして眺めた。

「七時のすぐ前です。七時にシフトが終わったので」

「十二時間シフトなのか？ いまは七時をちょっとまわっただけだろう」

そいつは鉛筆をポケットに戻した。「八時間シフトですがローテーション組んでるんで」

「そうか。昨夜は十一時から七時までのシフトだったのか」

「その通りです」 そいつはおれの肩越しに何か遠くのものを見ていた。「いまは時間外です」

おれはタバコの箱を取り出して一本すすめた。

彼は首を振った。

「喫煙は事務室内しか許されないの」

「あるいはパッカードセダンの後部座席か」

彼の右手が握られた。ナイフの柄をつかもうとでもするように。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「供給はどう？ なんかいる？」

彼はおれを見つめた。

「『何の供給ですか？』と言うべきだったな」そう言っても彼は返事をしなかった。

「そしたら、タバコの話してるんじゃないぜって言ってやったよ」とおれは陽気に続けた。「ハチミツで甘味をつけたもの」⁶⁰

二人の目があった。やっと彼は静かに言った。「あんた、売人？」

「今朝の七時に業務やってたんなら、実に見事に切り替えられたんだなあ。なんか何時間もいっちゃったままに見えたもんでね。頭の中に時計でもあるみたいだ——エディ・アルカーロみたいに」

「エディ・アルカーロ」と彼は繰り返した。「ああそうか、ジョッキーね。あの人は頭の中に時計があるのか？」

「そう言われてる」

彼は他人事のように言った。「あんたと取引できるかもなあ。値段は？」

事務室でブザーが鳴った。無意識のうちにシャフト内のエレベータが聞こえた。ドアが開いて、ロビーで手をつないでいたのを見かけたカップルが降りてきた。女はイブニングドレス、男はタキシードを着ている。二人は並んで立ち、キスの現場をつかまったガキ二人のようだった。駐車係は二人を見てでかけて、車が始動して戻ってきた。素敵な新しいクライスラー・コンバーチブル。男は女をそっと扱い、彼女がすでに妊娠しているかのようだった。

駐車係は立ったままドアを押さえていた。男は車をぐるっとまわって礼を言い、車に乗り込んだ。

「グラスルームへはかなり遠いの？」男はおずおずと尋ねた。

「いいえ」駐車係は行き方を教えた。

男はにっこりして礼を言い、ポケットに手を入れて駐車係に一ドル札をやった。

「プレストン様、車を入り口まで運ばせてもよろしいのに。下に電話一本いただければ幸いです」

「ああ、ありがとう、でもこれでいいんだ」と男は慌てたように言った。エンジンをかけてゆっくりと斜路を上がっていった。クライスラーは低いエンジン音ともに見えなくなって去った。

「新婚旅行客かい。素敵だよな。じろじろ見なけりゃいいだけ」とおれ。

駐車係は、同じ平板な目つきを浮かべておれの正面に立っていた。

60 About something cured with honey. あー、なるほど。10章で駐車係が吸っていた大麻が「甘味をつけた」と訳されていたのは、これがあったからね。大麻をハチミツで cure=味付けしていると解釈したのか。でも大麻にハチミツで味付けることはない。AIに聞いても、ハチミツの砂糖が焦げてひどい味になるのでそんなことはしない。パイプたばこではやることがあるので、それをなんとなく持ってきたかも、とのこと。あるいはハッシシのような樹枝状のものが念頭にあったのかもしれない。訳は、さすがに変えるわけにもいかず、そのまま訳すしかない。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「でもおれたち二人には素敵なところなんかないぜ」とおれは付け加えた。

「あんた、おまわりならバッジを見せろよ」

「おれがサツだと思ってんの？」

「あんた、なんか詮索好きなろくでなしだな」何を言おうとそこの声の高さはまったく変わらなかった。Bフラットで凍りついたまま。一音だけの野郎。

「そういうもの全部ではある」とおれは同意した。「おれは私立探偵なんだ。昨夜ある人物を尾行してここにきた。あんたはすぐそのパッカードの中にいた」——と指さし——「おれはでかけてドアを開けて大麻をかいだんだ。キャデラック四台をここから運転して持ち出しても、あんたは寝返りすら打たなかっただろう。だがそれがあんたの仕事だ」

「今日の値段だ。昨夜のことなんかあれこれ言ってない」

「ミッチェルは一人で発ったのか？」

彼はうなずいた。

「荷物もなし？」

「九個。積み込みを手伝いましたよ。チェックアウトしたんです。これでご満足？」

「フロントに確認取ったのか？」

「請求書がありましたよ。全部支払い済み、受け取り済」

「だろうな。そしてそれだけ荷物があると使い走りも当然ついてきたんだろう」

「エレベーターボーイだったよ。七時半まで使い走りはいないんだ。これは夜一時くらいだった」

「どのエレベーターボーイ？」

「チコと呼んでるメキシコ系の子」

「あんたはメキシコ系じゃないのか？」

「おれは中国、ハワイ、フィリピーノ、くろんぼのごたまぜなんだ。おれの人生きついんだぜ」

「あと一つだけ質問。どうやって切り抜けてんの？ あの大麻タバコの話だけど」

彼はあたりを見回した。「吸うのはすごく落ち込んでいるときだけなんだよ。あんたに何の関係がある？ どんなやつにだってどんな関係があるってんだ？ つかまって、クズみたいな仕事をなくすかもしれん。牢屋にぶちこまれるかも。一生ブタ箱を背負ってて、それを抱えて回ってきたのかも。気が済んだかよ？」しゃべりすぎだった。神経が不安定な人はそういうものだ。あるときは、一音節の返事しかしないと思うと、次の瞬間には洪水。その声の低い疲れたモノトーンは続いた。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「だれを恨んでるわけじゃない。生きる。食べる。ときにはネル。そのうち会いに来てくれよ。ポルトン小径にある、古い木枠の小屋にあるノミの巣に住んでんだよ、小径ってのは実は横丁だけだな。エスメラルダ金物社の真裏なんだ。トイレは屋外便所でね。身体を洗うのは台所のブリキの流しだぜ。スプリングの壊れた長椅子で寝てる。そこのあらゆるものが二十年も古い。ここは金持ちの街なんだ逢いにきてくれよ。金持ちの土地の上に住んでるんだぜ」

「ミッチェルについての話に欠けてるものがあるな」とおれ。

「何が？」

「真実」

「ソファの下を探しとくよ。ちょっとほこりをかぶってるかもしれないぜ」

上から斜路を入ってくる車の騒々しい音がした。彼は振り向き、おれはドアを抜けてエレベーターの呼び鈴を押した。あれは奇妙なヤツだ、あの駐車係は、えらく奇妙だ。でもなんかおもしろい。そしてなんか悲しい。悲しい者の一人、迷える者の一人。

エレベーターはなかなか来なくて、来るまでにそれを待つ仲間が増えた。身長 190 センチのハンサム、健康な男性で名前はクラーク・ブランドン。革のウィンドブレーカーを着て、その下に熱いロールカラーの青いセーター、コードデュロイの乗馬ズボン、野外エンジニアや測量士が荒地で着るようなひも式のブーツを履いている。石油採掘チームの親分のように見えた。いまから一時間もすれば、こいつがディナースーツを着てグラスルームにいて、そこでも親分めいて見えるはずだ。そして本当に親分なのかもしれない。お金たっぷり、健康たっぷり、その両方からいちばんいいものを引き出す時間もたっぷり、どこへ言っても彼がオーナーだ。

彼はおれをチラリと見て、エレベーターが来るとおれが先に入るのを待った。エレベーターボーイは敬意をこめて敬礼した。彼はうなずいた。二人ともロビーで降りた。ブランドンはフロントデスクまでロビーを横切り、フロント係から満面の笑みを受けた——これまで見たことのない新しい係だ——そして手紙の束を受け取った。ブランドンはカウンターの端にもたれ、一つずつ封筒を破って開いては、立っている横のゴミかごに落としていった。ほとんどの手紙が同じ扱いを受けた。そこに旅行案内パンフのラックがあった。一つ手に取って、タバコに火をつけ、そのパンフを検分した。

ブランドンの興味をひいた手紙が一通だけあった。彼はそれを何度か読み返した。それが短くてホテル便せんに手書きされているのは見えたが、肩越しにのぞきこみでもしなければ、それ以上は見えない。彼は手紙を手を立ち尽くした。そしてゴミ箱に手をつっこんで封筒を取りだした。それも検分した。手紙をポケットに入れてデスクに沿って動いた。そしてフロント係に封筒を渡した。

「これが持ち込まれたんだ。だれが置いていったか見たりしていないか？ 心あたりがないんだ」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

フロント係は封筒を見てうなずいた。「ええブランドンさん。私が来てすぐに、男がこれを残して行ったんです。中年の太った男でメガネをかけていました。灰色のスーツにトップコート、灰色のフェルト帽です。地元の人には見えませんでした。ちょっとくたびれていました。平凡な男です」

「私に会いたいと言ったのか？」

「いいえ。単にこの手紙をそちらの郵便受けに入れてくれというだけです。どうかなされましたか、ブランドンさん？」

「イカレてそんな感じか？」

フロント係は首を振った。「いま申しあげた通りです。平凡でした」

ブランドンはくすくす笑った。「五十ドルで私をモルモン教の司祭にしてくれるとき。どうみても何やらイカレポンチだ」。彼は封筒をカウンターから拾ってポケットに入れた。振り向きかけてから、こう言った。

「ラリー・ミッチェルをここで見かけたか？」

「私がシフトに入ってからは見えておりません、ブランドンさん。ですがわずか二時間ほどのことですから」

「ありがとう」

ブランドンはエレベーターに向かい乗りこんだ。ちがうエレベーターだった。エレベーターボーイは満面の笑みを浮かべてブランドンに何か言った。ブランドンは返事しなければそちらを見もしなかった。ドアをシュッと閉めつつ、エレベーターボーイは傷ついた様子だった。ブランドンは苦虫をかみつぶしたような顔つきだった。渋面の彼はハンサムぶりが下がった。

旅行パンフを棚に戻すとフロントデスクに向かった。フロント係は何の興味も見せずにおれを見たその視線は、おまえはこの客じゃないと言っていた。「何かご用でしょうか？」

なかなかしっかりした様子の白髪交じりの男性だった。

「ミッチェルさんをお願いするつもりだったんだが、いま言ってたのが聞こえたんだ」

「構内電話はあちらです。交換手がおつなぎいたします」

「どうかな」

「とおっしゃいますと？」

おれは上着を開いてレターケースを取ろうとした。脇の下の銃の丸い握りを見て、フロント係の目が凍りつくのが見えた。おれはレターケースを取って名刺を引っ張り出した。

「そちらのホテル探偵にお目にかかることはできんものかね？ そういうのがいればだが」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

彼は名刺を受け取って読んだ。そして顔を上げた。「メインロビーにかけてお待ちください、マーロウ様」

「ありがとう」

おれがまだ完全にフロントデスクに背を向けないうちに、彼は電話をかけていた。おれはアーチを抜けて、フロントが見える壁際にすわった。長く待つ必要はなかった。

その男はしっかり伸びた背筋としっかり真面目な顔をしていて、その肌は決して日焼けはせず、赤くなってまた白く戻る性質のものだった。彼の髪はほぼオールバックで、ほぼ赤みがかったブロンドだった。アーチの下に立って、ゆっくりとロビーを見渡した。他のだれと比べてもおれを長く見たりはしなかった。それからやってきて、おれの隣の椅子にすわった。茶色のスーツと茶色と黄色の蝶ネクタイをしてる。服はぴったりとフィットしている。頬の高くまで細かいブロンドの毛が生えている髪にはかすかに白い物が混じっている。

「ジャヴォネンと言います」とおれを見もせずに言う。「そちらの名前は存じてます。ポケットに名刺がありますよ。何かお困りで？」

「ミッチェルという男。探してるんです。ラリー・ミッチェル」

「なぜその人を探してるんです？」

「仕事で、探しちゃいけない理由でもある？」

「いいえまったく何も。街を離れてますよ。今朝早くに発ちました」

「そうらしいね。それで不思議に思ったんだ。昨日家に帰り着いたばかりだ。スーパーチーフ号でねロスであいつは自分の車を拾ってここまで運転してきた。それと文無しだった。ディナー代も借りなきゃならなかった。そのディナーは女といっしょにグラスルームで食べたんだ。かなり飲んだくれていた——あるいはそのふりをしていたんだ。おかげで代金を踏み倒せた」

「彼はここではツケがききます」ジャヴォネンは無関心そうに言った。その目はロビーを跳ね回り続け、まるでカナスタのプレーヤーのだれかが銃を引っ張り出してパートナーを撃ったり、でっかいジグソーパズルに取り組んでいる婆さんの誰かが髪を引きむしりはじめたりするのを予期しているかのようだった。彼の表情は二種類——厳しいものと、さらに厳しいものと。「ミッチェルさんはエスメラルダでは知られておりますので」

「ええ、でも決していい意味で知られてはいませんね」

彼は首をめぐらせておれに荒涼たる視線を向けた。「私はこのアシスタント・マネージャーですよ、マーロウさん。警備担当も兼ねています。ホテルのお客様の評判についてあなたに話すわけにはいきませんね」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「それには及びませんね。もう知ってますから。各種の情報源からね。実際に彼が活動しているところも見た。昨晚あいつはだれかを強請って、街を飛び出すくらいのお金を引き出した。荷物もいっしょに持って、というのがおれの情報です」

「だれからそんな情報を得たんですか？」そう尋ねる彼はタフそうだった。

おれはそれに答えないことでタフに見せようとした。「それに加えて、三つ推測をしてあげましょう。一つ、彼のベッドは昨晚だれも寝た形跡がない。二つ、今日のどこかの時点で、彼の部屋がもぬけの空だという報告がフロントに入った。三つ、夜勤職員のだれかは今夜出勤しない。ミッチェルは手助けなしに荷物をすべて運び出せたわけがないから」

ジャヴォネンはおれを見て、再びロビーを目で探った。「あなたがこの名刺に書いてある通りの人物だと証明できるものは何かありますか？ 名刺を印刷するだけならだれでもできる」

おれは札入れを取り出し、探偵免許の小さな写真複製を取り出して渡した。彼はそれを見て返して寄越した。おれはそれをしまった。

「踏み倒しに対処する部署はちゃんとある。どんなホテルでも踏み倒しはあるんだ。あなたの助けは不要です。そしてロビーに銃は困る。フロント係があなたのを見た。他にもだれか見るかもしれない九ヶ月前にここで拳銃強盗騒ぎがあったんだ。泥棒の一人が死んだ。私が射殺した」

「新聞で読みましたよ。何日も震え上がってました」

「あなたが読んだのなんてごく一部。その翌週で、売り上げが四、五千ドル分パアです。みんな大量にチェックアウトした。言いたいこと、わかります？」

「フロント係に銃床を見せたのはわざとだ。一日中ミッチェルを呼び出していたのに、たらいまわしにされるだけだった。チェックアウトしたならそう言えばいいのに。宿代を踏み倒したなんてことをおれに話す必要はない」

「宿代を踏み倒したなんてだれも言ってませんよ。宿代はね、マーロウさん、全額支払われたんですするとあなたの立場はどうなるかな？」

「なぜ彼がチェックアウトしたのが秘密にされていたのか不思議に思う立場」

彼はバカにしたような顔つきとなった。「それもだれも言ってないことだな。きちんと話を聞かないとダメだ。街の外に旅行に出てると言った。宿代は全額支払われたと言った。どれだけ荷物を持っていったかは言わなかった。あの人が部屋を空けたとは言わなかった。持って行ったのが荷物のすべてかも言わなかった……そもそも、こんなことを知ってどうしようというんだね？」

「その勘定はだれが支払ったんです？」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

彼の顔がちょっと赤くなった。「いいか、兄ちゃん。彼が払ったと言っただろう。本人が、昨晚、全額精算してさらに一週間分前払いした。私はあんたにかなり辛抱強く接してきた。こんどはあんたが話す番だ。何の思惑がある？」

「何も。あんたの話で思惑が全部消えた。なんであいつは一週間分前払いしたのかね」

ジャヴォネンは微笑んだ——ほんのわずか。微笑の頭金とでも言おうか。「なあ、マーロウ、私は軍の情報部に五年いたんだ。人を見る目はある——たとえばいま話題のこの人物についても。前払いしたのは、我々がそのほうが安心するからだ。状況を安定させる効果がある」

「それまであいつが前払いなんかしたことあるのか？」

「このチクショウめが！……」

「気をつけて」とおれは割り込んだ。「あの杖を持った高齢紳士があんたの反応に興味津々だぜ」

彼はロビーの半ば向こうを見て、やせた高齢の血の気のない男が、きわめて低く丸い背のついたクッション付椅子にすわり、アゴを手袋の手にのせて、その手を杖の曲がった部分にのせているのに目をやった。老人はまばたきもせずこちらを見つめていた。

「ああ、あの人はですか。あの人はここまで見ることもできませんよ。八十歳なんですから」

ジャヴォネンは立ちあがっておれに直面し、静かに言った。「わかったよ、何も言わない気だな。あんたは私立探偵、顧客があって指示を受けてる。私はホテルを守ることにしか関心はない。次回は銃は家においてきてくれ。質問があったら私のところへ。職員に質問はするな。噂が出回るし、うちはその御免こうむる。あんたが面倒を起こしてると私が言えば、地元の警察もいい顔はしてくれないぞ」

「行く前にバーで一杯おごらせてくれよ」

「上着のボタンは外さないように」

「軍の情報部で五年というのは大した経験だ」とおれは崇拜するように彼を見上げた。

「それで十分なはずだ」と彼は軽くうなずき、アーチを通過して歩み去った。背筋は伸び、胸を張り、あごをひいた、ハードで無駄のないしっかりした男だ。無駄のない仕事人間。おれを完全にしぼりあげた——名刺に印刷してあるすべての点について。

すると、あの低い椅子にすわったご老体が、杖の握りから手袋をはめた手はずして、おれに向かって指を曲げているのに気がついた。おれは自分の胸を指さして、問いかける目をした。相手はうなずいたので、おれはでかけた。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

確かに高齢ではあったが、よぼよぼにはほど遠く、ボケにもほど遠かった。白髪はきれいに左右にわけられ、鼻は長く鋭く血管が浮き、薄れた青い目はまだ鋭かったが、まぶたが疲れたようにその上に垂れ下がっている。片耳にはプラスチックのボタン状の補聴器があり、耳と同じ灰色がかったピンクだ。両手のスエード手袋は手首のところが折り返されている。磨いた黒い靴の上に灰色のスパッツをつけている。

「椅子を持ってきてすわりなさい、お若いの」というその声は、か細く乾いてかすれており、笹のようだった。

おれは隣にすわった。彼はおれをのぞき込み、口元が微笑した。「我らが優秀なるジャヴォネン氏は軍の情報部で五年過ごされたのですよ、というのはご本人がまちがいなく語ったでしょうな」

「はいその通りです。その一部門のC I Cです」

「軍の情報部というのは、内的誤謬を含む表現ですなあ。さて君は、ミッチェル氏がどうやって宿代を支払ったか知りたいということでしょうか？」

おれは彼を見つめた。補聴器を見た。彼は胸ポケットを叩いた。「私はこういうものが発明されるずっと前から耳が聞こえなかったのです。馬が柵越えをひるんだおかげでね。私自身の失敗ではありません。ジャンプさせるタイミングがはやすぎた。まだ私も若くてねえ。耳につけるラッパ式の補聴器は絶対に使う気がなかったので、読唇術を学んだのですよ。それなりの訓練は必要ですがね」

「ミッチェルはどうなんですか？」

「その話はおいおい。そう焦りなさんな」彼は顔をあげてうなずいた。

こえが聞こえた。「こんばんは、クラレンドン様」。使い走りがバーへ向かうところだった。クラレンドンはそれを目で追った。

「あの輩は相手にせんことですよ。女衞ですから。私は長年、世界中のホテルのロビーやラウンジやバーで、ポーチやテラスで、入念な庭園で過ごしてきたもんです。家族のだれよりも長生きしております。このまま役立たずの詮索好きであり続けますよ、病院の風通しのいい素敵な角部屋に担架で運ばれるその日まで。糊のきいた白衣のドラゴンどもが私に仕えてくれますよ。ベッドが用意され、片付けられる。あのひどい愛のない病院食をのせたお盆がやってくる。脈拍と体温が実に頻繁に測られて、うとうとしかけた時に限ってその計測時間になるんですよ。そこに横たわり、糊のきいたスカート、滅菌床に靴のゴム底がこすれる音を耳にしつつ、医師の微笑みという無言の恐怖を見ることでしょう。しばらくすると、私の上に酸素テントがかけられ、小さな白いベッドのまわりにカーテンが引かれ、私は自分でも知らぬ間に、どんな人間も二度やる必要が決してない唯一のことをやることになるのです」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

彼はゆっくりと首をめぐらせておれを見た。「明らかに私はしゃべりすぎですな。お名前は？」

「フィリップ・マーロウ」

「私はヘンリー・クラレンドン四世。かつては上流階級と呼ばれていたものに所属しております。グロントン、ハーバード、ハイデルベルク、ソルボンヌも。ウプサラ大でも一年過ごしておりますぞ。その理由ははっきり思い出せないのですがね。私を遊蕩人生にあてはめるため、なのでしょうなあ。それであなたは私立探偵でいらっしゃる。ほれ、いまのように私もそのうち自分以外の話をするようになるわけでして」

「はい、左様で」

「情報が欲しければ私のところへ来るべきでしたな。とはいえもちろん、そんなことを知るよしもないでしょうが」

おれは首を振った。たばこに火をつけ、まずヘンリー・クラレンドン四世にすすめた。彼はそれをあいまいなうなずきをもって断った。

「しかしですなあ、マーロウくん。それはあらかじめ調べておくべきことだったのですぞ。あらゆる世界の豪華ホテルには、半ダースほどの高齢な暇人が男女ともにおりましてね、ひたすらすわってはフクロウのように見回すのです。観察し、聞き耳をたて、メモをお互いに比べ合い、あらゆる人についてあらゆることを学ぶのですよ。他にやることがないのです。というのもホテル暮らしは、あらゆる退屈の中でも最も死にそうになる代物でございますからな。そしてまちがいなく、私も君を同じくらい退屈させておくことでしょう」

「むしろミッチェルについてお聞かせ願いたいですね。少なくとも今夜は、クラレンドンさん」

「もちろん。私は自己中心的で馬鹿げていて、女学生みたいにぺちゃくちゃしゃべる。あそこでカナスタをやっている美しい黒髪女性がわかりますかな？ 宝石が多すぎて、メガネに重い黄金のふちがついている女性ですが」

指さすどころかそちらを見もしなかった。だがだれのことかわかった。派手すぎる装束だし、ちょっとばかり世知に長けすぎていた。ダイヤモンドを持った女、厚化粧の女。

「マーゴ・ウェストという名前の女性でしてな。離婚歴七回。山ほどの金と、そこそこの見栄えをお持ちだが、男をつなぎとめておけない。頑張りすぎてしまうのですな。しかしバカではない。ミッチェルのような男と情事は持ち、金を与えてお代はもってやりますが、決して結婚はしませんよ。昨夜二人はけんかをしました。それでも彼女が宿代は払ったと私は思っております。以前に何度もあったことです」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「ミッチェルはトロントの父親から毎月お小遣いをもらってるんだと思ってましたよ。でもそれじゃ足りなかったってわけですかね」

ヘンリー・クラレンドン四世は軽蔑の笑みをよこした。「親愛なるご同輩、ミッチェルにはトロントの父親なんぞおりませんよ。月ごとのお手当もなし。女にたかって生きておるのです。だからこんなホテル住まいなのですよ。豪華ホテルにはいつだって、金持ちの寂しい女性がだれかしらおりますからな。美しくもなければ大して若くもないでしょうが、他の魅力をもった女性がね。エスメラルダの閑散期、つまりデル・マーの競馬の終わりから一月半ば頃までは獲物もなかなかいない。するとミッチェルは旅行するのが常です——余裕があればマヨルカとかスイスとか、手元不如意ならフロリダやカリブ海のどこかの島でございますな。今年はやっこさんはツキに見放されておりましたな。なんでもせいぜいワシントンまでしか行けなかったとか」

彼はおれに一瞥をくれた。おれは生真面目なまでに礼儀正しさを維持した。おしゃべり好きな老紳士の相手を礼儀正しく務めている、親切な若い(彼の基準で見れば)衆ってわけだ。

「なるほど。ホテル代を払ったのは彼女かもしれませんね。でも一週間分先払いってのは？」

彼は手袋をはめた片手をもう片方に重ねた。杖を傾けて、体をもたせかけた。じゅうたんのパターンを見つめた。最後に歯をカチリといわせた。問題が解けたのだ。また背筋をのばした。

「それは手切れ金ですな。ロマンスの最後にして回復不可能な終止符。イギリス人流に言うなら、ウェスト婦人はとさかに来たというわけです。また昨日、ミッチェルのお相手が新たに到着しましてね、濃い赤毛の女性ですよ。栗色がかった赤で、炎のような赤でもイチゴの赤でもない。この二人の関係は、私が見たところいささか奇妙なものでしたな。どちらも何やら厳しい状況下にあるようで」

「ミッチェルは女性を恐喝したりしますかね？」

彼は笑った。「あの御仁はゆりかごの赤ん坊だって恐喝しますよ。女にたかって生きる男は常に相手を恐喝するんですよ、恐喝とは呼ばないにしても。また女性たちのお金を見つけたら、必ず盗みます。ミッチェルはマーゴ・ウェスト名義の小切手を二枚偽造しました。それで情事は終わりです。その小切手はまちがいなく彼女の手元にあるでしょうな。でもそれについては、手元に置く以上のことは何もしないでしょう」

「クラレンドンさん、失礼を承知で申しますが、いったい全体どうやってそんなことをいろいろご存じなんですか？」

「彼女が話してくれたのですよ。私の肩で泣いた」と彼は美しい黒髪女性の方を見た。「いまの彼女を見ると、私が本当のことを言っているとはとても思えないでしょう。それでも本当なのです」

「そしてなぜそれを私に？」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

彼の顔はいささか不気味な笑みに移行した。「私にはデリカシーというものがございませんでな。マーゴ・ウェストと自分が結婚したいと思っているのでございますよ。そうなればパターンが逆転する。この歳になると、ほんのちょっとしたことが面白くなってまいりましてね。ハチドリ、極楽鳥花が開くところ。どうしてこの花は生長途中のある時点で、花びらが直角に開くのでしょうか？ なぜその花びらが実にゆっくりと開くのか、そしてなぜ花がある明確に決まった順序で現れて、花の尖ったまだ開いていない端が鳥の嘴のように見えて、青やオレンジの花びらが極楽鳥のように見えるのでしょうか？ こんな複雑な世界を作った神は何と不思議なののでしょうか、もっと簡単なものを作ってもよかったはずなのに？ 神は全能なのか？ どうして全能のはずがアロウカ？ これほどの苦しみが世に満ちていて、しかも苦しむのはほぼ必ず無実の者たちなのです。なぜフェレットによって穴に閉じ込められた母ウサギは、赤ん坊たちをかばって隠し、自分ののどが引き裂かれるに任せるのか？ なぜでしょうね。あと二週間もすれば母ウサギは子供たちを見分けることさえできなくなるというのに。あなたは神を信じますかな、お若いの？」



極楽鳥花

ずいぶんと迂遠な回り道だが、どうやらそっちに行かざるを得ないようだった。「あらゆるものを厳密にいまある形に意図した、全知全能の神ということでしたら、信じません」

「だが信じるべきですよ、マーロウくん。大いに慰めとなりますからな。私どもはみんな、最後にそこにたどりつくのですよ。死んで塵となる運命なのですから。個人にとっては、それっきりなのかもしれない、そうでないかもしれない。あの世については深遠なる困難が伴いますな。私は、コンゴのピグミーだの中国の苦力だの、レバントのじゅうたん売りだの、果てはハリウッドのプロデューサーなど一つ屋根の下に暮らす羽目になるようなら、天国など楽しめますまい。まあ私は俗物なのでしょうな、そしていまの発言は悪趣味ではある。また、ここで神様として知られております、長い白髭の慈愛に満ちた人物が司る天国などというものも想像が付きません。こうしたものは、きわめて未熟な心の馬鹿げた思いつきなのです。しかしどんなに馬鹿げてはいても、人の宗教的な信念を疑問視してはなりません。もちろん、自分が天国に行けるなどと思いつく権利は私にはない。実のところ、いささか退屈そうです。その一方で、洗礼前に死んだ赤ん坊が、殺し屋だのナチス絶滅収容所の司令官だの、政治局員だのと同じひどい地位を占めるなどという地獄がどうして想像できましょうか？ 人間の最高の野心、薄汚いケチな人間とはいえ、その最高の行動、その偉大で利己性なしのヒロイズム、厳しい世界での絶えざる日々の勇気——そうしたものが、この地上での運命に比べて立派すぎるというのは、なんとも奇妙なことではありませんか。それを何とかして筋の通った話にしなくてはなりません。栄誉など単なる化学反応だとか、他人のために意図的に命を投げ出す人が単にその人の行動パ

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

ターンに従っているなどとは言ってくださいますな。神は毒を盛られたネコが看板の裏でけいれんしつつ死んでいくのを見て嬉しいんでしょうかね。神は生命が残酷で適者のみが生存するので平気なんでしょうか？ それも何への適者なのか？ いやいや、そんなのとはほど遠い。神がどんな文字通りの意味であれ全知全能であるなら、そもそも宇宙なんぞを作る手間はかけなかったでしょうよ。失敗の可能性がないところには成功もあり得ないし、媒体からの抵抗がなければ芸術はあり得ない。何もうまくいかないときには神が調子の悪い日を送っているのであり、神の一日はすさまじく長いのだ、と申し上げて冒涇でしょうかね？」

「あなたは賢明なお方ですね、クラレンドンさん。パターンを逆転させるとかおっしゃってましたが」

彼はかすかに笑った。「延々と必要以上に長ったらしく言葉を連ねる中で、私が自分の言っていたことを忘れたと思われたのでしょうか。いやいやそのようなことはございませんよ。ウェスト婦人のような女性はほぼ必ず、何人もの優雅もどきの金目当て連中と結婚するはめになるものですよ、ハンサムなもみあげのタンゴ・ダンサー、美しいブロンドの筋肉をしたスキー教師、落ちぶれたフランスやイタリアの貴族、中東からの怪しげな王子ども、結婚をかさねるごとに前よりダメな相手となります思いあまってミッチェルのような男と結婚することだってあるかもしれない。私と結婚すれば、退屈な老いぼれとの結婚ではありますが、少なくとも紳士と結婚することにはなります」

「ええ」

彼は笑った。「返事が単音節ということはヘンリー・クラレンドン四世に食傷気味だと示しておりますな。いやいや無理もない。それではですな、マーロウくん。なぜあなたはミッチェルに興味がありなのかな？ いや私には話せない事情なのでしょうな」

「ええ、話せないんです。なぜ彼が戻ってきてこんなにすぐに出発したのか知るのに関心があるんです、だれがその勘定を払ってやったのか、そしてもしウェスト婦人か、あるいはクラーク・ブランドンのような懐の潤った友人が肩代わりしてやったのなら、なぜ一週間分を前払いする必要があったのかを知りたい」

彼の細いボロボロの眉毛がつり上がった。「ブランドンなら電話一本でミッチェルの代金を楽々と保証できるでしょう。ウェスト婦人ならお金を渡して自分で精算させたがるかもしれませんな。しかし一週間の前払い？ なぜジャヴォネンがあなたにそんなことを話すんでしょう。あなた、それがどんな意味を持つと思いますか？」

「ミッチェルについて、ホテルとして知られたくない何かがあるということ。ホテルの嫌う種類の悪評がたちかねないようなこと」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「たとえば？」

「私が言ってるのは自殺と殺人といったことです。これはただの例ですけどね。お客が窓から飛び降りても、大手ホテルの名前はほとんど報道されないのにお気づきですか？ いつもミッドタウンかダウンタウンのホテルか、有名な会員制ホテルなんだ——その手のやつ。そして高級なホテルなら、上の階で何が起きようとも、ロビーでほとんど警官を見かけない」

彼の視線が脇のほうに向かい、おれの視線もそれを追った。カナスタのテーブルが解散するところだった。マーゴ・ウェストと呼ばれた着飾ったダイヤモンドの個性は、男の一人とバーのほうに流れて行き、たばこホルダーを船の舳先にバウスプリットのように突き出している。

「それで？」

「ええ」と言いつつおれは必死で考えていた。「もしミッチェルが部屋を確保したままなら、それがどの部屋だか知りませんが——」

「418 号室」とクラレンドンがあっさり割り込んだ。「海側。閑散期には一泊十四ドル、繁忙期なら十八ドル」⁶¹

「文無しのやつにとっては決して安い金額じゃない。でもまだ手持ちはある、ということにしましょう。だから何があったにせよ、ほんの数日留守にするだけだ。朝七時頃に車を出して荷物を積み込んだ。昨夜、スカンク並に飲んだくれていたのに、そんな時間に出発とはとんでもなく変ですねえ」

クラレンドンは後ろにもたれ、手袋をした手をだらりとぶら下げてた。彼が疲れてきたのがわかった。「そんなふうに起きたのでしたら、ホテルとしては君に、彼が完全にここを発ったと思わせたがるんじゃないですかね？ そうしたら君は他で彼を探すはめになる。もちろんこれは、君が本当に彼を探しているならということですがね」

おれは彼の色の薄い視線を見つめ返した。彼はニヤリとした。

「君のおっしゃることは、あまり筋が通って聞こえませんなあ、マーロウくん。私はしゃべりまくりますが、別に自分の声を聞きたいためだけではないのですぞ。どのみち自分の声は自然には聞こえないのですから。しゃべることで、あまり失礼に思われずに他人を観察する機会が得られるのです。君も観察させていただきましたよ。私の直感、というのが正しい言葉なら、それが告げるところでは、ミッチェルに対するあなたの関心は、どうも何かのついでのようなのですな。そうでなければこんなに開けっぴろげに語ったりはしますまい」

61 いまの通貨価値だと一泊3万円台というところだが描写を見るといまのホテル相場からすれば一泊五万以上の感覚だろう。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「ふむふむ、そうかもしれません」ここは一つ、気の利いた散文を一段落ほどぶちかますところだろう。ヘンリー・クラレンドン四世はそれをありがたく思ってくれたはずだ。だがそれ以上クソー言たりとも言うことがなかった。

「さあ、もう行きなされ。私は疲れた。部屋に戻って少し横になるといたしましょう。お目にかかれて光栄でしたよ、マーロウくん」と彼はゆっくり立ち上がり、杖で身体を安定させた。かなりの努力を要している。おれはその傍らに立った。

「握手は決してせんのですよ。手が醜くて痛いものでね。だから手袋をしておるのです。ではごきげんよう。もし二度とお目にかかることがないようなら、ご多幸をお祈りしますよ」

彼は立ち去った。歩みはゆっくりしており、頭を高く掲げている。彼にとって歩くのは決して楽ではないのが見て取れた。

メインロビーからアーチに上がる階段二段を、彼は一段ずつのぼった。その間に休憩がはさまる。いつも先に動くのは右足だ。杖は左足の横でしっかりと地面に食い込む。彼はアーチを抜けて、エレベーターに向かって動くのを眺めた。ヘンリー・クラレンドン四世氏はなかなか立派な御仁だとおれは思った。

バーのほうに歩いて言った。マーゴ・ウェスト夫人がカナスタのプレーヤーの一人といっしょに、琥珀色の影の中にすわっていた。給仕がまさに彼女たちの前にドリンクを置いているところだった。それにあまり注意を払わなかったのは、その先の小さな壁際のブースに、もっとよく知っている人間がいたからだ。それも一人きりだ。

同じ服のままだが、ヘアバンドは外しており、髪が顔のまわりに自由にぶら下がっている。

おれはすわった。給仕がやってきたので注文した。給仕は去った。見えないレコードプレーヤーからの音楽は、低くご機嫌を取るようなものだった。

彼女はちょっと微笑した。「さっきはかんしゃくを起こしてごめんなさい。ずいぶん失礼をいたしました」

「気にするな。おれとしても当然の報いだ」

「ここであたしを探していたの？」

「特にそういうわけじゃない」

「ならばやってたのは——あ、そうそう」と彼女はハンドバッグに手を伸ばして膝に置いた。中をガサゴソ漁って、ちょっと小さいものをテーブル越しに寄越した。小さいといっても、彼女の手で隠しきれるほどではなく、それがトラベラーズチェックのフォルダーだとわかった。「これ、約束したから」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「いやいや」

「バカね、受け取ってよ！ 給仕に見られたくない」

おれはフォルダーを受け取りポケットにすべりこませた。内ポケットに手を入れて小さな領収書帖を取りだした。領収書の控えと本体を記入した。「カリフォルニア州エスメラルダ、ホテル・カーサ・デル・ポニエンテに、ベティ・メイフィールド嬢より、アメリカンエクスプレス社トラベラーズチェック額面百ドルで合計五千ドルを受領、所有者のカウンターサイン入り。この金額は料金が確定し署名者がそれを受け入れるまで任意の時点において彼女の要求に応じてその財産としてとどまる」

この長ったらしい代物に署名して、その領収書帖を広げて彼女に見せた。

「読んで下の左手にサインしてくれ」

彼女はそれを手に取り光の下に出した。

「うんざりさせる人ね。いったい何をひり出そうとしてるの？」

「おれが公正な人間で君もそう思うってことだよ」

彼女はおれが差し出したペンを受け取ってサインし、まとめておれに返して寄越した。おれはオリジナルを破って彼女に渡した。そして領収書帖をしまった。

給仕がやってきてドリンクをおいた。支払いを待ったりはしなかった。ベティは首を振ってみせた。給仕は去った。

「ラリーを見つけたかきいたらどうだい？」

「わかったわよ。ラリーは見つけたの、マーロウさん？」

「いいや。ホテルからは抜けだした。四階に君と同じ側に部屋を持っている。おそらくほぼ君の部屋の真下だろう。荷物九個を持ってビュイックで失せたんだ。ホテル探偵、名前をジャヴォネンというやつ——自分ではアシスタントマネージャー兼警備担当と名乗ってる——はミッチェルが勘定書きを払い、さらに自室分を一週間分先払いしたので満足だ。何の心配もしてない。おれのことは嫌ってるがね、もちろん」

「そうでない人、いるの？」

「君だろ——五千ドル分」

「あら ホンット にバカなのね。ミッチェルは戻ってくると思う？」

「一週間分先払いしたと言っただろ」

彼女は静かにドリンクをすすった。「言ったわね。でも別の意味があるのかもしれない」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「そりゃあるかもな。たとえば、単なる思いつきだけど、料金を払ったのはミッチェル自身じゃなくて、だれか別人ってことかもしれない。その別人は何かをやる時間稼ぎをしたかった——たとえば昨晚君のバルコニーにあった死体を始末するとか。まあそんな死体があったらの話だが」

「もうやめてよ！」

彼女はドリンクを飲み干し、タバコをもみ消し、立ち上がって支払いはおれに残していった。おれはそれを支払い、ロビーに戻ったが、そうすべき理由は何も思いつかなかった。ただの純粋な直感かも。そしてゴーストがエレベーターに乗るのが見えた。なんだか緊張したような顔つきをしている。かごの中で向きを変えたとき、おれと目があったか、そういう気がしたが、おれに気づいた様子はまったく見せなかった。エレベーターは上がっていった。

おれは自分の車のところにいて、ランチョ・デスカンサードまで運転して戻った。長椅子に横になって寝た。長い一日だった。休んで頭がはっきりしたら、自分でも何をやっているのか、わずかにでも思い当たるかもしれない。

[18]

一時間後に金物屋の前に駐車した。エスメラルダ唯一の金物屋じゃなかったが、ポルトン小径という路地が裏にあるのはここだけだった。東に歩いて店を数えた。角まで七軒あり、どれも板ガラスとクロームの縁で輝いている。角にあるのは洋服屋で、ウィンドウにはマネキン、スカーフや手袋や衣装用の宝石が照明の下に並べられている。値札はない。角を曲がって南に行った。歩道から生い茂ったユーカリの木が生えている。枝は低く垂れ下がり、幹は硬く重そうので、ロサンゼルスに生えている背の高い脆そうな木とはまるでちがっていた。ポルトン小径の奥の角には自動車の代理店があった。その高い何も描かれていない壁をたどり、壊れた木箱、段ボールの山、ゴミ缶、埃っぽい駐車スペース、エレガンスの裏庭を眺めた。建物を数えた。簡単だ。質問の必要もない。ずっと昔にだれかの単純な家だった、小さな木枠の小屋の小さな窓に明かりが燃えていた。その小屋には木造のポーチがあり、手すりが壊れている。かつてはペンキが塗られていたが、街が商店だらけになる以前のはるか昔のことだ。かつては庭さえあったかもしれない。屋根のこけらはよじれている。正面ドアは汚いカラシのような黄色。窓はしっかり閉じられ、ホースで汚れを流す必要がある。その背後には、古いローラー式ブラインドの残骸。ポーチに上がる階段は二段だが、横板が残っているのは一段だけ。小屋の背後、金物店の搬入台まで半ばのところには、どうやらかつて屋外便所だったらしいものがあつた。だがそのたわんだ脇を貫通している水道管は目に入った。金持ちの物件に金持ちが改良を加えたわけか。一棟だけのスラム。

階段があつたはずの空っぽの場所を踏み越えて上がり、ドアをノックした。呼び鈴のボタンはなかった。だれも返事しない。ドアノブをまわしてみた。だれも鍵をかけていない。それを押し開けて中に入った。あの第六感がした。中で何か嫌なものを見つけることになりそうだ。

台座から歪み、紙製のシェードも裂けたランプで、電球がついていた。きたない毛布のかかった長椅子がある。古い藤製の椅子、揺り椅子、染みだらけの油布で覆われたテーブルがあつた。テーブルの上にコーヒーカップの横に広げられていたのは、スペイン語の日刊紙「エル・ダリオ」だ。さらにタバコの吸い殻入りの受け皿、汚い皿、音楽を出す小さなラジオ。音楽が止まり、男がスペイン語でコマーシャルをわめきたてた。それを切った。沈黙は羽根袋のように落ちてきた。そして半開きのドアの向こうから目覚まし時計のカチカチ音。そして小さな鎖のカチャカチャいう音、羽ばたき音がし

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

て、しわがれ声が早口で言った。「キエン・エス？ キエン・エス？ キエン・エス？」(だれ？ だれ？ だれ？) それに続いて、サルが怒った吠え声が聞こえた。そしてまた沈黙。

角にあるでかいかごから、丸く怒ったオウムの目がおれを見他。止まり木の上を、ギリギリまで横に移動した。

「アミーゴ」とおれ。

オウムは狂ったような笑い声をあげた。

「口に気をつけろよ、兄ちゃん」

オウムは止まり木の反対側までカニ歩きして、白いコップの中をつつき、軽蔑したようにくちばしからオートミールを揺すった。別のコップに水が入っている。オートミールまじりで汚くなっていた。

「トイレの訓練もできてないだろう、おまえ」

オウムはおれを見つめて身じろぎした。頭をまわし、反対側の目でおれを見た。そして前のめりになり、尻尾の羽根をはためかせ、おれの言ったとおりだと証明してみせた。

「ネシオ！ フェラ！（バカ！ 失せろ！）」と叫ぶ。

どこかで水漏れ水栓から水が滴っている。時計がカチカチ鳴っている。オウムがそのカチカチ音を真似て増幅させた。

「こんにちは」と言って見た。

「イホ・デ・ラ・チンガダ(この売女息子のクソ野郎)」とオウム。

おれは顔をしかめてみせると、半開きのドアを押し開けて台所の残骸のようなところに入った。床のリノリウムは流しの前で、下の板が見えるまですり減っていた。錆び付いたコンロ三つのガスストーブがあり、皿と目覚まし時計のある開けっぱなしの棚、台にのったりベット留めのお湯タンクが角にある。安全バルブがないので爆発する骨董品だ。狭い裏戸口があり、閉まっていて、鍵が鍵穴にささっており、たった一つの窓にも鍵がかかっている。天井からは裸電球がぶら下がっている。その上の天井はひび割れ、屋根からの水漏れで染みになっている。背後ではオウムが止まり木の上で無意味にガサゴソして、ときどき退屈してしゃがれた鳴き声をあげている。

亜鉛の水切り台には短いゴムチューブがあり、その横にガラス製の皮下注射器があって、プランジャーは根本まで押し込まれている。流しには、細長い空のガラス管があり、近くに小さなコルク栓がある。見覚えのあるガラス管だ。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

おれは裏口を開けて地面に下り、改装屋外便所に近寄った。傾いた屋根で、正面は高さ2.4メートルほど、奥側は1.8メートルに満たない。扉は外開きだ。狭すぎてそれ以外の開きようがない。鍵がかかっていたが、古い鍵だ。おれにあまり抵抗は示さなかった。

男のすりきれたつま先はほとんど床に触れていた。頭は暗闇の中、屋根を支える垂木からほんの数センチのところにあった。黒いワイヤでぶら下がっている。たぶん電灯線のワイヤだろう。脚のつま先は、つま先立ちをしようとしているかのように下を向いている。カーキ色のジーンズのすり減った裾が踵の下に下がっている。触れてみたが、冷たくなっていて、もうワイヤを切って下ろしても無駄だとわかった。

彼はしっかり念を入れていた。台所の流しの脇に立ち、ゴムチューブを腕に結わえて、拳を握って血管を浮かび上がらせ、注射器いっぱい硫酸モルヒネを血管に打ちこんだ。シリンジ三本が空っぽだったということは、一本は満杯だったと思ってまちがいなさそうだ。十分以上に摂取しなかったはずはない。それから注射器をおいて、結わえたチューブをほどいた。長くはかからなかっただろう、直接血管に打ちこんだのでは。そして外便所に出て、シートに立って、針金をのどのまわりに巻いたその頃にはかなり朦朧としていただろう。そこに立ったまま、膝の力がぬけて自重が後の面倒をみるに任せたのだ。何も感じなかったはずだ。すでに眠っていたのだから。

彼を残してドアを閉めた。家の中には戻らなかった。脇を通して、あの素敵な住宅街ポルトン小径に向かう途中で、小屋の中のオウムがおれを聞きつけてキイキイわめいた。「キエン・エス？ キエン・エス？ キエン・エス？」(だれ？ だれ？ だれ？)

だれって？ だれでもないよ、ご友人。ただの夜中の足音。

おれは静かに歩いて立ち去った⁶²。

62 この章もたいへんドラマチックだが、この男が何の役を果たすわけでもない。口封じに殺されたのか、とか思ったんだが、たまたま都合良くこのときに自殺しましたってこと？ 章としてあまり意味がなく、とてもすわりが悪い。

[19]

静かに、どちらへ向かうともなく歩いたが、結局はどこにたどりつくかは承知していた。いつもそうなのだ。カーサ・デル・ポニエンテだ。グランド通りの車に乗り混んで、あてどなく何街区かぐるぐるまわり、それからいつもながらバーの入り口近くの駐車スポットに停めた。外に出ながら隣に停まった車を見た。ゴープルのしけた黒い小さなポンコツだった。あいつ、バンドエイド並にくっついてきやがる。

いつもなら、あいつが何をたくらんでいるのか見当をつけようと頭を悩ませていたところだが、いまのおれにはもっとやばい問題があった。警察にいつて首を吊った男を報告しなきゃならん。だが何と言っていいやらまるで思いつかなかった。なぜおれはあの男の家に行ったのか？ もしそいつが事実を語っているなら、早朝にミッチェルが発つのを見たということになるから。なぜそれが重要なのか？ おれ自身がミッチェルを探していたから。顔をつきあわせてじっくり話がしたかった。何について？ そしてその先は、ベティ・メイフィールドにつながらない答えの持ち合わせは一切なかった彼女が何者か、どこから来たのか、なぜ名前を変えたのか、ワシントンだかヴァージニアだかどこかで何が起きて逃げ出してきたのか。

おれはトラベラーズチェックで五千ドル分の彼女の金をポケットにいれていた。正式な顧客ですらないというのに。身動きとれない。が、仕方ない。

崖っぶちまで歩き、波の音に聞き入った。たまに入江の向こうで波が碎けるときのきらめき以外は何も見えなかった。入江では波は碎けない。礼儀正しくすべるようにやってくる。店内監視員のよう。後になれば出るはずの明るい月は、まだチェックインしていなかった。

だれかがほど近くに立っていて、おれと同じことをしていた。女。彼女が動くのを待った。動いたらそれが知っている人物かわかる。まったく同じ動き方をする人はいない。指紋が完全に一致する人がいないのと同じだ。

おれはタバコに火をつけてライターの炎が顔を照らすに任せ、彼女は隣に来た。

「そろそろつけ回すのはやめてくれる？」

「君はお客だ。守ろうとしているんだ。七十歳の誕生日になったらその理由をだれかが教えてくれるかもな」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「保護してくれなんて頼んでない。あたしはあなたの客じゃない。さっさと家に帰って——家があれば——人を苛立たせるのはやめたら？」

「お客だ——五千ドル分の。それに見合う働きをしないと——口ひげをはやす以上のことはできないにしても」

「どうしようもない人ね。あのお金をあげたのは放って置いてもらうためよ。どうしようもない人ね。これまで会った中でいちばんどうしようもない人。とんでもない連中にいろいろお目にかかってきた上で言うのよ」

「あのリオの高層高級マンションはどうなったんだい？ おれがシルクのパジャマでうろついて、きみの長い蠱惑的な髪を弄び、執事がウェッジウッドとジョージア銀器を並べるんだろ、あのかすかな作り笑いを浮かべて繊細な身ぶりをしつつ、映画スターのまわりをとびまわるおかま美容師みたいに」

「まったく、うるさいわね」

「本気の申し出じゃなかったってわけか、え？ ただのその場の気まぐれ、いやそれですらないか。おれに睡眠時間を斬殺させて、ありもしない死体を探してうろつかせるための手口か」

「だれかに鼻っ面を小突かれたこと、あるの？」

「しょっちゅうね。だがときどきはかわすんだ」

おれは彼女をつかんだ。女はふりほどこうとしたが、ひっかきはしなかった。おれは彼女の頭のてっぺんにキスした。いきなり彼女はおれにしがみつки、顔を上げた。

「いいわよ、キスしなさいよ、それで少しでも気が済むんなら。たぶん、できればベッドのあるところでこうなりたかったと思ってるんでしょね」

「おれも人間だからねえ」

「気取るんじゃないわよ。薄汚い低級な探偵のくせに。キスして」

キスした。口が間近になっているところで、おれは言った。「あの男は今夜首を吊った」

彼女は激しく後ずさっておれから離れた。「だれが？」とほとんど声にならない声で尋ねた。

「ここの車庫の夜警だ。君は一度も見えていないかもしれない。メスカル、大麻、マリファナをやった。だが今夜はモルヒネを大量に注射してから、ポルトン小径裏の小屋の屋外便所で首を吊った。ポルトン小径ってのはグランド通り裏の路地だ」

いまや彼女は震えていた。まるで転落するのを防ごうとするかのようにおれにしがみついている。何か言おうとしたが、のどがつまってうめき声しか出ない。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「今朝早くにミッチェルがスーツケース九つ持って発ったのを見たと言ったヤツだよ。今一つ信じる気になれなくてね。住所は教えてくれたので、今晚もう少し話をしに出かけたんだ。そしていまや警察に行って話さないで。そしてミッチェルのことや、そこから君について話さずにすませるには何と言ったらいいものやら」

彼女は囁いた。「お願い、お願いよ。後生だからあたしの名前を出さないで。お金ならもっとあげるから。お金なら好きなだけあげる」

「まったくもう。すでに持ちきれないくらいくれただろう。金が欲しいんじゃない。自分がいったい何をやってんのか、何のためなのかという理解が多少なりともほしいんだ。職業倫理ってやつのは聞いたことがあるだろうに。かけらばかりとはいえ、それがまだおれにも残ってるんだ。君はおれの客なのか？」

「ええそうよ。降参だわ。みんな結局はあなたに降参する。そうなんですよ？」

「いやいや全然。無理強いされることなんかいくらでもある」

おれはトラベラーズチェックのフォルダをポケットから取り出し、ペン型懐中電灯でそれを照らして五千ドルを五枚を破り取った。残りをたたみ直して彼女にわたした。「五百ドルは手元に残した。これで法的に君の顧客だ。だからすべてを語ってもらおう」

「いやよ。あなた、だれにもその男のことを話す必要なんかないでしょう」

「あるとも。すぐにでも警察署にいかないと。絶対に。そして連中が三分で見破れないようなお話が何も用意できてない。ほれ、このクソチェックを受け取れよ——そして今度これをおれに押しつけようとしたら、むき出しのおけつをペンペンしてやる」

彼女はフォルダをひったくり、憤然と暗闇の中をホテルのほうに向かった。おれはそこに突っ立って、バカみたいな気分だった。いつまでそこに立っていたかわからないが、やっと五枚の小切手をポケットに突っ込んで、気乗りせずに車に戻り、どうしても行かざるを得ないと分かっている場所に向けて出発した⁶³。

63 わざわざ出向かなくても電話でよくね？

[20]

フレッド・ポープという名の小さなモーター経営者が昔、エスメラルダについてどう思っているかを語ってくれた。高齢でおしゃべり好きで、いつも聞くだけの価値はあった。おれの稼業では、いちばん意外な人たちが、ときにすごく重要な事実をいくつかボロリと語ってくれるのだ。

「ここには三十年いますがね、きたときには乾燥ぜんそくだった。いまや湿式ぜんそく。この街があまりに静かで、大通りの真ん中で犬が寝ていて、車があるならそれを停めて、外にでて犬を押しやらないかならなかったんですよ。犬どもはこっちをせせら笑うだけ。日曜日はもう埋葬されたようなものだ。あらゆるものが銀行の金庫なみにぴったり閉まってる。グランド大通りを歩いて下っても、死体置き場の死体並の楽しみしかない。タバコも買えやしない。静かすぎて、ネズミがひげにクシを入れているのが聞こえるほど。わしと古女房は——もう十五年前に死にましたがね——崖に沿った道のとこに持ってた小屋で、クリベッジをやったもんですよ。そして何かワクワクすることが起こらないかと聞き耳をたてるんです——ワクワクといっても、老いぼれが散歩をして杖でドアを叩くとかですがね。ヘルウィグ一家がそれを望んでいたのか、それともヘルウィグ老が嫌がらせでそれをやっていたのかはわかりませんな。その頃には、あの人はそこに住んでなかった。農機具商売じゃ大物でしてね」

「むしろ、エスメラルダみたいな場所がいずれ投資価値が出てくるの見越すだけの知恵があったんじゃないかな」とおれ。

フレッド・ポープは答えた。「かもしれませんな。とにかく、あの人がこの街を作り上げたようなもんですよ。そしてしばらくして、ご当人もここにやってきて暮らすようになった——あのタイル屋根のでかいしっくい家屋の一つにね。豪勢なもんです。テラスだのでかい緑の芝生だの花咲く茂みだのがある庭を持ってたし、錬鉄の門も——イタリアから輸入したって聞きましたよ。それとアリゾナの自然石をおいた歩道、それも庭園は一つだけじゃなくて、半ダースあったんですよ。そしてご近所どもにうるさいことを言わせないだけの土地も持っていた。毎日、ウィスキーを二びんも飲んで、かなり荒れる客だったとか。娘が一人いて、パトリシア・ヘルウィグお嬢さん。彼女こそ一家で真に傑出してたんですよ⁶⁴。いまだにそうです。

64 She was the real cream 彼女が一家のなかで最も優秀ですばらしかった、という意味。清水訳「しっかりした娘だった」は正解。村上訳「華のある女性」田口訳「なかなかの美人」は完全なまちがい。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

その頃にはエスメラルダも人が増え始めたんですよ。最初は、婆さんとその旦那さんたちがたくさん、だから葬儀屋稼業が大繁盛で、退屈で死んだじいさんが、愛しの未亡人たちに埋められたってわけ。クソ女どもはやたらに長生きだ。うちのかみさんはちがったがね」

彼は話を停めてしばし顔を背け、それから続けた。

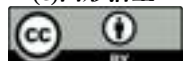
「その頃には、サンディエゴから路電が開通してたんだが、それでも街はまだ静かだった——静かすぎた。ここで生まれるやつはほとんどいなかった。子作りはなんか、ちょっとエッチすぎるような感じがあったんですよ。でも戦争でそれが変わった。いまや汗かく男たちがいて、リーヴァイスに汚いシャツのタフな学生がいて、アーティストだのカントリークラブの飲んだくれだの、さらには原価二十五セントのハイボール・グラスを八ドル五十で売するような、セコい土産物屋とかもできた。レストランや酒屋もあるが、いまだに看板だのビリヤード場だのドライブインはないんですよ。去年は、公園にコイン式の望遠鏡を設置しようとしたんですよ。いやあ、街の評議会は金切り声で反対してすごいもんだった。その案をすっかりつぶしましたよ。でもこの場所はもう鳥の樂園なんかじゃありませんがね。ビバリーヒルズ並のしゃれた店がある。そしてパトリシアお嬢さんは、一生にわたりビーバーみたいに働きずめで、街に貢献してきたんですよ。ヘルウィグは五年前に死んだ。医者、酒を控えないと一年保たないぞと告げました。じいさんはそいつらをたたき出して、好きなときに、朝だろうと昼だろうと夜だろうと酒がのめないなら、完全に飲まないほうがマシだと言ってね。そして禁酒して——一年で死にました。

医者はそれを示す病名を持ってましたよ——医者はいつもそうです——そしてヘルウィグお嬢さんはそいつらに言いたいこともあったでしょう。とにかく、医者どもは病院から蹴り出されて、それでそいつらはエスメラルダにいられなくなった。大して影響はありませんでしたよ。まだ医者は六〇人から残ってましたからね。この町はヘルウィグ一家だらけで、姓が変わったのもありますが、みんな大なり小なりあの一族です。金持ちもいるし、働いてるのもいる。ヘルウィグお嬢さんは中でも働き者でしょうな。いまや八十六歳ですが、かくしゃくたるもんです。嗜みたばこも、酒も、喫煙もしないし悪態もつかないし化粧もしない。この街に病院と私立学校、図書館、芸術センター、公共テニスコート、その他あれもこれもくださった。そしていまだに三十年もののロールス・ロイスを運転手つきで乗り回してる。スイス製腕時計並に騒々しい車でしてね、これが。ここの市長もヘルウェグ本家から二親等ほど離れた親族ですが、どっちのつながりも歳が下るほうのつながりですなあ。市庁舎も彼女が建てたはずで、それを一ドルで市に売ったのかな。大した女性ですよ。もちろんいまじゃここにユダヤ人がいますがね、一つ言っときましょう。ユダヤ人ってのは、慎重にしないときつい取引をして尻の毛までむしるって言うじゃないですか。あんなの大嘘ですよ。ユダヤ人は取引を楽しむ。商売は好きだけど、強気なのはうわべだけです。ユダヤ人ビジネスマンの皮の下には、普通はすごく取引

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

しやすい相手がいるんですよ。人間なんだ。冷酷に生革剥がれたければ、いまやこの街には骨までこっちの肉を剥ぎ取って、さらに手数料まで上乘せする連中が山ほどおりますって。こっちが食らいついてるドルを根こそぎ奪い、それでいてこっちが盗んだとでも言わんばかりの顔つきで見やがるんだ」⁶⁵

65 この章、あとでヘルウィグ家が話にからんでくるのかと思ったら何もなく、何のためにある章なのか謎。



[21]

警察署はヘルウィグとオーカットの交差点にある、長いモダニズム建築の一部だった。車を停めて中に入ったが、まだどう自分の話を語ったものか思案しつつ、それでも語るのは避けられないのはわかっていてた。

事務室は小さいがとてもきれいで、デスクの当番職員はシャツに鋭いシワが二本、制服はまるで十分前にプレスされたように見えた。壁のスピーカー六つの群れが、郡全体から警察と保安官の報告を流していた。机の傾いた銘板を見ると、当番職員の名前はグリッデルだ。彼はそういう人がみんな見せる様子でおれを見た。何かを待っている。

「ご用件は何でしょうか」とクールで快い声で言う。その態度は、最高の職員に見られる規律を示していた。

「死亡報告です。グランド通りの金物屋の裏にある小屋の中、ポルトン小径という路地で、男がなんか屋外便所みたいなところにぶら下がってます。死んでます。手の施しようがない」

「お名前は？」彼はすでにボタンを押していた。

「フィリップ・マーロウ。ロサンゼルス私立探偵です」

「その場所の地番はわかりますか？」

「見あたらなかったんですよ。でもエスメラルダ金物社の真後ろです」

「救急車手配。緊急」と彼はマイクに言った。「エスメラルダ金物社の裏の小屋で自殺の可能性。男が家の後ろの屋外便所で首つり」

そしておれを見上げた。「この人の名前をご存じですか？」

おれは首を振った。「でもカーサ・デル・ポニエンテの夜の車庫番の人です」

彼は何か本のページをめくった。「そいつは知っています。大麻の前科があります。どうして仕事が続けられたのかわかりませんが、もう止めていたのかもしれない。それにそういう労働者はここらじゃかなり不足しているし」

強情な顔をした背の高い巡査部長が事務所に入ってきて、ちらりとおれを見て出ていった。車のエンジンがかかる音。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

当番職員は小さな交換機のキーをパチンと入れた。「警部、こちらデスクのグリッデルです。フィリップ・マーロウという人が、ポルトン小径で死亡報告を入れました。救急車手配済。グリーン巡査部長が向かっています。周辺にパトカー二台」

そしてしばらく聞き耳をたてて、おれを見た。「アレッサンドロ警部がお話したいそうです、マーロウさん。廊下を下ったつきあたり右のドアへお願いします」

スイングドアをおれが通り抜けるのを待たずに、彼はまたマイクに話していた。

つきあたり右のドアには二つの名前があった。戸板に固定した銘板にはアレッサンドロ警部、可変パネルにはグリーン巡査部長。ドアは半開きだったので、ノックして中に入った。

机に向かった男はデスク職員に負けないほどピカピカだった。虫眼鏡で名刺を調べているところで傍らのテープレコーダーが、千々に乱れた不幸そうな声で、何やら陰気な話を語っていた。警部は身長190センチ、濃い黒髪と明るいオリーブ色の肌をしていた。制服の帽子が近くの机の上にある。目をあげ、テープレコーダーを切り、虫眼鏡と名刺を置いた。

「おすわりください、マーロウさん」

おれはすわった。相手はおれをしばし見て何も言わなかった。いささか優しげな茶色い目をしていたが、口元は優しげじゃなかった。

「カーサのジャヴォネン少佐はご存じと聞きましたが」

「会ったことはあります、警部。親しい友人とはいえません」

彼はかすかに笑った。「それはまあそうでしょうねえ。自分のホテルであれこれ詮索する私立探偵にはいい顔しないでしょう。以前あいつはうちのCICにいたんですよ。いまだに少佐と呼ばれてます。ここは私が勤務した中でもまったくとんでもなく礼儀正しい街ですよ。我々もとんでもなく洗練されてはいますがね、でも警察にはちがいない。さてこのセフェリーノ・チャングのことですが？」

「それが名前ですか。知りませんでした」

「ええ、知られた人物ですよ。エスメラルダで何をなさっているのかお尋ねできますか？」

「ロサンゼルスのカライド・アムニーという弁護士に雇われて、スーパーチーフ号を待ってある人物を尾行し、その人物がどこかに落ち着くのを確認しろと言われたんです。理由は報されませんでした。アムニーさんはワシントンの法律事務所の依頼で動いていると言っていて、その理由は自分も知らないと言います。仕事を引き受けたのは、その相手にちょっかいを出さない限り、尾行には何も違法なことはないからです。その人物がエスメラルダに来たんです。おれはロサンゼルスに戻って、どういう背景の依頼かをつきとめようと思いました。無理だったので、適正と思った料金、二百五十ドル

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

を受け取って、経費は自分持ちにしました。アムニーさんにはあまりお気に召していただけませんでしたかね」

警部はうなずいた。「それじゃなぜこちらにいるのか、あるいはセフェリーノ・チャングと何の関係があるのかの説明にはなってませんな。そしていまのあなたはアムニー氏のために働いてるんじゃない以上、別の弁護士のために働いているのでもないかぎり、秘匿特権はない」

「堪忍してくださいよ、頼みますよ警部。おれが追跡してる人が恐喝されているか、あるいは恐喝しようという試みがあったのを知ったんですよ。ラリー・ミッチェルという人間に脅されたんです。カーサに住んでいるか、以前は住んでいました。この御仁と接触しようとしてたんですが、得られた唯一の情報はジャヴォネンと、このセフェリーノ・チャングからのものしかない。ジャヴォネンは、このミッチェルがチェックアウトして、宿泊費は精算し、さらに一週間分の部屋代を前払いしたと言う。チャングは、こいつが今朝七時にスーツケース九つ持って発ったという。チャングの態度には何かちょっと奇妙なところがあったもんで、もう一度話がしたかったんですよ」

「チャングの住まいをなぜ知ってたんです？」

「本人が話してくれたんですよ。恨み言の多いやつだった。住んでるのはある金持ちの物件だと言って、きちんと手入れされていないので怒ってるようでした」

「それじゃとても足りないねえ、マーロウ」

「わかりましたよ、おれ自身も足りないと思いましたよ。あいつは大麻をやってました。おれは売人のふりをした。おれの稼業では、ときどきかなりお芝居が必要なこともあるんです」

「そのほうがマシ。だが欠けてるものがありますねえ。あなたの顧客の名前だ——そんな顧客が実在すればですがな」

「秘密にしてくれますか？」

「場合による。恐喝被害者の名前は決して公開しません。それが裁判で出てこない限りね。だがその人物が犯罪を犯したり有罪宣告を受けたりしていれば、あるいは訴追を逃れるために州境を越えたなら、法執行職員としての職務のため、彼女の目下の所在地と彼女の使っている名前は、報告しなきゃならん」

「彼女？　じゃあもう知ってるんだ。なぜおれにきくんですか？　彼女が逃げ出した理由は知りません。話してくれないんです。わかってるのは、何か面倒にはまっていて怯えていて、なぜかミッチェルは彼女を屈服させるだけのことを知っていたってことだけです」

彼はなめらかな手の動きで、引き出しからタバコを取り出した。それを口にくわえたが火はつけなかった。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

彼はまたおれをしっかりと見据えた。

「よし、マーロウ。ここは流しておこう。だが何か掘り起こしたら、ここに持ってきてくれ」

おれは立ち上がった。彼も立ち上がり、手を差し出した。

「私たちはタフじゃない。仕事でやってるだけだ。ジャヴォネンとは、そういがみあいなさんな。あのホテルの所有者はこらじゃかなり顔がきくんですよ」

「ありがとう、警部。おれもいいこちゃんになってみますよ——ジャヴォネン相手ですら」

おれは廊下沿いに戻っていった。デスクには同じ職員がいた。彼がうなずく横を、夕方の中へと出て車に乗りこんだ。ハンドルを両手でしっかりと握ったまますわった。おれが生きていてもいいような扱いをしてくれるおまわりには、あまり慣れていなかった。そこにすわっているところへ、デスク職員がドアから頭を突き出して、アレッサンドロ警部がもう一度話したがっているから、と声をかけた。

アレッサンドロ警部の事務室に戻ると、電話中だった。来客用の椅子のほうにあごで合図すると、電話の話を聞き続け、多くの記者たちが使う何やら濃縮速記めいた字ですばやくメモを取った。しばらくしてこう言った。「ご協力痛み入る。引き続きよろしく」

彼は後ろにもたれて机を指先で叩き、顔をしかめた。

「いまのはエスコンディードの保安官支局からの報告です。ミッチェルの車が見つかった——明らかに乗り捨てられています。お知りになりたいかと思ひましてね」

「ありがとうございます、警部。どこにあったんです？」

「ここから三十キロほどの、395号ハイウェイに続く田舎道ですが、395にのるときに普通使う道じゃない。ロス・ペニャスキートス峡谷ってところですよ⁶⁶。地層の露頭に、荒地と涸れ谷しかないところでしてね。私も知ってるところです。今朝、ゲイツという牧場主が、壁を作るための自然石を探してそこを小さなトラックで通りがかったんです。道端にツートンカラーのビュイック・ハードトップが駐車してあるところがあったそうで。別に特にビュイックに注目することもなく、特にひしゃげてもないようだから、だれかがそこに駐車したのかなと思っただけだったとのこと。

その日遅く、四時頃にゲイツは別の石の山を取りに戻ったんです。ビュイックがそのままそこにあったんで、こんどはトラックを停めて見に行ったんですと。キーはささってませんでしたが、ドアに鍵もかかっていない。故障した様子もない。それでもゲイツは念のためにナンバーと、登録証の名前と住所を控えてくれた。牧場に戻ったら、エスコンディードの保安官支局に電話しました。もちろんその署員はロス・ペニャスキートス峡谷を知っている。一人が出かけていって車を調べました。

⁶⁶ Los Peñasquitos Canyon. 細かいことだが、nの上にニョロニョロがついているのはニャの音なので、ペニャスキートス。既訳はすべて「ペナスキトス」にしている。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

まっさらです。署員はなんとかトランクを開いた。でもスペアタイヤと工具いくつか以外は空っぽ。そこでエスコンディードに戻ってここに電話寄越したってわけです。いま電話してたのがそれです」

おれはタバコに火をつけて一本をアレッサンドロ警部にすすめた。彼は首を振った。

「なんか思い当たるところは、マーロウ」

「そっちと同じですよ」

「とにかく聞かせてくださいよ」

「もしミッチェルが姿を消すだけの理由があり、拾ってくれるような友人がいたら——このだれもまったく知らない友人だ——車はどこかの車庫にしまったはずだ。そうすればだれも怪しまない。車庫のほうも何も怪しまない。車を保管するだけなんだから。ミッチェルのスーツケースはすでにそのご友人の車に積まれたはずだ」

「それがどうした？」

「だからそんな友人はいたはずがない。だからミッチェルは虚空にかき消えた——スーツケース九個とともに——ほとんど使われない、まったく無人の通りで」

「その先のことだよ」その声はいまや厳しかった。とげとげしかった。おれは立ち上がった。

「高圧的なのはよしてくださいよ、アレッサンドロ警部。おれは何も悪いことはしてない。これまであなたはとても人間的だった。ミッチェル消失におれが何か関係してたなんて思わないでくださいよ あいつがおれのお客のどんなネタをつかんでいたのか、知らなかったし未だに知らないんだ。わかってるのは、彼女が寂しい怯えた不幸な女だってことだけ。理由がわかれば、何とかつきとめたら、お伝えするか、あるいはしないか。しなければ、法律でおれを徹底的にしばくしかないですね。これが初めてってわけじゃない。おれは売り渡したりはしない——いい警官にですら」

「そうならないことを祈りたいもんですな、マーロウ。切に」

「いっしょに祈りますよ、警部。それとまともな扱いをしてくれてありがとう」

おれは廊下を歩いて戻り、デスクに詰めている職員に会釈して、また車に乗った。二〇年も歳を取った気分だった。

ミッチェルが生きていないのはわかっていた——そしてアレッサンドロ警部もそれをわかっているのはほぼ確信していた。あいつが自分で車をロス・ペニャスキートス峡谷に運転していったはずはなく だれかがそこに運転して行って、ミッチェルは後部座席のフロアで死んでいたのだ。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

他の見方はどう考えてもなかった。統計的な意味で、紙の上では、テープレコーダー上では、証拠としては事実というものがある。そして、事実としか考えられないから、そうでなければ何もつじつまがあわないから事実だというものもあるのだ。

[22]

それは夜の突然の叫びのようなものだが、音はない。ほとんど常に夜に起こる。暗い時間が危険の時間なのだから。だが真昼に起きたこともある——あの不思議な澄み渡った瞬間、知っているはずのないことがいきなりわかるあの瞬間だ。あるいは長年の経験と長い緊張、そして今回の場合には、闘牛士たちが「真実の瞬間」と呼ぶものがやってきたというつつぜんの確信がそれを教えてくれるのかも。

他に何の理由もなかった。まともな理由は何一つ。だがおれはランチョ・デスカンサードの入り口の向かいに車を停めて、ヘッドライトとエンジンを切り、そのまま五十メートルほど惰性で坂を下らせ、そしてハンドブレーキを思いっきり引いた。

事務所に歩いていった。夜間ベルのあの小さな照明の光があったが、事務所は閉まっていた。まだ十時半だ。裏にまわり木々の間をうろうろした。停めた車二台に出くわした。一つはハーツのレンタカーで駐車メーターに入れるコイン並に無個性だが、かがみ込むことでナンバープレートが読めた。隣の車はゴープルの小さな黒いポンコツだった。カーサ・デル・ポニエンテに駐車してあったときから、そんなに時間がたっていないように思える。それが今やここにある。

自室の下にくるまで木の下を抜けた。部屋は暗く無音だった。短い階段をととてもゆっくり上がり、ドアに耳をつけた。しばらく何も聞こえなかった。それからくぐもった泣き声が聞こえた——男の泣き声、女じゃない。それからか細く低い笑い。そして何やら強く殴った音らしきもの。そして沈黙。

階段を下り、木々を抜けて自分の車に戻った。トランクを開けてタイヤレバーを一本取り出した。以前と同じくらい——いやもっと——慎重に自室に戻った。また聞き耳をたてた。無音。何もし。夜の静けさ。懐中電灯を取りだして窓を一度チラッと照らし、こっそりドアから離れた。数分にわたり何も起こらなかった。そしてドアがかすかに開いた。

そのドアに肩で思いっきりタックルを喰らわせ、叩きつけて大開きにした。男はよろけて後退し、笑った。かすかな光の中で男の銃がギラつくのが見えた。そいつの手首をタイヤレバーで砕いた。そいつは絶叫した。もう片方の手首も砕いた。銃が床に落ちるのが聞こえた。

後ろに手を伸ばして明かりのスイッチを入れた。ドアを蹴って閉じた。

そいつは青白い顔の赤毛野郎で目が死んでる。顔は苦痛に歪んでいるが、目は相変わらず死んでる痛めつけられても、相変わらず強がっていた。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「あんた、もう先はないぜ」

「そういうお前はすでに死んでいる。そこをどけ」

そいつは何とか笑った。

「まだ脚は無事だな。膝を曲げて寝転がれ——うつぶせでな——顔がなくなってよければ別だが」

そいつはおれに唾を吐こうとしたが、のどを詰まらせた。立った状態から膝立ちになり、腕を差し出した。いまやうめいていた。いきなり崩れ落ちた。全部お膳立てしてもらえるとときには、こいつらはとんでもなくタフにふるまうんだ。そして、お膳立てのない状況なんてまるでご存じない。

ゴーストはベッドに転がっていた。その顔はあざと切り傷まみれだった。鼻が折れている。気を失っていて、首を絞められかけているような呼吸だ。

赤毛はまだ転がっていて、銃が近くの床に落ちていた。そいつのベルトをむしりとり、足首を縛った。それからひっくり返してポケットの中を調べた。財布の中には六七〇ドル、リチャード・ハーヴェスト名義の運転免許、サンディエゴの小さなホテルの住所。小切手帳には銀行およそ二十行からの番号つき白紙小切手がたくさん入っていて小切手詐欺の準備万端⁶⁷、不正に便利なクレジットカードも一揃いあったが、銃の許可証はない。

そいつをそこに転がしたまま、事務室まででかけた。夜間ベルのボタンを押し、そのまま押し続けた。しばらくして暗い中を人影がやってきた。バスローブとパジャマ姿のジャックだった。おれはまだタイヤレバーを手にしていた。

彼はハッとしたようだった。「どうかしましたか、マーロウさん？」

「いやいや。ただ部屋でゴロツキが私を殺そうと待ち構えていただけだよ。それとベッドの上で他の誰かがぶちのめされていただけ。まったくどうもしてないよ。ここらじゃまったく普通のこと、だったりするの？」

「警察を呼びます」

67 原文は、小切手がいろいろあるとしか書いていない。既訳もみんなそのまま訳してる。安全なやり方ではある。が、その意味は伝わらないだろう。やたらにいろんな銀行の番号入り(=正規の)小切手を持っているというのは、小切手詐欺をやる連中の常套。口座を開いて小切手帳を受け取ったら閉じて、不渡り小切手をいっぱい切るのだ。だからこの描写で、こいつがその手のセコい手口常習のチンピラ悪党なのは見当がつく。日本ではそもそも小切手をみんなが自分で書いたりもしないし、いまやアメリカでも小切手は衰退気味なので、そのままではわからない人がほとんどのはず。ここではそれを補うために少し書き足した。

その後のクレジットカードを一揃いも、かなり怪しいやつというニュアンス。1950年代はダイナースクラブのクレカがようやく富裕層に出回りだしたばかり(アメックスが1958だって)。だれでも持てるものではない。だから当時の読者は「そんなのを束で持っているのは手練れの(でもセコい)詐欺師だな」という印象を持つ(Grok/Aniちゃんも賛成してくれてます)。そのむね加筆した。わかんなくても致命的ではないけど、こういう細かいネタの積み重ねが作品全体の印象にもつながるし、著者のが余計なこと書いてるわけじゃないのもわかるので。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「まったくもってご親切に、そうしていただけると本当に助かりますですよ、ジャック。ご覧のとおり、私はまだ生きてるからね。そうだ、こうしたらどうだい？ この宿を犬猫病院にするんだよ」

彼はドアの鍵を開けて事務所に入った。警察と話しているのを聞いておれは部屋に戻った。赤毛は根性はあった。なんとか壁にもたれて体育座りになっていた。目はまだ死んでいて、口はよじれてニヤリとしていた。

ベッドのところに行った。ゴープルは目を開けていた。

「しくじった。自分で思ったほど優秀じゃなかったんだ。格のちがうやつを相手にしちまった」

「警察が向かってる。何があった？」

「罠にこっちからはまりにいつちまった。文句は言えない。コイツは殺し屋だ。おれは運がよかったまだ息してる。ここまで運転してこさせられた。ぶちのめされ、縛り上げられ、そしてしばらく姿を消してた」

「だれかが奴を迎えに来たんだ。あんたの車の横にレンタカーがある。あいつがあれをカーサに置いていたなら、他にそれを取りに戻る方法はない」

ゴープルはゆっくりと頭を回してこっちを見た。「自分が賢いつもりだったんだがな。まちがっていたと思い知ったよ。いまはカンザス市に戻りたいだけだ。小者は大物に太刀打ちできないんだ——決して。どうやらあんたは命の恩人らしいな」

そこへ警察が来た。

最初のパトカーのおまわり二人は、素敵でクールな真面目そうな子たちで、いつも染み一つない制服を着ていつも真面目くさった顔だ。それからでっかいタフな巡査部長がきて、ホルツマインダー巡査部長と名乗り、巡回シフトの巡査部長なのだという。赤毛を一瞥するとベッドのほうに行った。

「病院を呼べ」と手短に、肩越しに言う。

おまわりの一人がパトカーのところに出ていった。巡査部長はゴープルの上に身をかがめた。

「話す気になったか？」

「赤毛野郎にぶちのめされた。金も取られた。カーサで銃を突きつけやがった。ここまで運転させたんだ。それからおれをぶちのめした」

「なぜだ？」

ゴープルはため息のような音をたて、枕の上の頭がぐったりした。また気絶したか、そのふりをしたかだ。巡査部長は身を起こしてこっちを向いた。「おまえの言い分は？」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「何もありませんよ、巡査部長さん。ベッドの男は今夜いっしょに夕食を食べました。何度か顔をあわせています。カンザス市の私立探偵だと言っていました。ここでこいつが何をしているかはまったく知りません」

「こいつは？」と巡査は赤毛のほうに雑な身振りをしてみせた。赤毛はまだ、不自然でけいれんするようなニタニタ顔のような笑みを浮かべている。

「これまで会ったこともない。こいつのことは何も知らない。銃を持っておれを待ち構えていたこと以外は」

「これ、あんたのタイヤレバー？」

「はい、巡査部長さん」

もう一人のおまわりが部屋に戻ってきて、巡査部長にうなずいた。「いま来ます」

巡査部長は冷ややかに言った。「で、タイヤレバーを持ってた、と。なんでだ？」

「まあ、だれかが待ち伏せしているような第六感があったとでも言いますかね」

「第六感なんかなくて、すでに知ってたとも言えるかね。そして他にもいろいろ知ってる」

「状況がはっきりするまで、うそつき呼ばわりはやめてもらえるようにできますかね。それとその三本縞のバッジをつけてるからって、そんなクソ虚勢を張らないでもらえたりもしますかね。それと他のことにも目を向けてもらったりできますかね。こいつはチンピラだが、それでも両手首が折れていて、それがどういうことかわかりますか、巡査部長さん？ 二度と銃は持てないってことですよ⁶⁸」

「じゃあおまえを故意の傷害罪でしょっぴくか」

「そう来ますか、巡査部長さん」

そこへ救急車がやってきた。まずゴースルを運び出し、それからインターンが仮の副え木を赤毛野郎の両手首に当てた。足首の拘束も解いてやった。そいつはおれを見て笑った。

「こんどはもうちょっと、おれも工夫するぜ——だがあんた、やるな。なかなかやるぜ」

そいつは出て行った。救急車のドアがガチャンとしまり、そのうなる音は止まった。巡査はいまやすわって帽子を脱いでいた。おでこをふいている。そして平静に言った。

「もう一度やろう。最初からだ。まるでお互いを嫌っていないかのように、単に理解しようとしているかのように。どうだ？」

「ええ、巡査部長。できますとも。機会を与えてくれてありがとう」

68 それがどうした？ マーロウがここで何を指摘したいのか不明。

[23]

やがて警察署に舞い戻る羽目になった。アレックスandro警部は帰宅していた。供述書はホルツマインダー巡査部長に提出しなきゃならなかった。彼はおもしろがるようだった。

「タイヤレバーかよ、え？ あんた、ずいぶん危ない橋を渡ったねえ。あれで殴っている間に四発くらい撃ってきたかもしれないんだぜ」

「そうは思わないよ、巡査部長さん。ドアでかなり派手に痛めつけたからね。それにタイヤレバーはフルスイングはしてない。それと、おれを撃たないことになってたんじゃないかな。依頼されてやったんじゃないかと思うんだ」

その手のことがもう少しあって、放してもらった。遅すぎてベッドに入る以外なく、だれかと話をするには遅すぎた。それでも電話局にでかけて、二つのきれいな屋外電話ボックスの片方に閉じこもり、カーサ・デル・ポニエンテに電話した。

「メイフィールドさんを頼む。ベティ・メイフィールドさんだ。1224 号室」

「この時間にはお客様におつなぎできません」

「なぜだい？ あんたの手首がいかれてんのか？」今夜のおれはえらく高飛車だった。「緊急でもないのにおれが電話するとでも思うのか？」

交換手は電話をつなぎ、彼女は眠い声で出た。

「マーロウだ。まずいことが起きた。そっちに行こうか、それともこっちに来るか？」

「何？ まずいことって？」

「今回だけはおれを信じろ。駐車場で拾おうか？」

「着替えるからちょっと時間をちょうだい」

車のところにいて、カーサまで運転した。タバコ三本目にかかり、ドリンクでもほしいと思っていたところへ、彼女が足早に無音で車のところに来て乗った。

「これが何のことだか知らないけど」と言いかけた彼女におれは割り込んだ。

「君なら知ってるはずだ、他に知るやつはいない。今夜はしゃべってもらう。それと頑固ぶるのはやめてくれ。二度はその手にのらない」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

車を急発進させ、静かな通りを高速で通り抜けて丘を降り、ランチョ・デスカンサードに入って木々の下に駐車した。彼女は無言で降りて、おれはドアの鍵を開けて灯りをつけた。

「飲む？」

「ええ」

「薬は？」

「今夜は飲んでないわ、睡眠薬のことなら。クラークといっしょに出かけてて、シャンパンをかなり飲んじゃって。あれはいつも眠くなるの」

おれはドリンクを二杯作り、片方を渡した。すわって頭を後ろにもたせた。

「すまんね。ちょっと疲れてるもんで。二、三日に一度はすわらなきゃならんのだよ。なんとか克服しようとした弱点なんだが、昔ほど若くないもんで。ミッチェルは死んでる」

彼女は息をのどにつまらせ、手が震えた。蒼白になったかもしれない。見分けられなかった。彼女は小声で言った。

「死んだ？ 死んだの？」

「まったく、いい加減にしてくれよ。リンカーンも言ったように、ときには探偵みんなをだませるし一部の探偵をずっとだまし続けることもできるが、全部の探偵を——」

「うるさい！ うるさいわよ！ まったく何様のつもり？」

「多少なりとも君のお役にたてるようになろうとして、ずいぶん頑張ったただの野郎のつもりだよ。君が何かの面倒にはまってると思うだけの経験と理解がある野郎だ。そしてそこから抜け出す手助けをしたいと思ってるのに、君からは何の支援もない」

彼女は低い息もつかせぬ声で言った。「ミッチェルが死んだのね。意地悪するつもりじゃなかったどこで？」

「車が君の知らない場所に乗り捨てられていた。内陸に三十キロほど入ったところで、ほとんど使われていない道路だ。ロス・ペニヤスキートス峡谷ってところ。ほとんどだれも使わないような道ばたに空の車が停まっているだけ」

彼女はドリンクを見下ろして、大きくあおった。「あの人が死んだって言ったわね」

「何週間も前のことのようにではあるが、君がここにやってきて、あいつの死体処分にリオのてっぺんを出すと申し出たのは、ほんの数時間前のことだぜ」

「でも死体が——つまり、あれは夢に見ただけのはずで——」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「ご婦人、君はここに朝三時に、半分ショック状態でやってきた。ミッチェルがずばりどこにいるのか、君のちっちゃなポーチの長椅子に横たわっている様子まで説明してくれたよな。そこでいっしょに戻って階段を五階分のぼったんだ、我が職業の名高い無限の注意を活用しつつね。するとミッチェルはなしで、そして君はかわいいベッドにかわいい睡眠薬をお供にして寝ちまったんだ」

彼女はぴしゃりといった。「そうやって芝居がかってなさいよ。そんなにお好きなら。あなたがお供してくればよかったじゃない。睡眠薬なんかいらなかったかもしれないわ——ひょっとして」

「よろしければ一つずつ片付けようじゃないか。そして真っ先に言うべきは、ここにきたとき君が確かに本当のことを言っていたってことだ。ミッチェルは事実、君のポーチで死んでた。だが君がここに来ている間に、だれかがその死体を運びだして、おれが馬鹿を見る羽目になった。そしてだれかがあいつを車まで運び、スーツケースを荷造りして、それを下に下ろした。これはすべて時間がかかる時間だけじゃすまない。ずいぶんと大きな理由があったはずだ。さてそんなことをするのは誰だろう——ポーチの死人を通報するというちょっとした恥を君にかかせないためだけに？」

「まったく、うるさいわね」彼女はドリンクを飲み干してグラスを脇においた。「疲れたわ。あなたのベッドに横になっていい？」

「服を脱ぐならね」

「わかったわよ——脱ぐわよ。もうずっとそれを目指して小細工してきたのよね？ そうでしょう」

「そのベッド、お気に召さないかもしれないぜ。ゴーストが今夜その上でぶちのめされたんだ——リチャード・ハーヴェストっていう雇われ殺し屋にね。本当にひどい暴行を受けたんだ。ゴーストは覚えてるだろ？ こないだの晩に丘の上までつけてきた、あの小さい黒い車に乗っていた、太っちょの男だよ」

「ゴーストなんて人は知らないわ。リチャード・ハーヴェストなんて人も知らない。なぜそんなことを知ってるの？ その人たち、なぜここに——あなたの部屋になんかいたの？」

「雇われ殺し屋はおれを待ってたんだ。ミッチェルの車の話を聞いてからピンときた。將軍その他の偉い人だってピンとくることはある。おれにだってあってもよかろう？ 肝心なのは、それに基づいて行動すべき場合を見極めることだ。今夜はツイてた——いや昨晚かな。直感に基づいて動いたんだ。そいつは銃を持ってたが、おれはタイヤレバーを持っていた」

「まあ、なんておっきくて強い負け知らずのお方なのかしら」彼女は皮肉っぽく言った。「そのベッドでも気にしないわ。いま服を脱げばいいの？」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

おれは近づいて、彼女を引き起こして立たせると揺さぶった。「御託はいい加減にしろ、ベティ。君の美しい白い身体を求めるのは、君がおれのお客じゃなくなってからだ。君が何に怯えているのか知りたいんだ。知らなきゃどうしようもないじゃないか。それを教えられるのは君だけだ」

彼女は腕の中ですすり泣きはじめた。

女が身を守るすべは実に少ないが、その手持ちのすべてを実に驚異的なほど活用するものだ。

おれは彼女をしっかりと抱きしめた。「好きなだけ泣けよ、好きなだけ涙をながせよ、ベティ。どうした。おれは辛抱強いんだ。そうでなかったら——えーちくしょう、そうでなかったら——」

そこまでしか言えなかった。彼女は震えながら身体を押しつけてきた。顔をあげ、おれの頭を引っ張りおろし、おれにキスをさせた。

「他の女がいるの？」彼女はおれの歯の間からささやくように尋ねた。

「昔のことだ」

「でもすごく特別な人？」

「一度ね、ほんのしばらく。だがそれもずっと昔だ」

「奪って。あなたのものよ——あたしのすべてがあなたのもの。奪って」

[24]

ドアを派手に叩く音で目が覚めた。おれはぼんやり目を開けた。彼女があまりにきつくしがみついていたので、ほとんど動けなかった。彼女の腕を優しく動かして、やっと自由になった。彼女はまだ熟睡していた。

ベッドから出て、バスローブを引っかけるとドアに出た。開きはしなかった。

「何の用だ？ 寝てるんだけど」

「アレッサンドロ警部がいますぐ事務所にきてくれと。開けなさい」

「すまんね、無理だ。ひげを剃ってシャワーをあびてとかしないと」

「ドアを開けなさい。グリーン巡査部長だ」

「すみませんねえ、巡査部長さん。とにかく無理です。でも可及的速やかに行きますから」

「女がいるのか？」

「巡査部長、そういう質問は職務権限の逸脱でしょう。すぐに行きます」

彼の足音がポーチから降りるのが聞こえた。だれかが笑うのが聞こえた。「あいつ、すげえ金持ちなんだ。休日には何をしてるんだろうな」という声が聞こえた。

パトカーが走り去るのが聞こえた。おれは洗面所に行ってシャワーを浴び、ひげを剃って着替えたベティはまだ枕に貼りついている。おれはメモを殴り書いて枕に乗せた。「警察に呼ばれた。いかな」と。車の場所は知ってるね。これがキー」

静かに外に出てドアに鍵をかけ、あのハーツのレンタカーを見つけた。キーが差しっぱなしなのはわかっていた。リチャード・ハーヴェストみたいな手合いはキーなんか目もくれない。各種の車のキーを自分で一揃い持っているのだ。

アレッサンドロ警部は昨日とまったく同じ様子だった。いつもそういう様子なのだ。こいつには男魂があり、それも年配の石のような顔をした、おっかない目の男だ。

アレッサンドロ警部はいつもの椅子のほうに会釈してみせた。制服警官が入ってきてコーヒーのカップをおれの前に置いた。その警官は、出がけに小ずるそうにニヤリと笑顔を向けてきた。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「こちらカロライナ州ウェストフィールドのヘンリー・カンバーランドさんですよ、マーロウ。ノースカロライナ州ですね。どうやってここまでたどりついたかは私のあずかり知らぬところですが、でもとにかくやってきた、と。ベティ・メイフィールドが息子さんを殺したとおっしゃるんですよ」

おれは何も言わなかった。何も言うべきことがなかった。おれはコーヒーをすすった。熱すぎたがそれ以外はうまかった。

「ちょっと情報を補っていただけませんかね、カンバーランドさん？」

「こいつはだれだ？」その声は顔と同じくらい陰しかった。

「フィリップ・マーロウという私立探偵。ロサンゼルスから来てます。ここにきてもらったのは、ベティ・メイフィールドがこの人の顧客だからですよ。どうやらあなたは、このマーロウよりもメイフィールドさんについていささか過激な見解をお持ちのようすな」

「おれはあの人について、特に見解なんか持ち合わせてませんよ、警部。ときどき抱きしめるのが好きだけでして。慰められるんですよ」

「殺し屋女に慰められるのが好きか」カンバーランドがおれに呟えた。

「いやあ、殺し屋女とは知らなかったものでね、カンバーランドさん。みんな初耳ですよ。ご説明いただけませんか？」

「ベティ・メイフィールドを名乗る女は——これはあいつの旧姓なんだ——息子リー・カンバーランドの妻だったんだ。わしはずっとこの結婚には反対だった。戦時中の愚行ってやつだ。息子は戦争で首の骨が折れて、脊椎を保護するためにギプスが必要だったんだ。ある晩、あの女はそのギプスを外し息子を扇動して自分を追いかけさせた。不幸なことに、息子は戦争から戻って以来いささか深酒をするようになっていて、しばしば口論もあった。息子はつまずいてベッドの上に転んでしまったんだ。わしが部屋に入ったときには、あの女は息子の首にギプスをはめ直そうとしていた。息子はすでに死んでいた」

おれはアレックスandro警部を見た。「これは録音されてるんですか？」

彼はうなずいた。「一言一句」

「なるほど、カンバーランドさん。続きがあるんでしょう」

「当然だ。わしはウェストフィールドでは大いに影響力がある。銀行も、大手新聞も、産業のほとんども所有しているんだ。ウェストフィールドの人々は友達だ。義理の娘は逮捕されて殺人罪で裁判にかけられ、陪審員から有罪判決を受けた」

「陪審員は全員ウェストフィールドの人たちだったんですか、カンバーランドさん？」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「そうだ。そうでないはずがあるかね？」

「さあ、私めにはわかりかねます⁶⁹。でもワンマン街みたいに聞こえますねえ」

「生意気言うんじゃない、この若造が」

「失礼をばいたしました。続けていただけますか？」

「我が州には特異な法律があつてな。他にもわずかに同じ法律のところはあるらしいが。一般に、被告弁護人は機械的に無罪の宣告判決を求め、同じくらい機械的にそれは却下される。我が州では裁判官が、評決が出るまで自分の判決を留保できるのだ。この裁判官はボケていた。判決を留保したのだそして陪審員が有罪の評決を持ってくると、そいつは長ったらしい演説をして、うちの息子が飲んだくれて激情に任せてギブスを首から外して、妻を脅かそうとしたという可能性を考慮していないと宣言したのだよ。実に大量の遺恨がある状況では何が起きても不思議ではないと言い、義理の娘が本当に自分で主張した通りのことをしていた——つまり息子の首にギブスをはめ戻そうとしていたという可能性を陪審が考慮しなかったと言いおった。だから評決を無効にして、被告を無罪放免にしたのだ。

わしはあの女に、おまえは息子を殺したんだから、地上で安息の地がどこにもないように手配してやる、と告げたんだ。だからわしはここにいる」

おれは警部を見た。警部は何も見なかった。おれは言った。「カンバーランドさん、あなた個人の確信はどうあれ、リー・カンバーランド夫人、おれの知ってるベティ・メイフィールドは、裁判を経て無罪放免となったんです。あなたは彼女を殺し屋女と言った。名誉毀損ですよ。百万ドルの示談となりますよ」

カンバーランドはほとんどグロテスクに笑った。そしてほとんど絶叫した。「この田舎町の三下野郎が。わしのいる街なら、貴様は浮浪者としてブタ箱送りだ」

「百と二十五万ドルで手をうちましょうか。おれはあんたの元義理の娘さんほどは価値がないんでね」

カンバーランドはアレッサンドロ警部のほうを向いて怒鳴った。「ここはいったいどうなっておるんだ？ 貴様らみんなゴロツキ集団か？」

「カンバーランドさん、警察相手に話してるんですよ」

カンバーランドは憤然としていた。「貴様らが何だろうと気にするもんか。汚職警官なんざいくらでもいる」

69 ここと次のせりふ、わざわざ sir がついていて、ここから馬鹿丁寧な慇懃無礼が全開になる。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「ちゃんと確認してからのほうがよろしゅうございますよ——汚職呼ばわりする前にね」アレッサンドロはほとんどおもしろがるようだった。そしてタバコに火をつけて煙を吐き、それ越しににっこりして見せた。

「落ち着いてくださいよ、カンバーランドさん。心肺疾患があるんでしょう。かなり悪い診断ですよ興奮するとお体に障りますぜ。昔、医学を学んだことがありますてねえ。でもなぜかオマワリになっちゃったんです。戦争で道を絶たれたんですかね」

カンバーランドは立ち上がった。あごにツバが垂れている。のどが詰まりそうな音をたてた。「これで終わりじゃないからな、おぼえておれ」とうなってみせた。

アレッサンドロはうなずいた。「警察の仕事でおもしろいのは、どんなことも決して終わりにならないってことでしてねえ。いつも必ず、あまりにつじつまの合わない部分が山ほど残るんだ。あなた私に何をしてほしいんですか？ 裁判で無罪になった人間を逮捕しろとでも？ あなたがカロライナのウェストフィールドで大物だからってだけで？」

カンバーランドは憤然と言った。「あの女には、決して平安を与えてやらんと言ってやったんだ。地の果てまでも追いかけてやる。万人があいつの正体を知るように取り計らってやる！」

「して、その正体とは、カンバーランドさん？」

「わしの息子を殺したのに、とんまな裁判官に釈放された殺し屋女——それがあいつなんだ！」

アレッサンドロ警部は立ち上がった。190センチを越える巨体がそびえ立つ。そして冷たく言った。「失せろって、旦那。あんたみたいなのにはイライラする。これまでいろんな種類のろくでなしを見てきたよ。そのほとんどは、貧乏で馬鹿な場末のガキだ。でも十五歳の不良に負けず劣らずバカで凶悪な、お偉いでっかい要人にお目にかかったのはこれが初めてだよ。ノースカロライナ州ウェストフィールドはあんたの意のままなのかもしれん。そう思ってるだけかもしれんがな。この街じゃあんたはシケモクすら意のままにやできんのだよ。業務執行妨害でパクる前に、とっとと出て行け」

カンバーランドはほとんどよろよろと戸口へ向かい、震える手でドアノブをつかもうとしたが、ドアはもう大きく開いていた。アレッサンドロはその背中を見送った。そしてゆっくりすわった。

「なんとも手厳しゅうございますな、警部」

「心が千々に乱れますでございますよ。私の言った何かで、あの方がご自分のツラを見直すことにでもなったら——まあいっか、どうでもいい！」

「あの手の連中は無理だよ。もう行っていいですか？」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「ああ。ゴープルは起訴しない。今日のうちにカンザス市への帰途につく。あのリチャード・ハーヴェストってやつについては何かネタを掘り起こすが、それが何の役にたつ？ あいつをしばらくぶち込んでも、同じ仕事に使える似たり寄ったりの連中は、百人もいるんだから」

「ベティ・メイフィールドはどうしたらいい？」

「あんたがすでに、どうにかしたんじゃないかという気が漠然とするんだがな」彼はすっとぼけて言った。

「ミッチェルがどうなったかわかるまでは、どうもしない」おれも同じくらいすっとぼけてみせた。

「私が知ってるのは、そいつが消えたってことだけだ。それだけじゃ警察沙汰にはならん」

おれは立ち上がった。お互いに例の視線を交わした。そして外に出た。

[25]

彼女はまだ寝ていた。おれが部屋に入っても目を覚まさなかった。少女のように、音も立てず、穏やかな顔で寝ている。しばらく彼女を眺めて、それからタバコに火をつけて台所に出た。コーヒーを、本ホテル経営陣提供のきれいな超薄手アルミパーコレーターの中で抽出されるよう火にかけると戻ってベッドにすわった。残したメモはまだ車のキーといっしょに枕の上だった。

ゆっくり揺り起こすと、目が空いてまばたきした。

「いま何時？」と思い切り裸の腕をのばす。「まあ、熟睡しちゃったわ」

「服を着る時間だ。コーヒーを淹れてある。警察署にいつてきた——要請を受けてね。君の義理の父親が来ているんだ、カンバーランドさんが」

彼女はガバッと起き上がり息もせずおれを見た。

「アレッサンドロ警部に、しっかりお説教を受けてたよ。君に害を加えることはない。君があんなにビビってたのはその話だったのかい？」

「あの話は——ウェストフィールドで何が起きたかは言ったの？」

「爺さんはその話をしに来たんだ。もうカンカンで、自分ののどを詰まらせそうなほど。それも、何のためなんだか。君はしてないんだろ？ みんなの言ってるようなことはやらなかったんだよな？」

「してないわ」彼女の目がおれをギラリとねめつけた。

「別にやっても、どうでもいいんだけどね——今さら。でも昨晚のことについて、あまり良い気分にはなれなくなるからな。ミッチェルはどうやって勘づいたんだ？」

「たまたま居合わせたか近くにいただけ。まったく、新聞はそのネタで何週間も持ちきりだったのよあたしに気がつくのは何の苦労もなかったはずよ。ここらの新聞には出なかったの？」

「出たはずではあるよ、その風変わりな法的側面だけでも載るはず。でも出たとしても、おれは見逃したようだ。コーヒーがそろそろできたはず。飲み方は？」

「ブラックでお願い。砂糖なし」

「結構。クリームも砂糖もないんだ。なぜエレナー・キングを名乗ったんだい？ いや、言わなくていい。おれがバカだった。カンバーランド爺さんは君の旧姓を知ってるもんな」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

おれは台所に出て、パーコレーターの上部を外し、二人に一杯ずつコーヒーを注いだ。そして彼女の分を持って行ってやった。自分のコーヒーを持って椅子にすわる。二人の視線が合い、二人はまた見知らぬ同士となった。

彼女はカップを脇に置いた。「おいしかったわ。着替えるから向こう向いてて」

「いいとも」おれはテーブルからペーパーバックを取って読むふりをした。何やら探偵の話で、死んだ裸の女が拷問の痕を見せつつシャワーレールからぶら下がっているというのが山場のつもりらしい。その頃にはベティは風呂場に入っていた。おれはペーパーバックを塵入れに投げ込んだ。そのときに都合良くゴミバケツが手近になかったからだ。そして、愛を交わせる女は二種類いるなど思案しはじめた。片方は、実に完全に、まったく己を顧みることなく身を投げ出すので、自分の体のことなんか考えない女性。そして自意識が残っていて、ちょっと隠したがる女性。アナトール・フランスの短編に、ストッキングを脱ぐのにこだわる女が出てきたのを思い出した⁷⁰。はいたままだと娼婦のような気分になるからと言って。その通りだ。

洗面所から出てきたベティは、開いたばかりのバラの花のようで、メイクも完璧、目は輝き、髪は一筋残らずセットされていた。

「ホテルまで送ってくれる？ クラークと話がしたいの」

「あいつを愛してるのか？」

「あなたを愛してるつもりだったのに」

「一夜の気の迷いだ。必要以上に大げさに考えるんじゃない。台所にもっとコーヒーがある」

「もう結構よ。朝食前はね。あなたは恋に落ちたことはないの？ つまり、ある女性と毎日、毎月、毎年いっしょにいたいと思うほどの恋よ？」

「行こう」

「なんでこんな頑固な人がこんなに優しくなれるのかしらね」ベティは不思議がるように尋ねた。

「頑固でなければ生きていけない。優しくなれなければ、生きていく資格がない」⁷¹

70 そんな短編があるのかと検索したり AI くん尋ねたりしたが、ないとの回答。「長いお別れ」でも述べたように、マーロウは実は大して教養はなく、口にするのはすべて聞きかじりなので、ここも「アナトール・フランス」と言ってみたかっただけの可能性は高い。が、もし心あたりがあればご教示たもれ。

71 はい、問題の文。有名な「タフでなければ生きていけない／優しくなれなければ生きる資格がない」を誤訳という人も多いが、文脈的にそんなに外していない。唯一、「タフ」の原文は *hard*。この前の部分でベティは、マーロウを愛している、ずっといっしょにしよう、とほめかしているが、それに対してマーロウがなびかないので、「この頑固者」と言っている。マーロウは、ベティが(おそらく)連続殺人犯だと知っていて、だから彼女に引かれつつ(セックスまでしつつ)哲学として一緒にはなれないのだ。だからここでは「頑固」としたが、その態度を「タフ」と呼ぶことも不可能ではない。ただベティがその前の部分でマーロウを「タフ」と呼ぶのは文脈的につらいので、工夫はある。ここでも「頑固」に「タフ」とルビをふるのもやってみたが、無理があるように思えたのでやめた。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

コートを着るのを手伝ってから、二人で車に向かった。ホテルへの帰り道に、彼女は一言も口をきかなかった。到着しておなじみの駐車場所にすべりこむと、ポケットから折ったトラベラーズチェック 5 枚を取り出して彼女に差し出した。

「こいつをやりとりするのはこれで最後と願いたいね。すりきれてきた」

女はそれを見たが、受け取らなかった。「あなたの料金のつもりだったのよ」といささか鋭い口調で言う。

「ごたごた言うな、ベティ。君から金は受け取れないことくらい百も承知のくせに」

「昨夜のせい？」

「何のせいでもない。とにかく受け取れない。それだけだ。君に何もしてあげていない。これからどうする？ どこへ行く？ もう君は安全なんだ」

「見当もつかない。何か思いつくでしょう」

「ブランドンを愛してるのか？」

「かもね」

「もと恐喝屋だ。ゴーブルを脅して手を引かせるために殺し屋を雇った。その殺し屋はおれも殺す気満々だった。そんなヤツを本当に愛せるのか？」

「女は男を愛するの。その人となりを愛するんじゃないわ。それに、そんなつもりはなかったかもしれないでしょ」

「さよなら、ベティ。精一杯努力したが、それじゃ足りなかったんだな」

彼女はゆっくりと手をのばして小切手を取った。「あなた、どうかしてるわ。これまで会った中でいちばんどうかしてる人よ」。彼女は車を下りて、すばやく歩み去った、いつもながら。

村上春樹は自訳の解説などでこの部分について御託をいろいろ並べて「厳しい心を持たずに生きのびてはいけない」としている。御託はどれもピンとこないが、翻訳としてはそんなに外してはいない(ただしこれ、「生きのびちゃダメですよ」という意味に取れてしまうのがつらい)。田口訳「タフじゃなければここまで生きてはこられなかった。そもそもやさしくなれないようじゃ、私など息をしている値打ちもないよ」は、余計な言葉を足しすぎているし、「タフ」という訳語が工夫なしでわかりにくい。清水訳は「しっかりしていなかったら、生きていられない」で、原文のニュアンスには鈍感。が、どの訳もまちがっているとまでは言えない。

[26]

彼女がロビーを抜けて自分の部屋に上がるだけの余裕を与えてから、おれもロビーに入り、構内電話でクラーク・ブランドン氏につないでくれと頼んだ。ジャヴォネンがやってきてにらみつけたが、何も言わなかった。

男の声が電話に出た。確かにあいつだった。

「ブランドンさん、私のことはご存じないが、今朝いっしょのエレベーターに乗り合わせた者です。名前はフィリップ・マーロウ。ロサンゼルスからの私立探偵で、メイフィールドさんの友だちです。少々お話があるのでお時間いただけませんか」

「君のことは何か聞き覚えがあるねえ、マーロウ。だがちょうど出かけるところなんだ。今晚六時あたりに一杯どうだい」

「ロサンゼルスに戻りたいんですよ、ブランドンさん。そんなにお時間は取らせませんので」

彼は不承不承の声を出した。「わかった。上がってきてくれ」

彼はドアをあけた。でかい、背の高い、とても筋肉質の最高のコンディションの男で、ガチガチでも軟弱でもない。握手は差し出さなかった。脇に立ったので、おれは中に入った。

「一人きりなんですか、ブランドンさん」

「そうだが。なぜ？」

「これから言いたいことは他にだれにも聞かれたくないもので」

「ふん、さっさとやっておしまいにしてくれ」

彼は椅子にすわり、脚を脚台にのせた。ゴールドチップのタバコに黄金のライターで火をつけた。すごいね。

「最初にここにきたのは、ロサンゼルスの方の指示で、メイフィールドさんを尾行して行き先をつきとめ、報告するためでした。その理由は知らされず、その弁護士も知らないと言いましたが、ワシントンの有名法律事務所のために動いているとか。ワシントンDCのことです」

「彼女を尾行したと。それがどうした？」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「そして彼女はラリー・ミッチェルと接触した、あるいはあいつのほうが接触して、何やら彼女のネタを握っていた」

「その時に応じていろんな女のネタを握っていたよ。それがあいつの専門だ」ブランドンは冷ややかに言った。

「でも、もうやりませんよねえ、どうです？」

ブランドンは冷たい無表情な目でおれを見つめた。「どういう意味だ？」

「あいつはもうどんなこともやらない。もはや存在しないんだ」

「ホテルを出て車でどこかへ行ったと聞いたがね。それが私に何の関係がある？」

「なぜ存在しないと知っているのか尋ねませんでしたね」

彼はタバコの灰を、バカにしたような身ぶりで弾き飛ばした。「なあマーロウ。私がそんなのどうでもいいと思っているのかもしれないだろうに。私に関係ある話ができないのなら出ていけ」

「この街で、おれはゴープルって男とも関わり合いになったんですよ、関わり合いと言ってよければね。カンザス市からの私立探偵だと言ってて、それを裏付けるかどうかはわからないが名刺を持っていた。ゴープルには本当にイライラさせられましたよ。どこに行くにもついてきやがる。ミッチェルの話ばっかする。何を求めているのやらわかりませんでしたよ。するとある日、あんたはフロントで匿名の手紙を受け取った。あんたがそれを何度も読み返す様子を見てましたよ。それを受け取った職員に尋ねましたね。職員は知らなかった。あんた、ゴミ箱から空の封筒を拾い出すことまでやりましたね。そしてエレベーターで上がる時も、決して楽しそうじゃなかった」

ブランドンは以前よりすこしくつろいでいない様子を見せ始めた。声にとげが出てきた。

「余計なことに鼻をつっこみすぎたかもな、探偵くん。そう思ったことはないか？」

「くだらん質問ですね。それがおれの仕事なんですよ」

「自分の足で歩けるうちに出てったほうが身のためだぞ⁷²」

おれはそれを笑い飛ばし、それで相手は本当に頭にきた。いきなり立ち上がり、おれのすわっているところに大股でやってきた。

「いいか、この優男。私はこの街じゃちょっとした顔なんだ。おまえみたいなセコい手合いに小突き回されるような人間じゃない。出ていけ！」

「続きを聞きたくないんですか？」

「出ていけと言ったろう！」

⁷² 田口訳、ここでちょっと原文をはずれて独特な処理をしている。努力は買うが、気の利いた台詞合戦みたいになって、ブランドンの怒っている感じがなくなっているのは残念。誤訳ってほどじゃない。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

おれは立ち上がった。「すみませんね。あなたと内密に片づけたいと思ったんですがね。それと、おれがあんたを強請ろうとしてとは思わないでくださいよ——ゴープルとはちがうんだ。おれはとにかくそういう真似はしない。でもおれを放り出すなら——話を聞かないなら——アレッサンドロ警部のところに行くしかない。あの人なら聞いてくれますよ」

ブランドンは、長いことおれを睨みつけて立っていた。すると、何かおもしろがるような笑みがその顔にあらわれた。

「警部なら聞いてくれるってか。それがどうした？ 電話一本で更迭してやれるぞ」

「いやいや。アレッサンドロ警部は無理。そんなヤワじゃない。今朝もヘンリー・カンバーランド相手にタフに立ち回った。そしてヘンリー・カンバーランドは、いつだろうとどこだろうと、相手が自分にタフにふるまうのに慣れている男じゃない。警部はちょっとした見下す台詞を二言三言で、カンバーランドをほぼ完落ちさせた。そんな男を黙らせられると思うって？ 考え直したほうがいいなあ」

ブランドンはまだニヤニヤしていた。「まったく。昔は君みたいなやつもいたもんだ。ここに長居しすぎたせいで、いまだにそういう連中が生産されているのを忘れてしまったみたいだな。わかったよ。聞こう」

彼は椅子に戻り、ケースからゴールドチップのタバコをもう一本取りだして火をつけた。「いるかね？」

「いや結構。あのリチャード・ハーヴェストってクソ野郎は——ありゃまちがいだったと思いますね。あの仕事には力不足だった」

「力不足もいいとこだよ、マーロウ。まったくもって。安手のサディストでしかない。現場を離れるとそうなる。判断力が鈍るんだ。指一本触れなくなっただって、ゴープルを震え上がるくらい脅せたはずなんだ。さらにあいつを君んとこに連れて行くとは——まったくお笑いもいいとこだ！ 素人めが！ いまのあいつを見て見ろよ。もう何の役にも立たない。鉛筆でも売るしかない。一杯やるかい？」

「あんたとはそういう関係じゃないもんでしてね、ブランドン。最後まで話をさせてください。真夜中に——おれがベティ・メイフィールドと接触した夜、あなたがミッチェルをグラスルームから追い出した夜です——それとあの追い出し方は見事だったというのも言っておきましょうかね——ベティがランチョ・デスカンサードのおれの部屋にやってきました。確かあなたの物件の一つだったはずですね。ミッチェルが、自分のポーチの長椅子で死んでると言うんです。それを始末してくれる代償として、いろいろ報酬をぶら下げてくれましたよ。ここに戻ってみると、ポーチに死人なんかいない。翌朝、夜の車庫係の話だと、ミッチェルはスーツケース九個持って車でどこかへ行ったとのこと。部屋

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

代と、さらに一週間分の宿泊料を前払いして部屋は押さえてあるとのこと。同日、その車がロス・ベニヤスキートス峡谷に放置されているのが見つかった。スーツケースもなし、ミッチェルもなし」

ブランドンはおれをじっと見つめたが、無言だった。

「なぜベティ・メイフィールドは、何を怖がっているのかおれに話すのを恐れていたのか？ 彼女はノースカロライナ州ウェストフィールドで、殺人罪で有罪となり、そしてその判決が覆されたんですあの州では判事にその権限があって、その権限が行使されたためです。しかし彼女が殺した罪を問われていた亡夫の父、ヘンリー・カンバーランドは、どこへ行こうとつきまとって、生活をめちゃくちゃにしてやると告げた。さて、いまやポーチに死人がいる。そしてオマワリが捜査すればその身の上話すべてがバレる。彼女は怯えて混乱してる。ツキも二度目はないと思うだろう。なんといっても陪審員は一度有罪にしてるんだから」

ブランドンは静かに言った。「首が折れていた。うちのテラスの端から落っこちたんだ。彼女があいつの首を折ったはずはない。こっちに出ておいで。見せてやろう」

おれたちは、広い日当たりのいいテラスに出た。ブランドンは端の壁のところにまで行進して、おれはそこから見下ろしたが、その真下にはベティ・メイフィールドのポーチの長椅子が見えた。

「あまり高い壁じゃないですねえ。安全なほどの高さはない」

ブランドンは冷静に言った。「その通りだ。さてあいつがこんなふうに立っていたとしよう」——と彼は壁に背を向けて発ったが、その壁のてっぺんは太もも半ばの少し上までしかきていなかった⁷³。そしてミッチェルも背の高い男だった——「そしてベティを煽って近くにこさせ、つかもうとして、彼女はそれを強く押しのけて、するとあいつは転落。そしてたまたま——まったくの偶然で——首が折れるように落下した。まさに彼女の夫が死んだとおりのやり方で。パニックになったからって、彼女を責められるかね？⁷⁴」

「だれも責めたつもりはないんですがね、ブランドン。あんたですら」

彼は壁から離れて海を見渡し、しばし沈黙した。そしてこちらをふり返った。

「責める理由がない。ミッチェルの死体をうまく片づけただけだ」

「おやおや、いったい全体どうやったら私にそんなことができるのやら」

73 原文は wall だが、そんな低いものを「壁」って言っているのか。せいぜいパラベットじゃないのか。まあパラベットも立ち上がり壁だから壁だと言われりゃそれまでだが、その直前の「壁に背を向け」とか、非常にミスリーディングだろ。背まで届かないんだもん。他の訳者もそれは気になるようで、「仕切り壁」「低い壁」としている。清水訳はそれを「手すり」にしている。壁では落ち着かなかったせいだろうが、太ももまでしかない手すりってなおさら変では？ 原文でも読んでいてざらつくところなので、ここはそのままにした。

74 つまりミッチェルとベティが、なぜかこのブランドンの部屋にいて、そこで悶着があり、階下のベティのポーチに転落したと主張してるわけ？ まったくつじつまがあわない。その他この謎解きはすべて支離滅裂。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「あなたはいろいろやっているが、釣りもやる。たぶんまさにこのマンションにも、長く強い釣り糸があるだろう。あなたは力も強い。ベティのポーチに降りていって、その釣り糸をミッチェルの腕の下に通し、あいつを茂みの後ろの地面に下ろすだけの力はある。そして、すでにポケットから抜いておいた鍵を使ってあいつの部屋に行き、すべて荷造りして、エレベーターか非常階段で車庫まで下ろしたんだ。それには三往復いる。あんたには大したことじゃない。そしてあいつの車を車庫から出せばいい。たぶん夜警がヤク中なのをあなたは知っていたし、それをあなたが知っていると思ったら彼が口を割ったりしないのも知っていたんでしょ。これは深夜過ぎだ。もちろん車庫係はウソの時間を告げた。そうすれば、あなたは車をミッチェルの死体に思いっきり寄せて、車内に死体をぶちこみロス・ペニャスキートス峡谷まで運転していける」

ブランドンは苦々しげに笑った。「で、私はロス・ペニャスキートス峡谷で車と死人とスーツケース九個を抱えてるわけか。そこからどうやって出てくるんだ？」

「ヘリコプター」

「だれが操縦するんだ？」

「あなただ。まだヘリコプターは大したチェックをしないが、まもなくするようになるでしょうね、ますます数が増えてますから。事前に手配して、ロス・ペニャスキートス峡谷に一機よこさせて、その操縦士はだれかに拾わせたのかもしれない。あんたのような地位の人間なら、ほとんどなんだってできますからね、ブランドン」

「その後は？」

「ミッチェルの死体とスーツケース群をヘリに詰め込んで、海に出て海面近くにホバリングさせ、そして死体とスーツケースを捨てて、そのままヘリコプターのきたところまで戻ったんだ⁷⁵。きっちり仕上げた見事に仕組んだ仕事ってわけだ」

ブランドンは大笑いしてみせた——いささか大げさすぎる。無理に笑っているような響きだ。

「出会ったばかりの女のために、そこまでのことをやるほどのバカだと本当に思ってるのか？」

「うんうん⁷⁶。それはどうかな、ブランドン。自分のためにやったんだろう。ゴーストを忘れてる。ゴーストはカンザス市から来た。あんたもそうだったろ？」

「それがどうした？」

75 もとの操縦士もあとから拾わせるより、帰るついでに乗せてけばすむんじゃない？

76 Uh-huh. 田口訳は「ああ」だけど、これはその通りという意味ではない。「その話ね」というニュアンスのただの合いの手。だってこの先の発言は、それが女だけのためじゃない、というのを述べているんだから。村上春樹「そこだよ」はうまく処理している。田口も村上訳を参考にするならこういうところを参考にしてほしい。清水は……当然無視。なかなかの見識。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「いや別に。ここが終点。だがゴープルは、旅を楽しみにここまで出てきたんじゃない。そしてミッチェルを探してたわけでもない、もともと知り合いだったなら別だけどね。そして二人は話をするうちに、お宝を掘り当てたと思ったわけだ。そのお宝とはあんたのことだ。だがミッチェルはおっ^ち死んでゴープルは一人でやろうとして、それネズミが虎に立ち向かうようなもんだ。だがあんたとしてはミッチェルが自分のテラスからどう落ちたのか説明するような羽目になりたいか？ 自分の経歴を調べられるようなことになりたいか？ 警察にしてみりゃ、あんたがミッチェルを壁から投げ落としたと考えるのがいちばん自然だろ？ そして警察がそれを証明できなくても、エスメラルダではもうあんたも立場がなくなっちまうよな？」

ブランドンはゆっくりとテラスの端まで歩き、戻ってきた。おれの真ん前に立ったが、その表情はまったくの白紙だった。

「君を殺させてもよかった。だがここで暮らしてきた年月で何やら奇妙なことだが、もうその手の人間じゃなくなったみたいなんだ。だから君に降参するよ。自衛する手だてもないよ、君を殺させる以外には。ミッチェルは最低最悪の男で、女を強請るような奴だった。何から何まで君の言う通りかもしれないが、私は後悔なんかしない。そして信じてくれよ、私がこんなヤバい橋を渡ったのは、ベティ・メイフィールドのためだったという可能性もないわけじゃないだろうに。君がそれを信じてくれるとは思わないが、可能ではある。さあ取引といこう。いくらだ？」

「いくらって、何が？」

「警察にいかない代償」

「すでにその値段は言ったでしょう。ゼロ。ただ何が起きたか知りたかっただけです。だいたいは合っていましたかね？」

「凶星だよ、マーロウ。細部に到るまで。まだ捕まる可能性はある」

「かもしれませんね。じゃあ、おれはもうあんたの前からは消えることにしますよ。さっきも言ったが——ロサンゼルスに戻りたいもんで。だれかが安手の仕事をくれるかも。おれも喰ってかなきゃならんのでね、いやどうかな？」

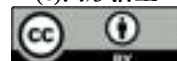
「私と握手してくれるかい？」

「いいや。あんたは殺し屋を雇った。だからあんたは、おれが握手する輩の外にいる人になったんだあの直感がなければ、今日おれは死んでたかもしれない」

「あいつにだれも殺させるつもりはなかったんだ」

「雇ったのはあんたですよ。さようなら」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)



[27]

エレベーターを出ると、どうもジャヴォネンはおれを待っていたらしい。「バーにきてくれ。話がある」

二人でバーに行ったが、この時間はほぼ無人だった。角のテーブルについた。ジャヴォネンは静かに言った。「私がろくでなしだと思ってるんだろう、え？」

「いいや。仕事だろ。おれも仕事だ。おれの仕事があんたには苛立たしかった。おれを信頼しなかった。だからってろくでなしってことにはならんよ」

「ホテルを守ろうとしたんだ。あんたはだれを守ろうとしてる？」

「その時によりけりだなあ。よくあるのは、だれを守るかわかっているときには、どうやって守ればいいかわからないってことなんだ。それで右往左往してあちこちに面倒かける。よくあるのは、おれじゃまったく不十分だってことでね」

「そうらしいな——アレッサンドロ警部から聞いたよ。立入りすぎかもしれんが、こういう仕事だといくらぐらい稼げるんだ？」

「うん、今回は普通の路線とはちょいとはずれててね。実のところ、一銭の稼ぎにもなってない」

「ホテルが五千ドル支払う——ホテルの利益を守ってくれたことで」

「ホテルって、つまりクラーク・ブランドンさんがってことか」

「だろうな。親玉だから」

「いい響きだなあ——五千ドルか。実にいい響きだ。ロサンゼルスへの道すがら、その響きに耳を傾けることにするよ」おれは立ち上がった。

「マーロウ、小切手はどこに送ればいい？」

「警察救済基金ならその金をありがたく頂戴してくれるだろうよ。警官が困ったことになったら、その基金から借金しなきゃならない。うん。警察救済基金なら大いに感謝してくれる」

「でもあんたには送らないでいいのか？」

「あんたは対敵諜報部隊で少佐だったよな。私服を肥やす機会はいろいろあったはずだ。なのにいまだに働いてる。じゃあおれはそろそろおいとまするよ」

「おいマーロウ、あんたはとんでもないバカやってるぞ。言っておきたいが——」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「自分に言っとけよ。その観客は逃げないから。それと、グッドラック」

おれはバーから出て車に乗った。デスカンサードまで運転して荷物を拾い、事務所に立ち寄って料金を支払おうとした。ジャックとルシールがいつもの場所にいた。ルシールがにっこりしてくれた。

ジャックは言った。「お代はいただきません、マーロウさん。そう指示されています。そして昨晚についてはお詫び申しあげます。まあそんな謝罪に大した意味もないでしょうが、ね⁷⁷」

「いくらだったの？」

「大した額じゃありません。25ドルってところですか」

おれはカウンターに金を置いた。ジャックはそれを見て顔をしかめた。「お代はいただかないと申しあげましたよ、マーロウさん」

「なんでだい？ 部屋を占有しただろうに」

「ブランドンさんが——」

「いつまでも話がわからんやつってのもいるんだな、まったく。お二人に会えて光栄だったよ。これの領収書をいただけないかな。経費控除できる」

77 They're not worth much. ランチョ・デスカンサードとして謝罪する、とその前に述べているので、その謝罪なんてあまり意味ないですよ、ということ。そんなわかりにくくないと思うんだが、清水訳「しかし、たいした連中ではなかったんでしょう？」は全然見当違い。村上「大したことはなかったんですよ」田口「大事にはならなかったんですよ？」も同じ。謝罪しといて「でも大したことじゃないっすよね」ってホテルが言えると思う？

[28]

ロサンゼルスに戻るのに 150 キロは出さなかった。まあときどき数秒だけ 160 キロは出したかもしれない。ユッカ街に戻っておれはオールズモビルを車庫に入れて、郵便受けをつついた。何もなし。いつもながら。長いセコイア材の階段を上がり玄関の鍵を開けた。何もかも同じ。部屋はむさくるしく退屈で愛想がない。いつも通り。窓をいくつか開けて台所でドリンクをミックスした。ソファにすわって壁を見つめた。どこへ行っても、何をしても、いつも戻ってくるのはこれだ。無意味な家の無意味な部屋にある何もない壁。

ドリンクに口もつけず脇のテーブルに置いた。これはアルコールで治るもんじゃない。どんなものでも治りやしない。だから何も求めない、硬直した内なる心だけ。

電話が鳴り始めた。受話器をとってうつろに言った。「マーロウですが」

「フィリップ・マーロウ様ですか？」

「そうだ」

「パリからの国際電話です、マーロウ様。しばらくしたらかけ直しますので」

おれは電話をゆっくりおいて、たぶん手がちょっと震えていたと思う。車を飛ばしすぎたか、寝不足か。

その通話は一五分後につながれた。「発信元のお相手が電話口に出ておいでです。何か困難があったら、交換手にすぐ合図なさってください」

「リンダよ、リンダ・ロリング。覚えてるわよね、ダーリン」

「忘れられるもんか」

「元気？」

「くたくた——いつもながら。ちょうどすごくきつい種類の事件を終えたところでね。そっちはどうだい？」

「寂しいの。あなたがいなくて寂しい。忘れようとしたのよ。でも忘れられない。あたしたち、すばらしい愛を交わしたわよね」

「一年半も前のことだよ。しかも一夜だけ。何といえいいのやら」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「あたし、あなたに操を立ててきたのよ。なぜだかわかんない。男なんかいくらでもいるのに。でもあなたに操をたててきたの」

「おれは君に操をたててこなかったよ、リンダ。二度と君に会えるとは思わなかった。おれに操を立ててほしがってるなんて知らなかった」

「そんなこと思わなかったわよ。今も思ってない。ただ愛してるって言いたかっただけ。結婚してって言いたい。半年も保たないって言ったわよね。でも試してみましょうよ。ひょっとすると永遠に続くかもしれない。ねえお願いよ。求める男を手に入れるのに、女に何をさせようってのよ」

「さあねえ。そもそも彼女がそいつを求めているってなぜわかるんだか。おれたちは住む世界がちがうんだ。君は金持ち女で、世話を焼かれるのになれてる。おれはくたびれたインチキ野郎で、将来も怪しいもんだ。君のお父さんはおそらく、おれにそんな将来すらないように取り計らうだろう」

「あなた、お父様なんか恐れてないでしょうに。だれも恐れない。ただ結婚が怖いだけでしょ。お父様は、男を見ればその真価はわかるのよ。ねえお願い、後生だから。リッツにいるのよ。すぐ航空券を送るわ」

おれは笑った。「おれに航空券を送るだって？ 見損なうなよ、そんな男じゃない。おれのほうが君に航空券を送るよ。そうすれば君が考え直す暇もできる」

「でもダーリン、航空券なんかあたしに送ってくれなくていいのよ、あたしには——」

「うん。君には航空券五百枚買えるほどの金がある。だがこいつはおれの航空券になる。受け取るかそうでないなら来ないでくれ」

「行くわよ、ダーリン。行くわ。抱きしめて。ぎゅっと抱きしめて。あなたを自分のものにする気はないの。だれもそんなことは決してできない。ただあなたを愛したいだけ」

「おれはここにいるよ。いつだって」

「抱きしめて」

通話がカチリと切れ、ブーンという音がして、そして回線が死んだ。

ドリンクに手をのばした。空っぽの部屋を見回した——だがもはや空っぽではなかった。そこには声があり、背の高いすらりとした美しい女性がいた。寝室の枕には黒髪があった。しっかり身体を押しつけてくる女性の、柔らかに優しい香水があった。その唇は柔らかに従順で、目は半ば閉じられている。

電話がまた鳴った。「もしもし？」

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

「クライド・アムニー、弁護士だ。君からは満足のいく報告が何も来ていないようなんだが。君のお楽しみのために支払いをしてるわけじゃないんだぞ。活動の正確にして完全な説明をいますぐ提出したまえ。エスメラルダに戻ってから君がずばり何をしていたのか、詳細に報せるよう要求するぞ」

「ちょっとした静かな娯楽に興じてたんですよ——自費でね」

彼の声はきつい金切り声にまで張り上げられた。「すぐさま完全な報告書を要求するぞ。さもないと、君の免許剥奪を手配してやるからな」

「いっちょご提案なんですがね、アムニーさん。いい加減その口閉じやがれって⁷⁸」

息が詰まったような怒りの声がしたがそのまま電話を切った。ほぼ即座に、電話がまた鳴り出した。だがほとんど聞こえなかった。あたりには音楽が満ちていたのだ。

おしまい

78 Kiss a duck. すごく用例が多いわけではないがSTFUの意味で使われることもあるので、ここではこういうふうにしておいた。清水訳「あひるに接吻しに行ってらっしゃい」はあまりに直訳、村上訳「自分のヘソでも舐めていたらいかが」は、よくわからんねえ。田口「へらず口は当分ケツに突っ込んでおくことだ」は、うるさい、という意味を出しているのでもあまあかなあ。が、ここははっきり「黙れ」という意味が必要なわけではなく、なんかアムニーにクソ食らえと言いたいだけなので、それっぽい感じであれば何でもいい。

訳者あとがき

1. はじめに

本書は Raymond Chandler, *Playback* (1958) の全訳だ。

さて、*Playback* は 1958 年刊だが、その後編集者のギトリン兄弟だか親子だかが、1986 年に著作権を更新。アメリカでは 1978 年以前の著作は、著作権発生＝刊行から 28 年以内に更新申請することで著作権が発表から 95 年までのばせるためだ。『かわいい女』(1949) でも、ヘルガ・グリーンが 1976 年に著作権を更新している。いずれも、その 28 年のギリギリ近くで更新している計算になる。日本の著作権/翻訳権は仕組みが別なのでこれは影響しない。

このヘルガ・グリーンは、本書の献辞に名前が挙がっている「ヘルガ」だ。もともとこの献辞には「この二人がいなければ本書は決して書けなかったであろう」という追加の文があり、邦訳の清水訳にはこれが残っている。ただしチャンドラー自身がかなり早い時期にこの部分を削除しており、現在の版には献辞のこの部分はない。もう一人のジーンはチャンドラーが妻と死別してから、本書初期の執筆と生活のたてなおしに貢献した秘書ジーン・フラカッセ。献辞を削ったのは、この両者とのチャンドラーの関係変化のせいとか、チャンドラー自身がこの作品を気に入っていなかったせいとか、憶測はいろいろある。

2. 本書の出来の悪さについて

本書は、レイモンド・チャンドラーが生前に書き上げた、フィリップ・マーロウもののハードボイルド最終作となる。続編は一応書いていたが、未完に終わっている。そして世間的な評価からすると決して大傑作というわけではない。『長いお別れ』の後ではすべて見劣りする、というのはいたしかたないとはいえ、やはり全体にあまり書き込まれておらず、書き流した印象はぬぐえない。チャンドラー自身も、決して本書に満足していたわけではないようだ。

訳者も同感ではある。まず大きな話として、話の中で何をしているのか意味不明の部分がやたらにある。エスメラルダ市とヘルウィグ家の来歴を延々と説明するだけの第 21 章は、いったい何のために

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

ここにあるのか？ 何か重要なことを言っているとマーロウが冒頭に言うので注意していたが、ここで述べられていることは前にも後にもまったく関係しない。ものすごく長い17章でナントカ四世がひたすら説明ネームをしゃべくり、完全にストーリーから浮いた神学談義をするのも同様。おそらく『長いお別れ』がもともと、殺人の舞台となるゲートッド・コミュニティもどきの空疎な偽善ぶりを描きたかったのと同様に、本書もエスメラルダという街の成立と虚飾を描きたかったのかもしれない。その中で、街の来歴や神学談義も役割があったんだろう。だがそれがどこにもつながらず放り出されてしまう。

人物的にも、ホテル探偵ジャヴォネンは、マーロウと何やら対立しているはずで、警部にもたしなめられているし、最後の和解も感動的なんだが、全然大した対立はない。17章で、変な詮索するな、銃をちらつかせるなと怒られるだけ。20章で、すごく悲劇的に描かれる駐車係の自殺も、本筋と何も関係ない。それを聞かされたベティ・メイフィールドが取り乱してみせるが、彼女はその男を見てもいないし、騒ぐ理由なんか何もないのだ。明らかにあれは、もうちょっと彼が何かを知っていて、それが口封じで殺されたといった設定が予定されていたんだが、まともらずに投げ出したのだろう。

そうしたミステリー的な設定に関する部分もぐだぐだ。これまでの作品だってつじつまあわない部分はあったが、本書はそれがかなりひどく、説明にもなっていないご都合主義は本当にその場の思いつきレベル。突然何の脈絡もなく持ち出された釣り糸だのヘリコプターだのには、いささかのけぞってしまいましたよ。もうちょっと伏線張ろうよ。せめて男が釣りをしている場面くらいどっかに入れといたら？

翻訳に際しては、少なくともぼくは各種の描写や設定が、何のためにそこにあるのか、というのに気を使っているつもりだ。さらに『長いお別れ』では、その書きぶりの随所に見られるこだわりについてあれこれ指摘した。本書でも、たとえば具体的なモノですべてを描くのはかわらないのだが、それが十分に練った描写の必然として使われているわけではない。思いついたあらすじをざっと並べただけにすら見える。描写が詰められていないために、モノが並んでいるだけという密度の低い印象があるのだ。

そして、それをごまかすため、という失敬ながら、それで話を進めるためにエロに頼ろうとする尾行相手のベティ・メイフィールドに、深い理由もなく業務指示も何も無視していきなり迫り、いきなり見え透いた嘘のあげくに死体処理を依頼されていそいそ出かけていき(真相を知るためだと後で言ってるが、やばすぎでしょ)、その後全編でいちゃついたあげくにヤっちゃったり、特に深い必然性もなしに依頼主の秘書と懇ろになったり。マーロウがもてる男なのはいいんだが、これまではもう

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

ちょっと規律や自制があり、女性に対してもやせ我慢を重ね、汚い社会への恨みを口走りつつも犯罪者に対する一線は維持していたように思う。それがハードボイルドの肝じゃないの？

本書に登場する女性関係でいうなら、以前に訳した『長いお別れ』でいちばんのお気に入りにはリンダ・ロリングだったので、彼女が再登場するだけで、本書の評価は少し甘くなる。が、その登場の仕方があまりにとってつけたようだ、という苦言もあちこちで見かける。それはまあ、おっしゃる通りではある。ところどころ彼女の思い出に触れている部分はあるが、やっぱ唐突すぎ。

3. 余談：本書のエロ

それで思い出したこと。チャンドラーは昔読んだのにまったく何も覚えていない、と『長いお別れ』のあとがきに書いた。だがこの『プレイバック』だけは記憶が残っているのを、訳しつつ思い出した。実は中学時代に色気づいて学校の図書館でエッチな本をいろいろ探して、『千夜一夜物語』とか五木寛之『青春の門』とかをつまみ食いする中で、007とかハードボイルドとかいうのはムフフな場面がいろいろあるらしいというのを聞きつけて、赤い早川ミステリ全集のイアン・フレミングやレイモンド・チャンドラーの巻も読んだ。そこにこの『プレイバック』も収録されていたのだ。

もちろんそういう場面だけ漁ってみたが、いまいちお上品で、お目当てのストレートな描写がなくてがっかりしたような。だがその巻に収録された三作品(『大いなる眠り』『長いお別れ』『プレイバック』)の中で、エロ目当ての中学生がいちばん満足したのは、この『プレイバック』、特にその13章だった。こういう露骨な描写(あくまで相対的に、だが)はほぼここしかないのだもの。ここは何度も読んだ。

が、一方でこれは、よくわかんない部分でもあった。ヴァーミリエ嬢がマーロウとセックスをした翌朝に、どんな相手とも完璧なセックスは一回しかあり得ない、だからあんたとは二度と会わない、と宣言するところ。中学生は彼女が何を言ってるのかわからず、オトナってのはむずかしいんだなあとか首をかしげたのを、今回訳しながら改めて思い出した。本書はそういう青春の甘酸っぱい思い出も少しある。

ちなみに、いま読んでもぼくはこの女の主張がさっぱりわからない。オトナってのはむずかしいんだねえ。一回よかったんなら何度もやったら？ 常に完璧ばかり求めると人生損するよ？ が、ぼくより経験豊富な読者諸賢なら、ヴァーミリエちゃんの言うことも深くうなずけるのかもしれない。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

ついでにその後、富士見ロマン文庫(文庫本の黒い棚)やフランス書院のエロ小説が出まわり、また川上宗薫とかの新書を立ち読みするのを覚えたせいで(ついでにビニ本や自販機本の存在も知った。当時はまだマジックの陰部すみぬりの時代だった)、変な小説の乏しいエロシーンを探すようなまねはもう不要になったのだった。

4. 既訳について

さて本書の既訳は2025年時点で4種類ある。清水俊二訳(1959、その後何度か手を入れている模様)、村上春樹訳(2016)、田口俊樹訳(2024)、市川亮平訳(2024)だ。このうち前者三つの問題点については、ほぼ『長いお別れ』と同じ。清水俊二は、ちょっとむずかしいと勝手に削除してしまうが、それにより文がすっきりしてテンポがよくなっている。村上春樹訳は、本書が『長いお別れ』ほど凝った原文ではないため、変なポエム翻訳をでっちあげる余裕/必要性もなく、おかげでそこそこ忠実な普通の訳ができているが、ほのめかしや俗語表現の無理解は相変わらず。田口俊樹訳も、原文の平板さのためあまり目新しさは出せていないうえ、『長いお別れ』と同じく村上春樹訳のまちがいがあちこちでまったく同じ形で残っている部分が多い。参考にするのはよいことだけれど、やっぱ自分でもきちんといろいろ調べるべきじゃないだろうか⁷⁹。

そして本書については、上であげた本書の欠点/特徴、つまりお手軽なエロに走っているのが、翻訳のできに大きく(悪い意味で)影響している。三人とも、立派で上品な紳士だからなのかもしれないけれど、エロい場面のほのめかしやちょっとしたヒントに鈍感すぎて誤訳ばかりしているのだ。

4章の後半にベティ・メイフィールドがラリー・ミッチェルにハニトラを仕掛け、その最後で二人はキスして男は「もう一回キスさせろ」と言ってる。ところがみんなそこで、男が何やら酒を飲みたがる話にしちゃう。気に入った女がかすかに誘う様子を見せて、強引にキスしたらほぼなすがままで、お食事もおっケーだから今は支度させて、と自分の腕の中で甘い声で言ってる。その場面で「最後にもういっちょ」というのは、はい、じゃあお酒飲んで出直しますねー、という話にはならんだろ。もういっちょキスさせろ、だろ。

また7章冒頭でホテルのフロントの女子が、ナンパされたのを得意げに語ったときの、ボーイフレンドの嫌味もとらえられていない。既訳はどれもGFがナンパをはねつけたと解釈してるが、はねつけ

⁷⁹ 市川亮平訳は、目は通した。個人が趣味でやった翻訳の自費出版らしく、ここで他のプロの訳者と並べて論評するレベルではないが、楽しそうだし、好きがこうじてここまでやる熱意はすばらしい。

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

てくれたんなら BF としては喜びこそすれ、嫌味言う必要ないじゃん。まんざらでもない様子でその話を繰り返すから、嫌味の一つも言うんだろ。その嫉妬交じりのほほえましさ、わかってやれよ。

その他の細かい台詞もまったく理解できていない。ホテルの部屋の作り、ツイン部屋のベッド構成当時のいろんな俗語表現についても壊滅状態。何もしないで暇をつぶすという build muscle を文字通りに訳し、婚外交渉が違法だった時代の建前と本音の使い分けの説明も無視。トラベラーズチェックのサインをめぐる話も無視。三相 200V 電源の意味を理解しろというのは、普通の翻訳者には酷なのかも知れないが、でもそれが仕事でしょうに。それが何を意味しているかは調べて伝えようよ。

いずれも、この話自体を歪めたりわからなくしたりするようなものではない。220V コンセントの意味がわからなくても、マーロウの活躍は理解できる。が、だからそれでいいんだということにはならない。細かい部分はすべて、マーロウの見る世界、考える推理その他すべてに少しずつ影響しているそれをとりちがえることで、話も少しずつつまがわなくなるのだ。本書はもちろん、原文の時点でつまのあわない部分は多いが、だからといってそれを増やしていいわけじゃない。原文の伝えたいことは、なるべく忠実に伝えよう。それが翻訳の仕事なんだから。

5. この訳について

既訳のそうした欠点は当然ながら、この訳では直した。TC の使い方も電源電圧の意味もきちんと説明しているし (電気工事士を取っておいてよかったなあ)、エロいほのめかし、男女のかけひき、そういうのもしっかり意味を捉えて反映しているつもりだ。おかげで訳文のムフフ度も 2 割増しくらいにはなっているつもり。この訳文なら中学生の山形君ももどかしい思いをすることなくエロを堪能……はできなかつただろう。もともとそれほど露骨なエロがあるわけではないので。少ないのが 2 割増しでも、それほどありがたみはない。フランス書院のトー・クンのシリーズに比べればかわいいもんだそれでも、ちょっとは印象はちがったかもしれない。

あと、ぼくは古い言い回し保存協会の人間なので、本書ではなるべく古い表現を多用している。作るのかわりに「こしらえる」とか、誘いをかけるのを「コナかける」とか、たくさんを「しこたま」とか、蓮っ葉とか、「あばよ」「かわいこちゃん」とか、しょうがないを「せんない」とか。チャンドラー作品の舞台はせいぜい 1950 年代初頭まで。本書の田口俊樹訳の解説で、堂場瞬一は清水俊二訳の古さ (女性が「～ですわ」と話すとか) を問題視している。それはまあわかる。何年かごとに新しい

レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

訳があるのは望ましいという彼の主張も、もっともだと思う⁸⁰。が、なんでも新しくすればいいというものではない。原作の時代がかった感じもすこし残さないといけない。そしてそれに使えるツールも、がんばって残さない。

もはや「常に」という意味の「ひねもす」はさすがに死語だ。Twitterでは、CDを焼くというのが古くさい変な表現としておもしろがられ、書類のコピー取るのを「焼く」という表現はまったくちんぷんかんぷんだ。そうそう、この「ちんぷんかんぷん」という表現も、たぶんもうあまり使われなくなっていると思う。

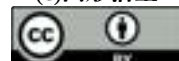
それに対して「最近の若いもんは」とグチったり、「昔はの、テレビは白黒でな」とか「チャンドラーの頃はの、カラー写真なんてものはなかったんじゃよ、だから写真と言えば白黒なんじゃ」とジジババめいた思い出話をするのもいいんだが、表現はがんばれば寿命をのばせる。不自然ではない文脈でなるべくがんばって使ってあげることで、わずかなりといえども表現のバリエーションは温存できる。作家とか翻訳者とか、文を作る人間は、そういう形でも言語の豊かさに貢献できるし、そういう努力をすべきだし、それが彼ら(そしてぼく自身)の仕事だと思うのだ。

6. おわりに

というわけで、ふと思いついて翻訳開始したのが2025年12月末、全訳完成が2026年1月6日。原文が『長いお別れ』に比べてはるかに短い上、書きぶりもあまり凝っていないので、所要時間もずっと短い。が、腐ってもチャンドラーではあり、細かい細工はそこそこあるので、AI翻訳で一気にあげるわけにはいかない。本書はすべて人間が一からやっており、AIには2種類ある献辞の来歴と、各種の古い俗語表現を調べてもらっただけである。

まちがいはないとは思っているが(この手のやつで「いろいろまちがいあるはず」とか殊勝ぶって謙遜してみせるのが、ぼくはかなり嫌いなのだ。まちがいあると思ってるなら、自分でしっかり確認して直せよ!) もちろんかんちがいや見落としはあるだろうし、それ以上に変換ミスや誤字脱字はいろいろあるはず。何かお気づきの点があれば、是非ご一報いただきたい。せつかく無料で全訳に、

80 が、この訳で指摘したとおり、田口訳は村上春樹訳に比べてぜんぜん改善になっていない。多くの部分でむしろ改悪になっている(その村上訳も、清水訳から改悪された部分も多い)。だから時代ごとに訳を更新すべき、という堂場瞬一の主張の説得力も揺らいでいるのは困ったものだ。堂場は、自分は村上春樹訳を読んでいないとうそぶいて、この点に触れずに逃げている。だが、解説を書いてお金をもらうのであれば、そしてそこで翻訳の改善について何か言うのであれば、そのくらいの手間はかけるのが職業倫理ってもんではありませんか? ちなみに彼が清水訳の問題点としてあげた第1章の「クリスチャン・ディオールですわ」のところ、田口訳はそんな口調以前のとてもないまちがいをしているが、それについては何も言及なし。田口訳にちゃんと目を通したんだろうか?



レイモンド・チャンドラー『プレイバック』(1958)

既存訳の添削まで提供したんだからさあ、そのくらい協力してくれたっていいではありませんか。なにとぞよろしく。

ちなみに、あとチャンドラーで翻訳権の不安なしに訳せるものといえば、『かわいい女／リトルシスター』(1949)だけとなる。まあ気が向けば、ね。では。

2026 年 1 月 6 日 アブジャにて
(予定は変わったがそういうことにしておく)
山形浩生 (hiyoril3@alum.mit.edu)

付記

大量の変換ミスその他のご指摘を大西誠様よりいただいた。ありがとうございます！！

Version History

2026.01.06	V1.0	一通り完成、公開.
2026.01.07	V1.01	大西誠氏による多くの変換ミス指摘を修正, 改訂履歴追加.
2026.01.10	V1.02	多くの指摘で変換ミスを修正, 特に4章終わり近くの一文脱落を追加.
2026.01.10	V1.03	亀山誠氏らの指摘で変換ミスを修正. ダサイ表紙をAIに作らせた.
2026.01.10	V1.04	多くの指摘で変換ミスを修正. 10章の一文脱落を追加.